山嶽寮

甲南山岳会通信 第６９号　　２０１４年１０月

甲南山岳部・甲南山岳会

山　嶽　寮　　甲南山岳会通信 第６９号　　2014年（平成26年）10月

山岳会の現状報告　平井幹男　……1
中井久夫氏が文化功労者に選ばれました　……2
山岳部と私　中井久夫　……3

紀行・山行

ロシア・シベリア鉄道の旅　水渡清夫　……4
モンゴル一人旅　塩崎将美　……7
バイクで岬を巡る旅　東北編　安井　正　……11
信濃俣河内　沢登り　山本恵昭　……14
アイスクライミング　アソート　谷　勇輝　……16

随　想

ヤルカンド　飯田　進　……18
孫を訪ねて2000里　塩路晃二郎　……22
高校２年生の大学山岳部「仮入部」の思い出　白川浩平　……25
消防署員の一日（仕事編）　谷　勇輝　……33

エッセイ

山の資料箱から　雨宮宏光　……35

訃　報

訃報・関　集三 様　……54
訃報・芦田匡平 様　……55

会員短信

秋の集会 / 総会・慰霊祭への出欠はがきから　……56

報　告

秋の集会　……65
定時総会 / 慰霊祭　……66

ホームページから

山行とつどい　……68
残しておきたい書き込みあれこれ　……81

山岳会の現状報告

平井幹男　(昭50文)

山岳会のHPに、夏の山行などがちらほらと掲載される今日この頃です。山岳会の諸兄におかれましては、益々元気でお過ごしの事と存じます。

さて、来年90周年を迎える山岳会でありますが、大学山岳部唯一の部員であった武田嬢が3月に卒業し、いよいよ部員ゼロの状況となってしまいました。摂津会（甲南大学体育会OB・OG会）においても、部員不足が大きな問題となっています。隣の部室で人数を誇っていたワンダーフォーゲル部も、部員数3～4名で活動をしている様子。山に行く若者が減ったのか、体育会そのものが嫌われているのか、淋しい限りです。

しかし、山岳会に於きましては、20歳代の谷会員のアクティブな山行に始まり、比較的若手（？）の50歳代山本・大森会員、60歳代井上・松下会員や70歳前後の浪川・塩崎・柏・武田・安井会員、さらにもう少し上の森本・越田・雨宮会員など、元気に活動されています。山岳会のHPで報告を拝見する度、山岳会は希望に満ちた会であると確信しています。

山岳会としての行事も、4月の山岳会総会・慰霊祭、10月信州に於いての秋の集会と、参加人数の増減があるにせよ、きっちりと継承され、今日に至っています。

また、これとは別に、山本会員主催による5月GWの山行、6月スズコ取り山行、夏の沢登り、11月の蟹と茸の会。飯田会員主催による1月の雪見会など（そのほか漏れているものもあるかと思いますが）、さまざまな会が催されております。このように、会員同士の集まりも盛況であり、益々の親睦が図られていることを嬉しく思っております。

しかし、山本会員から谷会員までの約25年間の会員が、ほとんど行事に参加していないという状況もあります。今後も滞りなく山岳会の活動を続けていくためには、この間の会員を山岳会に呼び戻すことが大切と考えます。

来年の90周年につきましては、準備委員会を立ち上げ、検討しているところです。できるだけ多くの方々にご参加いただき、有意義な時間をお過ごしいただきたいと思っておりますので、ご意見がございましたら遠慮なくお寄せください。

90周年を素晴らしいものとするためにも、今後の山岳会を盛り上げるためにも、会員の方々には少しでも多く、山岳会の集まりに足をお運びいただきたいと思っております。旧制OBから直近の高校・大学卒業生に至るまで、山岳会の行事にご参加くださる方が増えますようにと、現執行部一丸となって頑張ってまいる所存です。

これからも皆さまのご協力を賜りますよう、何卒宜しくお願いいたします。

中井久夫氏が文化功労者に選ばれました

甲南山岳会会員 中井久夫氏（新高27）が平成25年11月、文化功労者に選ばれました。文化功労者は、文化の向上発達に関し特に功績顕著な方を文部大臣が顕彰するものです。また、文化勲章叙勲者は文化功労者に選ばれた方々のなかから選考されます。

今回の顕彰は、長年にわたる評論・翻訳の功績が評価されたものです。栄えあるご顕彰を心よりお祝い申し上げます。

ーご略歴ー

昭和21年旧制甲南高等学校尋常科入学、学制改革により昭和27年新制甲南高等学校卒業。京都大学法学部入学、結核による休学を契機に医学部へ転部、精神科医となる。京都大学ウイルス研究所、東京大学医学部付属病院分院、名古屋大学などを経て昭和55年神戸大学医学部教授。

平成9年甲南大学文学部教授、平成14年兵庫県こころのケアセンター所長。

医学博士。神戸大学名誉教授。甲南大学名誉博士。

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

中井先生は医学者として臨床・研究・教育に携わられ、ご専門の精神科領域の著作・翻訳をはじめとして、随筆や訳詩など著書は多岐にわたります。学園広報誌「甲南Today」45号（平成26年3月）には文化功労者顕彰記念のインタビュー記事があります。また、同誌 10号から29号に連載された「鳩杖」を毎号楽しみに読まれた方も多いのでは。

山岳部の思い出を綴った「敗戦直後の山岳部北アルプス行き」（山嶽寮 第62号掲載）は随筆集「日時計の影」（みすず書房刊）にも収載されています。収載にあたって加筆された部分もありますので、いちど読み比べられてはいかがでしょう。また、ホームページに寄せられた書き込みも本誌に掲載しています。（ 81ページ～84ページ ）

（編集）

山 岳 部 と 私

中 井 久 夫　（新高 27）

甲南高校尋常科に昭和21年入学組が、昭和25年に山岳部に大量入部した。それは種を明かせば、日本アルプスをはじめ長野県やその他の中部山岳地帯に行ってみたかったからである。なぜ行ってみたかったのか。高山植物が咲き、白樺林をなしているところが見たかったからだと思う。なんだそんなことと今では思われるだろう。強いて言えば、東京の同齢の者と違って軽井沢も行きにくいということがあった。それでも私たちは一応芦屋のロッククライミング練習場に行ってザイルで岩場を登るというようなことをやった（やらされた？）。そして、猛烈に混雑した当時の列車の通路や座席の下に横たわって行ったのである。

敗戦直後は柔道や剣道は部活動も連合国が禁じた。そういうこともあって部活動抜きで学生生活をはじめた生徒が多かった。私は国語の時間に島崎藤村や堀辰雄を習って信州や信州の風物、たとえば、白樺林やリンゴ畑を見たことがないのに気づいた。

まず万葉集の舞台である奈良県から探訪旅行をはじめたが、それは母親の出身地であったからで、友達を親戚に泊めたりなんかして困ることはなかった。そこで友人のグループができた。

今から思えば私は山岳部というよりも信州への憧れに惹かれて、2年生の夏に穂高連峰まで行ったのであろう。そして、大正池をはじめて見たり、結局は北アルプスにテントを張って、すごい雨の中を3日過ごした。

前田、飯田、坂口、そして私などはこのテントのメンバーで山岳部にあまり顔を見せない方だったと思う。いや甲南の山岳部の部室には顔を出しても、山登りはこのときが本格的な登山の最初で最後だったかもしれない。少なくとも私はそうである。山岳部員になったのも記憶の間違いでなければ、柳澤だけであったかと思う。しかし、甲南の山岳部というのは私の頭から消え去ったわけではなくて、今も鮮やかに記憶されている。

そして、当時、甲南の山岳部は初登攀の記録もいくつもありながら、死者を一人も出していなかったという点で尊敬を集めていたのではないかと思う。

山岳部にいたことはその後の私の生活や臨床を大きく規定している。

たとえば、荷物を背負ってはじめて上高地に入ったとき、みな自分の背負っている荷物が一番重いと思っていることに気づいた。これは精神科医として患者の治療に役立つ考えのもとになった。自分の仕事が一番重いというのは私も考えるが患者さんもそう考えていることだ。患者さんに言って通じることのひとつに、治るとは山を下りることであるということがある。実際は降りはじめが一番大変なんだが、降りてゆく過程というのは高山植物が咲き乱れている最初の頃ではなく、暗い森の中を黙々と歩いてゆく途中のことが一番大切なのだ。

そのほか山登りで学んだことはいっぱいある。ほとんど実績のない、部室に顔を出すだけの部員になったけれど山行きの経験は私の中に生きている。

ロシア・シベリア鉄道の旅

水 渡 清 夫 （昭40営）

昨年（2013年）の春、越田さんから「9月ごろシベリア鉄道に乗ってバイカル湖方面へ行ってみようと考えているけど、参加しないか？」とお誘いを受けました。

それを聞いてその時思ったのは

・ロシア？

訪れたことが無い、ようわからん大きな国、これはいい機会や！

・シベリア鉄道？

小学生の頃、先の戦争で満州方面に出兵していたと言う担任の先生から聞かされた「…満州は広いんや、汽車に乗って、行っても行っても毎日おんなじ景色が続くんや… （ホンマかいな？と思っていた）」という広大なシベリア平原を遠くモスクワまで走るというシベリア鉄道。これは願ってもないチャンスをいただいた！）

・バイカル湖？

（海みたいに大きな、瀬戸内海よりずっと大きな湖。是非とも行ってみたい！）

等々で、なんかロマン（あんまり好きな言葉ではないけれど）感じるなぁ…。で参加を決め家内に話すと「私も行きたい！」（やっぱりそう来たか…）で夫婦で参加となりました。

メンバーは、この旅行を企画された越田さんご夫妻、岐阜（各務原）から田邉さん、神戸から塩崎さん、に我々夫婦の計6名。

小人数でフットワークのよい、個性的な楽しいメンバーで、出発！となりました。

おおよその日程と訪れた都市

・2013年9月2日～13日の12日間

・成田から空路でハバロフスクへ

（同市で1泊）

・ハバロフスクからシベリア鉄道でイルクーツクへ

（車中で2泊）（同市で1泊）

・バイカル湖

（湖畔のコテージで2泊）

・イルクーツクから空路でハバロフスクへ

（機中泊）（同市で2泊）

・ハバロフスクから再びシベリア鉄道でシベリア鉄道の起点ウラジオストックへ

（車中で1泊）（同市で1泊）、

そして帰国、成田へ

アムール川

我々が行く少し前にアムール川の上流で大雨。それがハバロフスクに回ってきて同市近郊は静かに増水氾濫で水浸しになっていた（日本の河川氾濫、洪水とはかなり様子は違いますが）。中国との国境を流れるこの大陸の大河の対岸は遥かに霞み、大きすぎてどちらに向かって流れているのかハッキリとは判らない。

ハバロフスク・イルクーツク・ウラジオストック

各都市の市内観光では旅行社手配のいずれも美人でチャーミングなガイドがついて真面目に案内してくれる。

これらの各都市は、人口もそこそこあるロシ

アの中、東部の主要都市ですがソ連時代の名残が市内には数多くあり（レーニン広場、カールマルクス通り等）、いかつい、重量感のある、でかい建物やモニュメントが駅前の大きな広場や大通り、公園などに面して建っているのが印象的。これらの都市はいずれも道路網などのインフラが十分ではなく市民の出勤、帰宅の時間帯はひどい交通渋滞が発生していた。その渋滞の元凶、道路にあふれる乗用車はほとんどが日本の中古車であることに驚かされた。

ウラジオストックのスーパーマーケットにはテレビ、パソコン、冷蔵庫など主要家電製品のほとんどがサムスン等の韓国製品で占められており日本製がない。探し回ってやっと「象印の電気ポット」が少しだけ展示されてあるのを見つけガッカリ。話には聞いていたけれど「これほどひどいこと（韓国製品に完全に駆逐されている）になっているのか！」と情けない思いに。

シベリア鉄道

ハバロフスクからイルクーツクへのシベリア鉄道は食堂車の付いていない列車で（ボルシチみたいな簡単なものと飲み物を出すビュッフェはあったが…）やや殺風景な普通の寝台列車と言ったところ。三日間の列車の長旅を食堂車で美味しく飲み食い、と期待していたのでガックリ。列車で移動中の食事は日本から持ち込んだインスタントのラーメン、お粥、などで凌ぎつつ停車駅のキオスクの様な売店で食糧を調達。これはこれで不自由ながら如何にもロシアのローカルを旅しているという感じで面白い。

4ベッドのコンパートメントを三室予約。各部屋に2人、まずまずの快適空間でした。
（単身参加の田邉さんと塩崎さんは列車のコンパートメントだけでなくホテルもすべて同室となりました。）

シベリア鉄道はモスクワに至る長距離路線で乗客も様々、ローカルの人々が乗り降りし現地の人々との触れ合いもあり面白く退屈しない。ユックリ悠々と安定して走るシベリア鉄道の車窓風景はバイカル湖に近づくにつれ、徐々に標高が上がり、白樺が黄色く色づき広大な大地を走っている実感があり素晴らしい！

この長大な列車に大勢の韓国人観光客が乗っており、彼ら（オバちゃんの含有率が高い）は元気で活力旺盛ワイワイと賑やか、経済成長を続ける国の勢いを表しているように思えた。

バイカル湖

バイカル湖では冷たい雨に降られガスって見通し悪く、「海のように大きい」は実感できず。水族館に行き今も拡大を続けていると言うこの巨大な湖の全貌、知識を教えてもらいました。バイカル湖は湖と言うよりやっぱり海のようなイメージですね。

夜、バイカル湖畔のコテージのあずま屋で寒さに震えながら開いた酒盛りが…安くて旨いバイカル湖の魚（鱒のような？）のソフト燻製を食いながらウオッカのきついワンショットが…楽しく懐かしく思い出される。

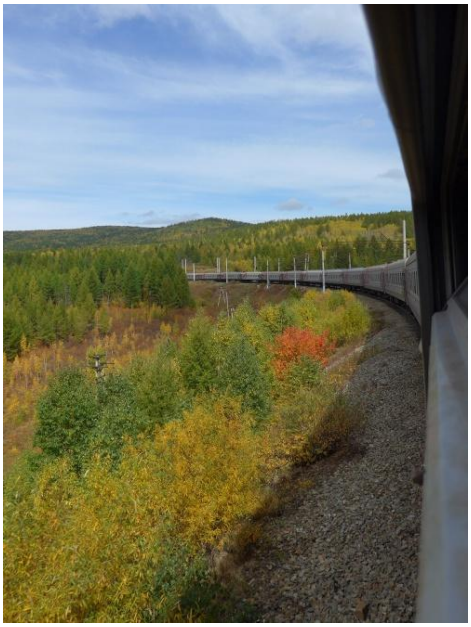
またかの地では、日本人墓地にお参りし黙祷を捧げ、また日本人戦没者の慰霊公園を訪れ戦争で亡くなられた方々に思いをはせました。

この旅行のメンバーは田邉さん以外みんなビール、お酒大好き人間でよく飲んでよく食べました。

昔、「ロシアのビールなんて馬のションベン

…みたいなもんや」とかいう悪い評判があった様ですがそんなことはありません。旅行社推薦のビール「バルチカ№3」はじめ各地のビールもそこそこ旨く、魚の燻製、ソフトサラミなど安くて美味しいものもあり十分楽しめました。

このロシア・シベリア鉄道の旅は有名観光立国（フランス、イタリアみたいな）のツアー旅行とは違うユニークで面白い、そしてメンバーに恵まれた印象深い旅でした。

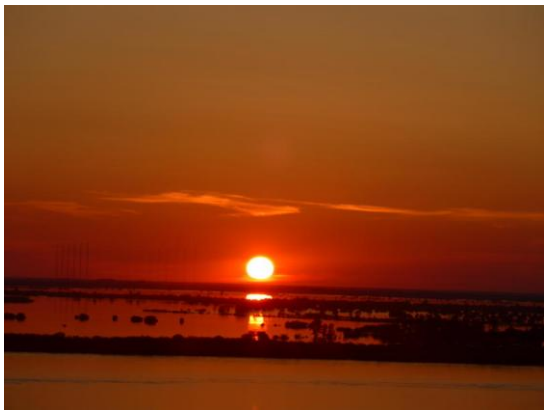


（シベリア鉄道・車窓風景）

最後になりましたが、写真は塩崎さんに提供してもらいました。有難うございました。

2014年7月

（ハバロフスク市内、メンバー全員で）



（太陽がアムール川の向こうの地平線に沈む）

モンゴル一人旅

塩崎将美　(昭41経)

モンゴル、なんとなく前から行ってみたいと思っていました。大平原、遊牧民、ゲル、ゴビ砂漠等を見てみたいなと。

2013年(平成25年)9月、バイカル湖に行くことになりました。イルクーツクとウランバートルは汽車が走っている、調べると飛行機も飛んでいる。ロシア旅行に引っ掛けてモンゴルに行こうと計画しましたが、ロシア旅行社(バイカル湖旅行の手配を依頼した東京の旅行会社)に責任もって手配できないと断られました。ロシアのビザはホテルや移動のスケジュールを細かく決めてから発行され、旅行中はそのスケジュールを変更できないとの事、ソ連時代の制度が残っているのかややこしい。

調べているうちにますます行きたくなりロシア旅行の前に行くことにし、米山先輩に現地ガイドエギーさんを紹介してもらいました。見積もってもらうと2,949ドル、高い。一人でガイド料／ジープ代を負担する為仕方ないかと思いながらも値段交渉、1,741ドルで決着。飛行機代は関空からの直行便を124,490円で購入。

8月21日12時20分、関空出発、4時間半のフライトでウランバートルに到着、イミグレを出ると名前を書いた紙を持った人が待っていました。こんにちわ、エギーさん？と声をかけるも無言。話が違うやん、言葉通じへんの、えらいこっちゃ。そのとき彼が携帯を差し出してきました。電話からもしもしと日本語、やれやれ、エギーさんは仕事中でお兄さんが代わりに迎えに来てくれたようです。彼の車でホテルに向かいました。空港を出ると道路は工事中で渋滞、途中から道路を離れ脇道へ。轍の跡だけ残る川の傍を走ったり、多分何処かの工場か何かの門を開けて通過したり。日本大使館の横でエギーさんを拾い1時間ちょっとでホテル着。日本のビジネスホテルの様な部屋で清潔です。お湯も出ました。Wi-Fiも通じます。旅行中Wi-Fiが通じたのはここだけでした。シャワーの後エギーさんと近くのレストランへ。モンゴル料理、生野菜のサラダ、野菜炒め、焼きそば、味も悪くなく美味かったです。

22日朝は国内線1時間半のフライトでムルンへ。費用節約の為エギーさんの同行を断り一人旅です。飛行機を降り滑走路を歩いて待合室に行きましたが、出迎えの人達の中に名前を書いた紙を持っている人が居りません。此れは困った、ドライバーが待っていてくれるはずなのに。旅行会社のプラカードを持ったおっちゃんが、日本人かと聞いてきました。そうだと答えると付いてこいと言います。カタコトの英語(私の英語もひどいですが彼の英語は私以上にひどい)私の名前もエギーさんの名前も通じません。旅行会社の名前を指差すだけ、そんな旅行会社の事は聞いていません。でも彼が日本人を迎えに来ているのは間違いないようです。飛行機に乗っていた日本人は私だけです、何とかなるわと彼に付いていく事に。空港を出て15分ほどで街中へ、ドライバーが銀行らしき建物へ用事に行ったのを30分程待たされ、いよいよ草原のドライブ。時々羊の群れが見える以外行けども行けども起伏はあるものの草原の中を走りました。道路はそれほど悪くなく快適なドライブ。1時間ほどで針葉樹が出てきました。さらに30分、突然針葉

樹のあいだから湖が見えました。フブスグル湖です。大きい。琵琶湖の4倍の大きさとの事。この湖の水は北に流れてバイカル湖に流れていくそうです。湖目指して降り始めてしばらくすると車は道路を離れて左折、轍が残るだけの草原を走り始めました。

川が出てきても橋は無し、浅いところを選んで渡渉していきます。勿論車は揺れに揺れました。ようやく湖の側の道路に出ました。どうやらショートカットして走ったようです。ようやくツーリストキャンプに到着。

牧場の様に木の柵の囲いの中、に30程のゲルが緑の草の上に並んでいます。建物が入口と奥に2棟、湖に近いほうが食堂、奥がトイレとシャワーです。トイレは水洗ではありませんが使えそうです。シャワーはお湯が出ると言うので滞在中2回トライしましたが水がチョロチョロ、諦めました。

ここでも誰も英語をしゃべりません。かのドライバーが一番通じます。携帯を借りてエギーさんに電話し、間違いなく手配してくれた宿であることを確認しホッとしました。客は韓国人の若い男性が4人とモンゴル人が2家族。韓国人は食堂で食事していましたが家族連れは自炊のようでした。

ゲルの中はベッドが3個、真ん中にストーブ、掃除が行き届いていて清潔です。電気は裸電球がひとつだけ。発電機を回した2時間ほど電気がつきました。後はローソク。晩御飯は野菜と肉(たぶん羊)の炒め物、朝は目玉焼きとパンに珈琲、問題なく食べられました。

朝起きて、馬でのトレッキングを申し込みましたが約束の時間になっても馬は来ません。そのうち馬は山の向こうへ行って居ないと訳の分からない断り。仕方ないので裏に見えている山へ水とクラッカーを持ってハイキング。カラマツ林を踏み跡を頼りにノンビリ1時間半登り稜線へ。木が大きすぎて眺めは無しでした。帰り道キャンプの見える丘の上に、ヒマラヤで見るチョルテンの様なものがありました。木で組んで周りにカラフルな旗を飾り中には馬の頭蓋骨と思われるものがありました。

湖の水は非常に綺麗です。透明度はかなり高いように思われました。太陽が出ると水の色が変化します。日本にこの湖があれば人気リゾート間違いなしでしょう。2日間ノンビリ過ごしました。

23日、昼の飛行機でウランバートルに帰りましたがムルンの飛行場で日本人の若い男性に会いました。彼はフブスグル湖の北西の川にイトウを釣りに来たとのことでした。残念ながら釣れなかったとのこと。この旅行中会った日本人は彼と帰りの飛行機に乗り合わせた20人ほどのツアー客だけでした。

ウランバートルの飛行場でエギーさんと落ち合いそのまま西へ100km程ドライブ、ホスタイ国立公園へ。ここのキャンプはトイレが水洗、シャワーはお湯が出ました。モンゴルも観光設備がだんだん良くなってきているようです。夕方キャンプから奥へ轍の跡を30分程走りモウコノウマを見てきました。一度絶滅したモウコノウマ、ヨーロッパの動物園で繁殖していた馬を貰い受けてこの国立公園に放し繁殖させたとのことです。小さな池の周りで20頭ほどの馬が水を飲んだり草を食べたりしていました。普通の馬に比べ小ぶりです。

24日、200km程西へ走り古都カラコルムへ。世界遺産エルデニ・ゾーを見学。

さらに50km程走りエギーさんのお婆さん達の放

牧地へ。草原にゲルが4個、奥さんのお兄さん家族と叔父さん家族、3家族が共同で放牧生活をしています。羊が200匹程と牛、馬。電気は無くソーラで発電、バッテリーに充電しテレビがありました。水は井戸へ汲みに行きタンクに貯めています。トイレは草原、100mほど離れた所に小さな二つ折の屏風、座ったら首から下が隠れます。大きな穴の上に二枚の板が渡してあります。

私はゲルの正面のベッドを借りシュラフを広げて寝ました。真ん中にあるストーブで調理。エギーさんの奥さんと息子さん二人、普段はウランバートルに住んでいますがたまたま居合わせました。長男は4才、断髪を済ませ馬を上手に乗りこなしていました。

さすがモンゴルの子供。次男はよちよち歩き。

放牧民は朝日が出たら起き出し乳を搾り、家畜を草の多い所に移動させ一日中家畜の世話をしています。バターやチーズも作っています。私もやりたかった乗馬に挑戦、夕方牛を集めに行くエギーさんについて行きました。平地はまだしも斜面が急になるとバランスがうまくとれません。

朝はパンとお茶、昼と夜はうどん、うどん焼き、シチュウ、野菜炒め、日本のものと違いますが結構食べられました。奥さんが料理をしてくれます。生野菜はあまり食べないようで一度だけきゅうりがでました。羊の肉を天井から吊るしています。料理に使い、時々誰かがナイフで削りながらそのまま食べています。

2泊してウランバートルへ8時間のドライブ、途中道端で立っている人を見つけると車を止めてエギーさんが何やら話しています。値段交渉でしょうか、何度か止めては人と荷物を拾います。私は助手席ですからユックリ座っていましたが後ろの席は子供二人と大人7人、ギュウギュウ詰め、私がお金を払いチャーターしている車でエギーはアルバイトしているようです。

ウランバートルは夕方のひどい渋滞、そのうえ客をあっちこっち送るのでホテルに着いたら真っ暗、観光はできませんでした。翌日早くに空港へ、帰国。

この旅では海外旅行で現地通貨への両替をしないと言う事を初めて経験、アルコール以外全てエギーさんに支払った料金に含まれていてホテル代も食事代も水代も、自分で支払いすることはありませんでした。酒は関空の免税店で買ったウイスキーをちびちびやっていました。おばあさんのゲルでよばれた馬乳酒は酸味のあるヨーグルトドリンクの様な感じでした、アルヒ(蒸留酒)は結構きつい酒でした。

モンゴルに行かれる方は日本で乗馬を稽古して出かけられることをお薦めします。馬に乗ってトレッキングするツアーもあります。季節は7月がベストの様です8月後半は結構冷え込む事がありイトウを釣りに来ていた人は雪に降られたと言っていました。

モンゴル、草原を見てきただけ。でも満足の旅でした。

ゲルのツーリストキャンプ

さすがモンゴルの子供

世界遺産エルデニ・ゾー

満足の旅

甲南山岳会ホームページのご案内

甲南山岳会のホームページ、閲覧数はもう 20 万回を超えました

ホームページの「掲示板」は会員相互の連絡に重宝で、近況はじめ山行のことや飲み会のこと、部室にたむろしていた頃のように情報が耳に入ってきます。

「アルバム」では会員の山行の様子や街での姿が見て取れます。懐かしい写真も寄せられます。

「konan alpine club」「甲南大学山岳部」で検索して下さい。

バイクで岬を巡る旅　東北編

安 井　正　(昭40経)

2005年6月から7月にかけて北海道の岬を巡った。(山嶽寮第68号「バイクで岬を巡る旅　北海道編」)

暑さも一段落したころ、今度は本州の岬を巡ろうと先ず東半分の日本海側を北上して北端から仙台までツーリング。

「バイクで岬を巡る旅　東北編」(日本海側～竜飛～大間～仙台)　2005年9月の記録。

９月８日　(晴れ)

神戸～小浜～越前海岸～片山津　323km

敦賀でR8～河野海岸道路～R305と海岸沿いをひた走る。この一連の道路は車が少なく海岸線風景も良く走り易いが、波が高くなると通行止め(途中ゲートあり)となるようだ。

「越前岬」の灯台に立ち寄り、東尋坊を覗いて片山津温泉の民宿に入る。

９月９日　(曇り後晴れ)

片山津～能登半島「禄剛崎」～富山　404km

金沢の渋滞を避けようと北陸道～能登有料道路を乗り継いで羽咋よりR249、県道を走る。途中能登金剛やヤセの断崖など奇岩・海岸線美を堪能している内に「禄剛崎」に着く。半島の東側は入り組んだ海岸線で、県道・R249・R190の海岸美を楽しみ、七尾～氷見～高岡から富山の民宿「中野」に。

此処は立派な造りの日本家屋と庭園があり、二間使用で民宿のイメージは無い。

９月１０日　(概ね晴れ)

富山～糸魚川～柏崎～新潟・紫雲寺町　288km

今日はR8をひたすら北上。

９月１１日　(曇り後晴れ)

新潟～鳥海ブルーライン～秋田　286km

R345～R7を北上し、遊佐町吹浦から鳥海山五合目「鉾立」を経て象潟までの鳥海ブルーライン40kmを走る。

山岳ワインディングロードからの庄内平野、日本海、大きな山塊の眺めと走り心地は今迄の単調な国道走行の後だけに気分は誠に爽快なり。

爽快ついでに象潟の温泉施設に入る。鳥海の眺めは良く入浴料350円も驚き。

今夜は秋田の姪宅に世話になる。

９月１２日　(曇り後晴れ)

男鹿半島・入道崎～能代へ日帰りツーリング265km

半島南面は断崖の海岸美、ここも全く車に出会わない空いた道路と贅沢な気分。

崖が海に落ち込む入道崎には黒帯を三本巻いた灯台が立つ。俗化されていなく雰囲気良し。半島北面のまるで有料観光道路のような立派な道を大潟村に向かう。

途中寒風山は350m程の草原の山で山頂に展望台があり、半島の山並み、鳥海山八郎潟の眺望が広がる。広大な田園風景の中を能代まで足を伸ばして秋田に戻る。

９月１３日　(晴れ)

秋田～鰺ヶ沢～竜飛岬～蟹田　335km

能代から五能線と綾を織るR101(大間越街道)を左に日本海右に丘陵を眺めて北上。

途中白神山北部にある大小33の湖沼が点在

する「十二湖」に寄り道する。ブナ林の中の青い湖沼群は関西には無い透明感だ。

この大間超街道は海岸線美が圧巻で行合崎、千畳敷を過ぎると鯵ヶ沢。（数年後ここでスキーが出来るとは夢にも思わず）

屏風山広域農道に入って出来島の世界最大規模の最終氷期埋没林を見て岩木川の汽水湖である「十三湖」を右にしてR339で竜飛を目指す。小泊からのワインディングロードは海岸美、道路状況、車の少なさ全て言う事なし。

「竜飛岬」は強風の地、太宰治が逗留した宿、石川さゆりの演歌、長さ400mの階段国道（車道から漁港への階段）、津軽海峡を挟んで北海道白神岬まで20kmの本州の地の果てという売りながら人と観光施設が一杯。早々に半島東面を南下する。「鋳釜崎」、「高野崎」にて竜飛、白神岬、大間崎をぼ～っと眺めながらのんびり走って蟹田の民宿に着く。

９月１４日　（大雨）

蟹田で沈殿

夕べからの雨は雨脚を一段と強めて終日降り、連泊する事とする。

９月１５日　（快晴）

蟹田～十和田湖～酸ヶ湯～むつ市　359km

一昨日夜からの雨は止み一転抜ける様な快晴。せっかく本州の北端まで来たので、今日は海岸線を外れ奥入瀬、十和田湖、酸ヶ湯温泉を巡ってから下北半島に向かう事とする。青森市内を通過しR103を南下して奥入瀬渓流沿いに走るとポスター等で見る鬱蒼とした林の中の地を這うような川面や滝が散見されるが、昨日までの雨のせいか茶色に濁りイメージと異なる。しかし十和田湖の吸い込まれそうな深い緑青色は目に染みる。R103～R454～R102で湖を一周しR103に戻り、八甲田山山麓の酸ヶ湯温泉で湯煙の向こうの老女を一瞥して青森に戻る。

十和田湖往復の一連の道路の素晴らしさは無料では申し訳ない気分。

青森からR4でむつ市を目指す。途中国道から外れ夏泊半島を一周、「夏泊崎」は目の前に下北半島が見え突端の感じは無いが、一周する道路は海岸線ぎりぎりの道幅が広く走っていて爽快感あり。野辺地町から一時間程でむつ市内に着いたが早かったので日本三霊場の一つ恐山へ行ってみる。八峰の外輪山に囲まれた盆地で酸性の強い深緑の宇曽利湖があり、湖の北面が荒涼とした岩とガスと湯の湧出地帯で曹同宗の寺がある。

その近くに板張りの温泉があったが、浸っている人も無く早々に異様な雰囲気を後に宿に帰る。

９月１６日　（快晴）

むつ市～大間崎～尻屋崎～八戸　345km

宿からR308で大間崎に向かう。このルートもカーブとアップダウンが連続する山岳ワインディングで仏が浦に至るまでの約30km強、すれ違った車は3台のみ、仏が浦では砂浜まで降りて奇岩を見入る。

「大間崎」は大勢の観光客と店舗が並ぶ観光地。本州最北端の灯台は岬から500m先の小さい岩礁に黒帯を二本巻いて佇む。

半島東面のR279はフラットな走り易い道路で、むつ市まで戻り県道9号で「寒立馬」が放牧されている「尻屋崎」に向かう。人も店もなく草原が岩に変わって海に落ちていく。

そこに純白の灯台がポツリ、絵に描いたような岬の雰囲気が一杯で好きな岬の一つだ。

そこからR9、県道248は林間ハイウエイで気分は爽快。むつ市に戻りR338で六ヶ所村を越え三沢に入ると三陸温泉の看板が目に入り、250

円払ってゆっくりする。

40kmほど走って八戸市内の民宿に到着。

９月１７日　（曇り後晴れ）

八戸～釜石～大船渡～気仙沼　361km

今日は岬というよりリアス式海岸美を堪能する事とする。

種差海岸の巨岩と砂浜のコントラストを楽しみ久慈から県道へ外れ北山崎、鵜ノ巣断崖の絶壁に身が竦む。田老を過ぎて浄土ヶ浜の景観、宮古～釜石～大船渡～陸前高田を経て唐桑半島の突端「御崎」を目指す途中「巨釜・半造」の奇岩を目にして夕刻気仙沼の民宿「金港館」に入る。この宿も立派な日本家屋で海の幸を主にした絶品の料理もさることながら上品な女将の手垢の付かないもてなしに心が休まる。

９月１８日　（晴れ）

気仙沼～牡鹿半島～松島　243km

R45を南下し女川から牡鹿半島の突端まで往復する。石巻に戻って東松山市から奥松島の宮戸島に渡って大高森展望台から松島を眺めるが、瀬戸内の多島海に馴染んでいる為か「ふ～ん」という感じ。蔵王連峰も望めず早々に松島町の民宿へ。

９月１９日　（曇り）

松島～仙台港フェリー乗り場　25km

ゆっくり宿を出てターミナルビルで時間をつぶし、太平洋フェリーの名古屋行きは12時20分出港。

９月２０日　（曇り）

名古屋港～神戸　217km

9時20分着岸。R1で栗東まで走ってきて車の多さと排気ガスに嫌気がさして、名神高速に入って道を急いでしまう。14時40分帰宅。

旅を終えて

13日間　3、451kmのツーリングは今回も無事故、無違反、故障なしで無事終了。

印象的な岬は「入道崎」と「尻屋崎」。有名な岬は騒々しくて再び行こうと思はない。

北海道、東北を走っていて思わず息を呑む海から屹立する奇岩、海に落ち込む断崖、滑らかな砂浜等の陸地と海の境目が創りだした自然美には感嘆するのみ。

また景観美と匹敵するほど旅の気分を良くする物に、有料でも文句の言いようない道路の素晴らしさがあった。

手入れされた路面、十分な道幅、一桁NO国道以外は極端に少ない交通量と少ない信号、どれをとってもバイクで走る者にとって有難い事この上なし。

東北の岬

（福井県越前岬・石川県緑郷崎は省略 編集）

信濃俣河内　沢登り

山 本 恵 昭　(昭56理)

8月18日。今夜は全身筋肉痛の体に鞭を打って、サザンオールスターズのコンサートに行ってきました。といっても、場外タダ聴きです。散歩コースである神戸総合運動公園の滑り台の上に腰掛けて、ビールを片手に、姿は見えませんが臨場感と花火を楽しみました。

なぜ、筋肉痛なのか。それは、年齢も省みず南アルプス信濃俣河内でどっぷりと沢登りを楽しんで、今朝帰ってきたからです。メンバーは昨年の赤石沢と同じ、浪川さん、大森さん、私の3名。

8月13日夜発で大井川畑薙ダムへ。

14日　林道を行ける所まで車で入り、7:30いよいよ出発。吊り橋の横から降りて、水の枯れた広い河原をひたすら歩く。やがて水流も現れ、渡渉を繰り返し快調に進む。

このペースでは、午前中にビバーク予定地についてしまうと思ったのは、大きな勘違い。降り立った河原は、25000分の1の地図で吊り橋が書いてある所と思い込んでいたが、実はもっと手前の地図でダムの水が書いてある部分だった。その後は地形を希望的観測で読み違え、もう三俣かと思った所はカバ沢出合であった。三俣に12:30着、ここでやっと正しい現在位置に気づく。

釣りでもしながらのんびり行けば良いかという気持ちから、ちょっとあせってペースアップする。第1ゴルジュを越えて、廃墟のような折立沢出合小屋の下の台地にテントを張る15:00。お隣で先行4人パーティがタープ下で調理中。

早速イワナを狙うが、釣り荒れているのか、ミミズでも毛鉤でも全く当たり無し。先行4人パーティは1尾収獲したらしい。イワナはなくとも、焚火三昧。イワナ塩焼きの代わりに、浪川さん差し入れのベーコンを焚火であぶって食べる。美味しい。いつもながら、夜遅くまで飽きずに焚火を楽しみ、焚火横で寝てしまう。

15日　先行パーティに先を譲ってゆっくり7:30に出発するが、第2ゴルジュ出口で追いつく。4mほどの滝を越すのに足場が無く苦労している。残置ハーケンにつないだシュリンゲを使って振り子の要領ぶら下がり、さらに斜め上からお助けロープで引き上げている。後続の我々も、同じように引き上げてくれるというので、お言葉に甘えることにする。

第3ゴルジュはロープを出して右岸を大高巻き。沢が開けて西沢出合11:30。先行パーティは本流の春木沢を行くそうである。我々は西沢に入る。小滝をいくつも越えていくと、滑滝20mが現れる。左岸を直登しようと試みるが、中段から上が滑りやすく諦める。左岸のルンゼをつめて、高巻く。途中、雷が鳴り響き大雨となる。次の30m滝も左岸のガレ沢を登り、シカの足跡をたどって大高巻きをする。源流部はコケに覆われて美しい。2100m付近の二俣の台地にテントを張る15:30。雨の中、浪川さんが執念で焚火をおこし、濡れたものを乾かす。

16日　6:15発。沢は森の中のシダ原となり、やがて三吉平近くの登山道に合流する6:45。沢靴をトレッキングシューズに履き替える。

浪川さんの沢靴の底がほとんど剥がれかかっているので、イザルヶ岳南東尾根の踏跡をたどって信濃俣河内の三俣へ降り立ち沢通しに下山する予定を変更する。登山道を仁田岳まで行き、そこから踏跡をたどって、水の枯れた河原へ降りることにする。

仁田岳に10:15着。聖岳光岳の主稜線から離れているのでめったに来る機会は無いだろうが、南アルプス南部の絶好の展望台。ここからの南へ延びる尾根を下る。最初はハイマツなどの藪こぎで苦労するが、樹林帯に入ると獣道が沢山有り、それに導かれていく。地図と磁石、GPSを駆使して、2243m、1876m、1503mと小ピークと傾斜の緩そうな尾根をつないでいく。

途中で大森さんがクマを発見、幸い向こうが逃げてくれる。最後は出島のような地形のコルを経て、狙い通りの河原に降り立つ16:30。足取り重く吊り橋の横の急な道を登って林道をたどると、17:30やっと駐車地点に着いた。

信濃俣河内は、昨年の赤石沢に比べるとグレードが低いということで、少し気楽な気持ちで入りました。釣り人も結構入っていて、イワナが釣れなかったのが残念。しかし、それなりに充実感のある沢でした。特に西沢の滝の連続と美しい源流部が強く印象に残っています。豊かな森に包まれた美しい沢に魅了されました。

2日目　第3ゴルジュへ

1泊目　折立沢出会キャンプサイトでの焚火

2泊目　西沢源流キャンプサイト

2日目　第2ゴルジュ

3日目　西沢源流のシダ原

アイスクライミング　アソート

谷　勇 輝　（平21 理工）

八ヶ岳・アイスクライミング

tani　　12月31日

ご無沙汰しております。

12月は試験等であまり山には行けませんでしたが、八ヶ岳の南沢大滝・小滝へ2回(12月9-10日、21-22日)アイスの練習に行ってきました。

今年は氷の発達が早かったのですが、私たちが行った日は水氷でラインによってはウォーターアイスクライミング状態でした。

今回はいつもインドアジムで登っている同業仲間のアイスデビュー。インドアで登りこんでるだけあって、テンションかけずに登っていました。

来年はメンバー全員の実力を底上げして、米子不動や大谷不動などのアイスのマルチへ行く予定です。と同時に、フリークライミングや外のボルダリングにも積極的に行きたいと思います。

八ヶ岳・権現東稜

tani　　1月15日

松本在住の友人と八ヶ岳の東面の権現東稜へ行ってきました。

3連休でしたが、西面に比べて、東面はルートが長く人が少ないので3連休でも出会ったパーティは1組のみ。稜上は当然トレースなく久しぶりに15時間行動でラッセル三昧でした。

天候は安定していたので、－15度程度で風も弱く快適でした。

ルートについては、林道はトレースを借りて順調でしたが、尾根に取りつく付近でラッセルが始まり、ラッセル三昧。稜上はナイフリッジあり、Ⅳ級の岩登り2P 有りで楽しめました。

アイスクライミング

tani　　1月24日

先週、いつもの同業メンバーで大峰のシェイクスピア氷柱群へアイスクライミングに行ってきました。

今年は雪も多く、氷の発達も良く登りごたえがありました。

関西近郊で垂直の氷を登れる唯一の大峰は貴重な存在です。

大峰・グランドイリュージョン

tani　　2月14日

今週、日帰りで奈良県大峰山系の大普賢岳にある氷のマルチに行ってきました。

グランドイリュージョン（100m・3P・Ⅴ級）

氷結状態はとてもよく、関西とは思えぬほど迫力満点の氷に興奮しました。

今回は4人で登ったため、時間がかかりアプローチと下部の40m（Ⅳ級）の氷の登攀も含め、14時間行動で、車止めに帰ってきたころにはあたりは真っ暗でしたが、とても充実したアイスクライミングをすることができました。

（ホームページ掲示板の谷さんの書き込み、雪と氷に元気な様子を集めてみました　。写真ページは次にあります　編集）

八ヶ岳南沢小滝　1月31日書き込み

シェイクスピア氷柱群　1月24日書き込み

八ヶ岳・権現東稜のラッセル　1月15日書き込み

グランドイリュージョン（100m・3P・Ⅴ級）　2/14

皆様からのご寄稿をお待ちしています。

山嶽寮では「紀行」・「山行」・「随想」などに構成を分けていますが、実は、なんでもアリ。ファイルでお送りくださると編集がはかどります。

宛　先　編集担当 654-0141　神戸市須磨区竜が台　2-1-44-503 大森雅宏
電話／ファクシミリ　078-791-9600　メール　masa76@amail.plala.or.jp

ー 随想 ー

ヤ ル カ ン ド

飯 田　進　(昭38 経)

つれづれなるままに、日ぐらしテレビに向かいて、画面に映りゆくよしなしごとを、そこはかとなく、眺めていれば、あやしゅうこそ物狂ほしけれ。なんでテレビ局はこんなつまらんものばかり放映してるのか、タレントがばか騒ぎしているのを見せられる視聴者のことをどう考えているのか、あほ臭くなってスウィッチを切ってみたとて、ほかにすることがない。年寄は一日が長いのである。かといって本でも、と思うのだが。読む気力がもうなくなってしまった。銭でもあれば旅行にでも出かけるのだが、それがない。することがないので、本棚をあさっていると、以前旅したシルクロードの記録帳が出てきた。天山南路のルートを 20 日ばかりかけて、マイクロバスで走破した時のものである。

そこへ、山嶽寮編集担当からの原稿依頼がホームページに掲載された。恐る恐る、こんな原稿ありますが、掲載如何と申し出たら、一部分取り出して書いてください、とのことで、書くことにした。

ヤルカンド。

場所はタリム盆地の南西。北は天山山脈、南は崑崙山脈に囲まれた、東西約1500キロ、南北約1000キロの楕円型をした盆地がタリム盆地。ほとんどがタクラマカンという砂漠が占めている。その砂漠と山麓の間に点在しているオアシス。オアシスと言っても、砂漠に水たまりがあって、ヤシの木が三本、そこにラクダが繋がれている、といったような小さなものではない。車で通りぬけるのに、小一時間かかるような、大きなものである。そんなオアシスが、2・300キロごとに点在していて、それらを繋いでいるのが、シルクロードと言われる、古代からの交易路である。

その一つヤルカンドは、古代よりタリム盆地に栄えた王国の一つであり、後漢の時代、時の皇帝光武帝は、ヤルカンドの王である康に、この地の支配を任せた。その弟、賢が跡を継ぐとますます強大になり、パミール以東は賢の支配下に入り、ヤルカンドは一層栄えたと言われている。タリム盆地の各王国も、中国の皇帝の勢力や、支配欲によって興亡していった。その後15世紀末になって、大航海時代が到来し、16世紀にはイスパニア、ポルトガル、オランダ等がインド西海岸に産するコショウを中心に、香料貿易を盛んに行い、南海航路がシルクロードに取って代わった感があったが、18世紀に入り清国とホーカンドハン国との間に絹馬貿易が盛んに行われるようになった。此のころ、西にオスマン帝国が全盛を誇っており、ペルシアにはカジャール朝が栄え、北アジアのステップ地帯にはカザフ、ジュンガル、ハルハの三都が並び、西トルキスタンには、ブハラ、ヒバ、ホーカンドハンが盛んであった。ホーカンドハン国の貿易の二大拠点が、タシュケントとヤルカンドであった。このヤルカンドを狙って、清の乾隆帝が勢力を伸ばし、これに抵抗したブルハン、ウッディーン、ホージャ、ジハーンの兄弟は香妃の物語を残して敢え

無く消え去ったのである。その後時移り日が経って、このタリム盆地に一大探検時代が到来した。

その発端となったのは、1890年、タリム盆地でイギリス人が殺され、その調査に来ていたパワー大尉がクチャ（天山南麓のオアシス）の住人から樺皮貝葉に書かれたブラフミー文書一束を入手したことから、と言われている。彼はこれを古写経の権威であるヘルンレ博士に提供、博士はこれを4・5世紀ころ書かれた経典と判断した。これで世界中の東洋学者が色めきたった。このころロシアのブルジェワルスキーやドイツのリヒトフォーヘンの中央アジア探検、そしてそれぞれの弟子であるコズロフ、ヘディンの彷徨える湖、ロブノール湖の調査と地理的探検が行われていて、当然のことながら、古文化財発見にも目が注がれるようになった。これらの文化財発掘には西洋列強がこぞって参画し、なかでもイギリスのスタインやドイツのル、コックはたくさんの古文化財を故国に持ち帰ったので有名である。ただしスタインやル、コックが最初に持ち帰って、次にそこを訪れた人たちは、すでに蔓延っている「偽物」をつかまされた、と言われている。ヨーロッパに、お宝鑑定団なるものがあるなら、この地の経典類は、応挙や抱一クラスの偽物オンパレードに違いない。これに遅ればせながら参加したのが、大谷光端である。光瑞は後に西本願寺22世門主となるが、此の時未だ27歳、イギリス留学を終えたばかりであった。時1902年。彼はロンドンからペテルスブルグへ行き、そこで一切の準備を整え、モスクワ経由バグーへ赴いた。バグーから船でカスピ海を渡り、鉄道を利用して終点アンディシャンに到着。ここから駄馬25頭と乗馬5頭を雇い、初めて経験する吹雪のパミール高原を、高山病に悩まされながら、カシュガル目指して苦闘の旅を続けた。

カシュガルに到着したのは、出立して1月半も過ぎた9月21日であった。光瑞は自らこのタリム盆地を調査するつもりであったが、時はすでに冬を迎えんとしていて、ここよりインドへのルート、フンザ、ギルギット路の閉鎖が迫っていた。止む無く自らの調査を諦め、渡辺、堀の両随員を残して帰路についた。カシュガルを9月27日に発ってヤルカンドについたのが、10月1日。ここから一週間かけてタシュクルガンに到着。ここから剣難悪路と高山病と闘いながら、ミンタカ峠にさしかかった。光瑞記によれば、吹雪のミンタカ峠を、恐怖に苛まれながら下った。とあるが。ミンタカ峠（地図では5000mとあるが、我々の高度計では4600mを指していた）からグルガワジャウルウイン氷河の舌端に下るルートは、歩けば何でもないガラ場であるが、馬に乗って降りた、とあるので、それは怖かったでありましょう。そんな昔の苦労話をよそに、我々は近代兵器、自動車なるもので、隣町のカシュガルから日帰りで、ヤルカンドに行くことにした。

カシュガルの街を走ると、道端にスイカを山と積んで商っている。それも20個や30個のものではない、200、300と積まれていた。そしてそれが当たりはずれがない、みんな美味しいのである。

道端が　スイカで埋まる　絹の道

である。同じように積まれているのが、ハミ瓜。ラグビーのボールくらいの大きさで、これも結構いけます。ハミの王様が世界で一番美味しい、といったのが謂れとか。美味しいことは美味しいが、まあマックァ瓜クラスでしょう。ハミの王様に水密桃を食べさせたら、気絶したかもしれない。オアシスはポプラでできている。樹木は99％ポプラ。他にはタマリスク（紅柳）が時々見かけられるくらいである。そのポプラ林をぬって路が走っている。そこを羊の群れが横切る。ロバがコトコトと荷車を引いていく。畑仕事にでも行くのだろう。荷台にはトーチャン、カーチャンや兄弟も載っているが、御しているのはツブラナ瞳をしたかわいい女の子である。

夏の道　ロバに鞭打つ　童かな

そんな長閑なオアシスを猛スピードで車が駆け抜けていく。我々の運転手楊さんも20年無事故、大丈夫、といって飛ばすとばす。絶えず警笛を鳴らしながら、人を避けロバ車を躱しながらポプラ並木のでこぼこ道を時速60キロのスピードで駆け抜けていく。

道中側面が半分削ぎ取られた車や、避けそこなって路肩から転がり落ちたタンクローリーなどが転がっていたが、無事に帰れたんだから、楊さんの20年無事故はだてではなかった。途中スイカ休憩（トイレやお八つのため）を兼ねてインギシャの街に寄る。カシュガルからおおよそ65キロ。ほとんどが平屋建ての小さな町である。ここはピチャクというナイフの産地。ここのナイフはカシュガルのナイフとは比べ物にならぬ、もしカシュガルのナイフと切り合いしたら100％インギシャが勝、とのこと。数軒並んでいる店の一つに入ってみる。一坪くらいの小さな店に、大小さまざまなナイフが並べられていた。

値段はまちまち、同じように見えるが、切れ味がそれぞれ違うそうな。それじゃ試しに貴殿の腕を貸せ、とジェスチャーまじりに店員の腕を取ったら、彼真顔で飛びのいた。刃渡り10センチ程度のもので、100元くらい。二つばかり買って、帰って試し切りしてみたが、我が家の包丁の方がよく切れた。此の店の裏の空き地で、羊の競り市が始まっていたので、見に行く。羊をなでたり、持ち上げたりしての値段交渉、なかなか成立しない。それでも根気よく話し合いは続いていた。かたわらのポプラの木陰では、つれの女将さんたちが、のんびり昼寝を楽しんでいた。

木蔭にて　夫人が二人　昼寝かな

小さなオアシスの小さな町でウイグルの人たちの生活の一こまを垣間見ることができた。

車は再び砂漠の中へ。西に遥かパミールの山並みを見、東には果てしなく続く砂漠を眺め、前方の砂漠に消えていく道をひたすら走る。

夏の道　砂漠の中に　消えにけり

くもり空が幸いして、車内温度は40度、表でも30度、少しは過ごしやすい。やがてポプラの森が見えてきて、ヤルカンド川の支流が現れ、ヤルカンドの街に到着した。このヤルカンド川は、後で知ったのだが、源流はK2、ガッシャーブルム峰などの高峰群が造り出すシャクスガム氷河から流れ出たものである。広大なタクラマカン砂漠に流れ込んでそのまま数百キロ流れて、砂漠の中に消えていく、砂漠の大河、と言われて有名な、ホータン川と同じく、砂漠の中に消えていく川であろう。地図では、対岸のアクスまで流れて、タリム川につながっているように見えるが、乾期には繋がっていないのでは？と思う。

ヤルカンドのオアシスはカシュガルより大きいようだ。人口も40万人と、カシュガルより倍近くあるのだが、建物が小さいためか、こじんまりした街に見える。街についたところで、まずは昼飯。露店に食卓も竈も設えてあり、その場で調理して出してくれる。注文したのは、ポロというピラフのような焼き飯で、具に人参を使っていて、この人参が黄色その上に茹でたての羊の肉をぶつ切りにして載せてある。ウイグル人はほとんどこの黄色の人参をたべ、漢人は赤いのを食するとか。

ニンジンは　黄色の方が　本家なり

もともとは中央アジアが原産。中国に入ってきたのは13世紀、元の時代だそうである。

味はなかなかのもの、処の人たちはこれを手で食べる。我々の食習慣では、バラバラの米類を手で食べる習慣がない。食べるとすれば、ノリで巻いたり、握ったりしたものである。後日アクスの街で、ウイグルの家庭に招待され、このポロを手で

食べる練習をしたが、皆さんさんざん。日本人は手より箸の方が、器用である。この場はスプーンで食べました。ヤルカンドの街は、漢人街とウイグル街に分かれていて、漢人街には、政府の諸機関や商館などがあり賑やかだが、ウイグル街は長閑な雰囲気が漂っていた。広い道路、行きかう車の少ないこと、人は三々五々と歩き、自転車がのんびりと走っている。メインロードを外れ裏道を行くと、バザールがあった。小さな規模のもので、食堂もあったが、ほとんどは露店。そこから流れ出る雑排水はそのまんま地面に浸み込んで、少し不潔な感もするが、これが処の街の風景、あまり気にならない。このバザールの一角で、葬儀が執り行われようとしていた。小さな広場の片隅に棺が炎天下に置かれていた。中身が気になるところだが、葬儀が行われるまで、誰も近づかなかった。やがて関係者らしいのが集まってきて、棺を西に置いて整列。代表者が何か祈りの言葉を唱え一礼。全員其れに倣って葬儀終了。始まって終わるまで、10分にも満たない簡単なものであった。此の後棺はお墓まで運ばれていくそうな。その間やっぱり棺は炎天下に置かれていた。中の方はさぞかし熱いことでしょう。日本のものもこれくらい簡素にやってもらえないものでしょうか。

ヤルカンドには、阿曼尼沙汗陵墓がある阿孜納米基堤米脂と呼ばれる紫色のタイルを貼った、美しいモスクがある。見物に行こうと歩いていると、民家の建築現場に出くわした。道端でフスマを入れて捏ね上げ、これを両側パネルで囲った中に流し込む。ようは塀を作っているようなものである。これが家の壁になる。柱は家の四隅にしかない。

屋根は、天井に葦を粗く編んだのを敷き、その上にポプラの細木を載せ、泥を被せる。これで出来上がり。ごく短時間で出来上がる。日本で降るような雨は全くない、と言って差し支えのないこの地、地震等がきたら、その時はその時、だそうである。

それで中身を見たいと、一軒の15坪ほどの平屋のお家にお邪魔した。ウイグル人で、大学の先生のお家だそうで、土塀に囲まれた庭には葡萄棚があり、その奥に屋敷があった。家の入り口は土間になっていて、小間物が置いてあり、その右隣は台所。左側には部屋が二つあり、手前は寝室兼居間。奥は四方の壁に、刺繍された絨毯が壁一面に張られた、応接兼寝室といったところ。我々はこの部屋に通され、大学出たてという別嬪さんの娘さんに、お茶とスイカ、それに庭先のブドウで、オモテナシを受けた。上品そうな父親と、先生志願の可愛いい娘さんの家庭。多分ここでは裕福な家庭なのだろう。それでもトイレは家内には無かった。トイレは50メートルほど離れた処に、土塀に囲まれて、あった。コンクリートの床に穴が四つ開けてあり、そこに正確におとすようになっていた。タリム盆地の各オアシスには公衆便所なるものはない。街の建物の間、路地裏、はては砂漠の岩陰など、みだりに足を踏み入れるものではない。おつりがきまっせ。

ヤルカンド見物もこの辺にして、カシュガルに引き返すことにする。途中、小さな涸れ川の、雑草に囲まれた河岸段丘を利用した、トーチカのような家が数軒点在し、ムクドリのような鳥が群がっていた。どこから来たのか、どこへ行くのか、道端の小さな石塚には、2936と数字だけが書かれていた。ラサからの距離だろう。

渡り鳥　ラサから遠く　隔たりて

彼らに比べれば、我々の道程は百と数十キロ。のんびりと帰ることにする。

孫を訪ねて2000里

塩路晃二郎　(昭40営)

赤道を越えて日本の真南に1大陸1国家の世界でも希有な国がある。

国土は日本の面積の21倍(その8割以上が砂漠)、人口は日本の2割弱 (2,260万人)、カンガルーは人口の2倍もいる。

4万年程前から先住民族アボリジニが住んでいたそうだが、1785年英国が植民地宣言をして英王室の領土としたので、先住民族は一変して王室領不法占拠者となってしまった。

その後英国から多くの流刑人や、ヨーロッパ各地からゴールドラッシュ等で移民が増え、やがて独立の機運が高まり植民地は自治権を獲得して1901年にオーストラリア連邦が誕生した、明治34年生まれでアメリカより若い国家である。

当初は白豪主義だったが世界大戦を経て適正な人口が必要との認識から、移民政策がとられ多文化国家への道を歩みだした。最近は豪州経済の活況によって東南アジアをはじめ世界各地からの移民が増加し、新たな政治問題に発展している。

数年前に自然を求めオーストラリアに移住してしまった娘家族に会うため、孫3人の追っかけを始めた。老化を感じてくると、孫達の成長が楽しみになってくるのは私だけだろうか。

今回は話題になっているLCCのAir Asiaを初めて利用した。関空からクアラルンプール経由でパースに向かった。IATA加盟の飛行機とは違いLCCの運賃は日によって異なり、座席指定、機内食、毛布、荷物重量の区分が細分化されそれぞれ別料金で、更にWEBでの料金支払いとチェックイン・カウンターでの支払いでは同じサービスにもかかわらず価格が違う等、徹底したローコストの運営であった。

パースは西オーストラリアの州都で人口150万人 (神戸・京都市と同規模)。スワン川の畔に開けた、古い建物と近代的な建物が調和した緑の多い静かな、美しい街だ。街中には無料の循環バスが頻繁に走っており、日本語医療センターもあり、アジア人も増殖中だった。海岸からはインド洋に沈む壮大なスケールの夕日が見られた。

鉱物資源が豊富で、最近中国や発展途上国の大量需要で輸出が拡大し経済は活況をおびており、街中あちこちで工事をしていたが、インフレが進み不動産価格はこの数年で2倍以上に跳ね上がり、バブル経済が崩壊しないかと心配するほどだった。

娘の住む町、デンマーク(国名ではない)はパースから更に南南東へ450km離れた南極海に面した人口5千人(甲子園球場でも5万人収容できる)で、そこへ行く交通機関はバスか自家用車で5～6時間かかる。費用をいとわなければ小型飛行機をチャーターすれば町のすぐ近くに着く。町中に交通信号も、高いビルもなく、静かな田舎町である。この町の中心部に住んでいた娘の家族が子供の遊べる広い庭を求めて、更に町から10Km程離れた山奥へ引越した。

日本から2日はかかると云う遠隔地で、孫がいなけりゃ行くこともない、言い換えれば孫がいるから行けた大自然にはぐくまれた場所かもしれない。

5週間滞在したが、冬とはいえ日本の3・4月の

気候で、真夏の熱帯夜や熱中症のことを考えると快適な避暑地であった。5ヘクタールの庭で鶏を飼って果樹園や野菜を作っており、色々と手伝わされた。食品は車で20分走ればスーパーマーケットがあり日常の食材は揃っている。

炊事はプロパンガスを利用、暖房は薪ストーブで2～3時間かけて集めて用意した薪がその日の内に無くなり、毎日薪集めと薪割りに追われた。

生活水は雨水を貯め、太陽光やストーブの周囲を循環させてお湯を沸かし、電気はソーラー発電で蓄電池へ、エコ生活そのものですがパワーが無いためぬるいシャワーでしのいだ。

オーガニックへの関心は高く、台所で出る生ゴミは庭の集積場で堆肥にして野菜作り等の肥料として再利用していた。

水は貴重なため水洗でなくバイオトイレを使用している家庭が多い。トイレで排泄された糞尿を、便槽の中に詰め込んだオガクズなどと共に攪拌し、好気性バクテリアを活発化させてバイオ発酵分解処理により堆肥化して有機肥料として再利用する。臭いもせず、汲取り作業も不要で、環境負荷の軽減にも効果を発揮していた。バクテリアによる生分解に依存しているため、便座クリーナーや洗剤などの除菌作用のあるものは使えないことに配慮せねばならなかった。

自然の中での生活は畑や作物に集まる虫や狐やカンガルー（野生）対策が必要で、せっかく作った野菜や果物が収穫前に食べられてしまい、自然との闘いは想像以上に大変だ。又夏には自然発火する山火事も脅威で、道には山火事対策の消火栓が設けられている。

孫達が通学している学校は森の中で牧場に隣接しており、天気が良ければ、森の中で動物・植物等、自然に接しながら生態系に関心を持たせながら授業をしていた。個性を重視し通知簿がない等、競争社会の詰め込み教育を経験した我々とは大きな違いがあり、良い悪いは別にして、別世界の教育があった。

（孫が通学しているのはシュタイナーが提唱した教育方針の学校）

都会の機能的で便利な、コンクリートジャングルの中で無機質な生活に慣れた者にとって、自然の中での生活は不便なことが多々あるが、鳥の声で目を覚まし、日の出と共に起き、夜は遊び疲れた孫たちを早く寝かせ、その日の労働から解放され、地産のワインを飲みながら食事をする、充実感に浸れる生活を満喫できた。

原点に戻って大自然の中でどう生きて行くか、人類が生きて来た何千年の生活を考え、これから私が生きていくであろう、残された約10年をどうするかを考える良い機会になった。夜は満天の星空になり南十字星の下で疲れを癒し、大自然の中で太陽の光と大地の恵みに感謝する日々でした。

参考

シュタイナー教育とは哲学者シュタイナーによってドイツで始まった教育で、人間の心身の発達段階に応じた独自の教育で年齢によって、意志・感情・思考に働きかけていくことによって、こども達はそれぞれの方法で「他者に依存せず、独立した判断ができ、物事を深い所で体験し、創造的に行動する人間」へと成長させる。

自宅:ソーラーパネルの右後方の円筒は雨水の揚水タンク

南極海に面した海水浴場、水平線の彼方に南極大陸がある

山嶽寮　命名由来

甲南山岳部・甲南山岳会の会報が　山 嶽 寮　なわけ

山嶽寮の由来は、昭和の始めに旧制高校山岳部員が御影の長屋の一室を借りて、「山嶽寮」と表札を掲げ、仲間の夜の集いの場所としたことにあります。左翼学生のアジトになるのを恐れた学校当局に閉鎖を命じられ、結局数日のはかない夢となってしまいましたが、その後、山岳部の発行する「部報」、「部内雑誌」、「時報」などの誌面の一部に「山嶽寮」なる欄をもうけて、部員やOBが云いたい放題を記事に出来る場を提供してきました。

今の「山嶽寮」はその流れを受けて、甲南山岳会通信第 31 号(昭和 51 年)から誌名として採用されたもので、以来使われている表紙の題字は故香月名誉会長によるものです。

詳しくはいくつかの記事がありますので、ぜひ是非ご一読下さい。

① 香月慶太　”山岳寮炉辺譚” 「山嶽寮」第 31 号(昭和 51 年):「時報」No.VI(1960)からの転載。
② 越田和男　”あとがき”「山嶽寮」第 31 号に誌名に採用した経緯あり。
③ 香月慶太　”山岳寮爐辺譚” 「山嶽寮」創部 75 周年記念号(2001 年):「部内雑誌」Ⅶ-Ⅱ(1936)からの転載。

(越田さんに情報をいただきました。ありがとうございました。編集)

高校２年生の大学山岳部「仮入部」の思い出

白 川 浩 平　（新高H2）

【1】 はじめに
～映画を観て山に憧れる～

私の山とのなれ初めは、甲南中学2年生の時に学校の映画鑑賞会で観た「植村直己物語」に始まる。この映画で観た植村氏の生き方に多大なる感銘を受け、「俺の人生はこれや！」と単純に思ったのである。直ぐにそれまで所属していたバレーボール部を辞め、中高の山岳部顧問をされていた南里先生を訪ね入部したはいいが、その当時中高の山岳部には一人も部員がおらず、たった一人の山岳部員となった。私自身それまで山登りには全く興味がなく、身近に山登りをしている知人もおらず、指導してくれる先輩もいなかったが、放課後一人誰もいない高校山岳部の部室に籠もり、埃をかぶり眠っている山道具をいじくるだけでも楽しかった。一度はよく使い方も分からないのにホエーブスのコンロをつけてみようとしたところ、噴出したガソリンに引火し危うく火事を起こしそうになったことがあった。焦って隅に転がっていた消火器をかけ消火したものの、今度は消火器を止めることが出来ず部室中ピンクの消火剤の粉だらけにしてしまった。そんな風にして、最初はとにかく山関係の本や雑誌を読み漁り、近場の六甲山などで一人山登りのまねを始めたのであった。

高校1年生の夏には高校山岳部の夏山合宿として、南里先生引率の元、数人の高校山岳部OBの方々と一緒に白馬岳へ登った。大雪渓を登り白馬岳から唐松岳まで縦走するコースであったが、この時は初めての北アルプスでもあり、まだ梅雨が明けきらない中連日の雨の行動で終始バテながら山の厳しさを体験したものとなった。がそれでもめげずに、その夏休みには単独で穂高から槍ヶ岳の縦走をやった。またそれでは飽き足らずにその後ワンゲル部の夏合宿として立山と剣岳を登った。（一人でも部員がいれば1万円の部費が出ると聞き、その金欲しさに休部状態だったワンゲル部の部員にもなったことにして、その部費で自分の山道具を買ったのである）。その時には剣岳山頂直下の岩場で上部から下降してきた他の登山者が滑落死するのを真近で目撃するという体験もしたが、少しずつ山の経験を積むことができ、充実した夏となった。

その後秋になってから、以前からロッククライミングに憧れていた私はその旨を南里先生に相談し、大学山岳部を紹介して頂けることになった。初めての岩登りは今でも覚えているが、なんと住吉川の側壁の石垣での岩登り講習であった。初めてハーケン、カラビナ、ザイルなどの登攀用具を見てその使い方を教えてもらった私はすっかり興奮していたが、この時は石垣の割れ目にハーケンを打ちこんでいるところを散歩中の住民の方から注意を受けてあえなく中止となったのだった。その当時たった2人の大学山岳部員であった宮崎さんと田中さんは、私が高校生ということで少し戸惑っておられるように感じたが、少しずつロックガーデン、蓬莱峡、保塁岩などで岩登りの手ほどきを受けながら、ますます山の魅力にはまっていった。

その後高校1年の冬休みには、氷ノ山のスキ

一場の脇で一人テントを張って数日を過ごしながら雪の氷ノ山に登ったり、北八ヶ岳の天狗岳に登りに行ったりした。続いて春休みには、高校山岳部の春山合宿で八方尾根から唐松岳に登った。この時は大学山岳部の春山合宿を終えた宮崎さん、田中さんがそのまま現地で待っていてくださり、大学山岳部OBの山本さんとともに合宿に参加して頂いた。稜線に出る前の急な斜面でロープを出して頂いたりしてやはり大学山岳部はすごいなあと素直に思ったものであった。またワンゲル部の顧問の先生があまり冬山の知識がないことをいいことにだまくらかして八ヶ岳の赤岳に登ろうとして稜線まで出たはいいが、あまりの風と寒さに恐怖を感じスゴスゴ引き返したこともあった。

その頃はよく本屋の山の本コーナーにいっては山関係の本を読み漁っていた。特に植村直己、加藤文太郎、小西政継氏等の本を読みながら、より高度なことをやりたい、もっと本格的な登山をすることを切望していたのであった。

【2】 大学山岳部への1年生新入部員入部

私が高校2年生になった春、大学山岳部に待望の4人の新入部員が入ってきた。私は山登りの仲間が増えたという喜びで一杯で、高校の放課後は毎日岡本の大学山岳部の部室に入り浸り、大学山岳部員とともにランニング等のトレーニングに参加した。週末の蓬莱峡での岩登り訓練は最高に面白く、大勢でのキャンプ生活も大変楽しいものだった。そして5月の連休に予定されていた大学山岳部の新人歓迎合宿に高校生ながら参加させて頂けることになり、私の胸は期待と喜びであふれんばかりであった。

その当時の大学山岳部のメンバーを思い起こすと、大学4年生の宮崎さん、田中さん、そして大学1年生の中西さん、マーボさん、西濱さん、中谷さんが思い出される。

チーフリーダーの宮崎さんは、理学部で寡黙な人柄であった。前年の初冬に比良山に一泊二日で連れて行って頂いた時、山頂ではうっすらと雪化粧しており、下山時には天候が崩れ、次第に吹雪となり登山道が分からなくなってしまった。初めての雪の山でもしや遭難かと非常に不安に駆られた私であったが、その時落ち着きはらった態度でルートを探し出された宮崎さんの自信にあふれた大きな背中が非常に印象的に残っている。宮崎さんはその後勤勉にも大学5年生をされながら、ヒマラヤ遠征に行かれた。

サブリーダーの田中さんは、大変口うるさい（失礼！）先輩であったが、私を含めた後輩の指導を非常に熱心にして下さっていた。大変社交的な方で学連の他大学との人達とも交流が深かったように思う。またフリークライミングにも大いなる理解と情熱を持たれており、北山公園でのボルダリングや学連の人たちとの小川山へのクライミングツアーへも連れて行って頂いた。「岩と雪」や「クライミングジャーナル」といったその当時の最新のクライミング情報を扱った山岳雑誌を紹介して頂き、私はそれらの雑誌をバイブルのように熟読し、1歳年上の平山ユージの活躍に心を熱くしたものであった。山からすっかり離れてしまった今でも、岩と雪の後継誌である「ロックアンドスノー」は購読し続けている。

新1年生の中西さんは、高校時代から山岳部で経験も豊富で体力もあった。ガールフレンドとバイクで二人乗りデートをした話を聞いては羨ましく思ったものであり、私にとっては頼れる兄貴的存在であった。秋の穂高での岩登り合宿では田中さんと3人でパーティーを組み滝谷のドーム

中央稜を登ったこともあったが、その後たしか体の故障か何かと聞いたが、1年生の後半ごろから次第に山岳部の活動からは離れてしまったのは残念であった。

中西さんと同じく一浪で新一年生になったマーボさんは、大阪のかなりの進学校出身だと聞いたが、中西さんとは対照的に物静かな性格であった。ラジオ放送を聞きながら天気図を書く練習では、私がどうしてもついていけなかった気圧配置等のデータをすべて完璧に聞き取っていたのに驚いたものである。マーボさんも残念なことに夏合宿を待たず山岳部から離れて行ってしまった。

私と同じ甲南高校出身の中谷さんは、高校時代はバトミントン部、小柄で細身の体のせいか重い荷物をボッカすることは苦手のようであったが、岩登りではその天性の柔軟性とバランス感覚を発揮し、特に北山公園のボルダリングのようなフリークライミングは誰よりもうまかった。秋頃のある日、部室の建物の壁で雑誌に紹介されていた新しい懸垂下降の方法を試しているとき、失敗して2階から地面に落ちてしまう事件があった。幸いこの時は大した怪我もなく無事であったが、その後10月の秋の穂高での岩登り合宿の時、宮崎さん、西濱さんの3人パーティーで滝谷クラック尾根を登っている途中、その年の初冠雪の中つらいビバークを経験された。この後はご両親の反対もあり山岳部からは離れて行ってしまわれたが、その後ふと再開した時に北山公園の将棋岩を登ったとうれしそうに話されていた。

さて最後の西濱さんであるが、この方は個人的に一番思い出が多い先輩である。高校時代はラグビーをされていたそうだが、そのあか抜けない野性的な風貌と(失礼！)、落ち着きのない少し挙動不審(大変失礼！！)な所のあるキャラクターはいわゆる甲南カラーとはまったくかけ離れた存在であり、田中さんの命名であったと思うがいつの頃からか「カチコ」とあだなされるようになった。大学生後半はケニア山へ海外遠征もされ最近でも時折登山をされているようであるが、1年生の時は体力はあるものの、山登りよりバイク等の他の趣味の方に興味があるようで、地図を見たり山行前にルートを確認しておくということにはほとんど興味を示されなかった。夏合宿前に、定着合宿が行われる剣岳周辺の概念図を暗記しておくという宿題が出され、実際にそのテストが行われたのだが、西濱さんはそのテストの30分前に部室にやってきて私が見ていた概念図を奪い取り、初めて見たような顔でその概念図を暗記しようとするその姿に私は唖然としたものだった。当然西濱さんのテストはボロボロで、後で田中さんが激怒されたのは言うまでもない。西濱さんの「雑さ」は、山での細かな生活技術でも際立っており、パッキングなどはもう本当に何も考えていないといった然で、もう無茶苦茶にザックに荷物を押し込んでいく感じであった。また着替えの衣類を防水するためにビニール袋に入れ圧縮する時も、真剣な顔でパッキングしているのだが実はそのビニール袋内の空気が全く抜けておらず、そのことを指摘すると真剣な顔のまま悪びれず言い訳をする姿に思わずあきれて笑ってしまったものであった。そんな調子なのでテント内での生活もとかく雑で、田中さんにいつも一番怒られていたのが西濱さんであった。岩登りもとにかく雑で、細かスタンスに足先をきちんと合わすということは一切せず、足全体をベチャっとこすり付けて腕力にまかせて力任せに登っていく姿には、スタイルとかスムーズな動きという概念は全く見当たらず、見ていてクラクラと

眩暈がしたものであった。こう西濱さんの思い出を書き連ねていくときりがなく、何か悪口ばかりのようであるが、粗雑ながら純粋な子供のような心を持った人で、どこか憎めない性格であり、愛すべきキャラクターは良くも悪くも一番印象深い先輩であった。

【3】 5月新人歓迎合宿

さて4人の新入生を迎えてから、私は放課後芦屋の甲南高校を出てからまっすぐ岡本の甲南大学の山岳部部室に毎日通う日々が続いた。住吉川をランニングしたり、週末は甲南バットレスや宝塚の蓬莱峡で岩登りやアイゼントレーニングに参加させてもらい非常に楽しかった。そしていよいよ5月の連休に剣岳での合宿に参加させて頂けることになった。私はカジタの12本爪アイゼンを新調し、ピッケルを持って完全装備で雪山に行くことに心躍らせた。この時の合宿では延べ一週間位剣沢にベースキャンプを張り、日々雪上訓練に明け暮れた。雨具をつけていても体がびちょびちょになり、湿ったままの服を着たまま、先輩の吸うタバコの煙に涙しながら狭いテントの中で生活することは試練であり、また体力的にも厳しいものだったが、何とか訓練についていくことができた。最終日には一般ルートから剣岳の山頂へも登ることが出来た。

この時の頂上アタックの朝の出来事であるが、1年生の中谷さんが早朝の氷化した斜面でスリップし、ツルツルの斜面を滑り落ちていった。先輩の「ピッケルストップ！」の声で我に返った中谷さんが、見事自己制動し事なきを得たが、少々肝の冷える出来事であった。この時の合宿で仕込んで頂いた雪上技術は、その後何度か本当に役に立つときがあった。一つは私が高校卒業後、高校山岳部OBとして南里先生が顧問をされていた高校山岳部の合宿に何度か同行した時、高校生が急な雪渓のトラバースで足を滑らせ滑落したのをピッケルの耐風姿勢で止めたことがあり、OBとしての面目を大いに保つことが出来た。また今年の5月に小学5年生の息子と四国の石鎚山に登りに行ったとき、下りの鎖場が大勢のハイカーで大渋滞しているのを横目に、すぐ脇の急な雪渓をキックステップでやり過ごし、これまた親父の威厳を大いに保つことに成功したのである。

【4】 夏山合宿
～剣岳定着と槍ヶ岳までの縦走～

何とか5月の合宿を乗り切り、その後も暇さえあれば大学の山岳部の部室に入り浸り、とにかく24時間365日いつでも登っていたいといった意欲満々の私であったが、夏山合宿にも参加させて頂けることとなり、期待で胸躍るばかりであった。この時の合宿は、前半は真砂沢のキャンプ場をベースに10日ほどの定着を行い、後半は立山から槍ヶ岳までの縦走を行った。この時の合宿は、私にとっては初めてどっぷりと山に浸かった長期合宿であり、初めて一般登山道を外れたルートを登ることができたこともあり、また毎日の腹のひもじさもあって特に印象深いものであった。

前半の定着合宿では、毎日の雪上訓練を中心としながら、源次郎尾根を登ったりし、最後には真砂沢～剣岳山頂～早月尾根下降～小窓尾根～真砂沢のロングランを行った。まず最初の数日はとにかく雪練の毎日で辟易するほどであったが、長次郎雪渓の熊の岩から見渡す岩と雪の絶景はすばらしく、まさに私が求めていたも

のであった。なによりも一般登山道を外れて色々な所に行くことが出来ることに、私は大きな満足感を覚えた。

≪1. ロングラン≫

定着合宿後半に行われたロングランは、一日目はベースキャンプの真砂沢から長次郎雪渓を登り、剣岳山頂を経て早月尾根を下り、小窓尾根の取付き付近でビバーク、2日目に小窓尾根を登って稜線に出てから再び真砂沢に戻る行程を、サブザックに最低限の装備だけ持った軽装で飛ばすという予定であった。これはその年の冬山合宿において小窓尾根もしくは早月尾根からの剣岳登頂を計画しておられることの下見を兼ねていたように思う(実際その年の冬山合宿は、早月尾根から剣岳を狙う計画であったが、結局何かの理由で途中敗退となったように記憶する。ちなみに私は高校生であるということで冬山・春山合宿は参加させてもらえなかった)。

さて2日目の前半までは予定通り進んだのであるが、小窓尾根を登っている途中マッチ箱付近で雲行きが怪しくなり、雷雨の中ツエルトをかぶってのビバークとなった。ごく近くで稲妻が光り雷鳴が轟く中で身動きができないのはいい気持ちがしなかったが、逆にもうどうしようもないのでそのうちに疲れてウトウトと寝込んでしまった。夜半に息苦しさで目覚めると雨は止んでおり、悪臭ただようツエルトの中で先輩方はスヤスヤと寝息を立てておられた。私はいつものごとく一番端の入り口近くに寝ていたが、ツエルト内の閉塞感に耐えられず外に出て、岩と岩の狭い踏み跡で半分足を崖に投げ出した格好で横たわった。ちょっと危ないかなとも思ったがロープでセルフビレイをとっていることだし、もう動くのが億劫だったので、落ちないだろうと高を括って寝てしまった。

翌朝は快晴だったが、皆疲れた顔をしており、特に水が少ししか残っていなかったのが辛かった。小窓尾根の取り付きから真砂沢までは一日行程の予定だったので、水も一日分しか用意しておらず、前日のビバーク時にすでに少ししか残っていなかった。ポリタンの水筒の底にわずかに残った水に、何か虫が浮かんでいるのをのけながら啜る有様であった。それでもようやく稜線まで抜け出し、三ノ窓の雪渓を下るが、早くテント場に帰りたい一心で皆駆けるように雪渓を降りていく。私も頑張ってついていこうとするが、そのうち一番最後になってしまい、皆から50m位後ろを歩いていたその時、背後から雪をかけられたと思ったと同時に、「ブーン」と鈍い音を立てながらすぐ脇を頭ぐらいの大きさの落石がすごいスピードでかすめていった。その落石は雪の上を転がっているというより、まさに高速回転をしながら先を行く皆のほうへ向かって飛んで行った。とっさに「ラク！」と叫ぶと、皆左右に逃げて事なきを得たが、頭の後ろに雪がかかったことから察すると、その落石は相当私の体の近くを通過していたことは間違いなく、一歩間違えば頭をこなごなに砕かれていたことが想像でき、一人肝を冷やしたものだった。その日はテント場に帰り着いた後、前半の定着合宿の予定をすべてこなした安心感からはじめてゆっくりと出来、寛いだ夜となった。

≪2. いつも腹ペコ≫

この夏山合宿で一番思い出に残っていることは、とにかくいつも腹が減っていたことだ。朝食は炊事時間を短くし早く出発できるように前の晩多めに炊いておいた米の残りを雑炊にして食べ

ていた。最初の1杯を掻き込んでから、なべの底に残ったわずかの雑炊を他の人にとられて無くならないうちに素早くおかわりするのだが、毎日2回目の休憩のときにはもう腹が空いており、午前8時か9時ころにはもう我慢が出来ないほど空腹を感じていた。昼食用の行動食であるレーションは、乾パン、チョコレート、飴などがビニール袋に入ったものを用意しており、各自好きな時に食べていいことになっていたが、あまり早い時間に食ってしまうと後で食べる分が足りなくなり辛い思いをするので、乾パン1枚だけとかチョコレート一粒だけとかちびちび食べるのが常であった。ある時、西濱さんがチョコレートを食べるのが苦手と聞き、こんなやりとりをした。

（私）　「カチコさん、チョコレートいらんのやったら下さいよ」
（西濱）「ただじゃあかん、チョコ一粒と乾パン二枚と交換や」
（私）　「えーチョコ食べられへんのでしょ。しかもなんで乾パン二枚なんですか！」
（西濱）「乾パンよりチョコの方がカロリー高いねんぞ！」
（私）　「じゃあ、チョコ一粒と乾パン一枚でどうですか？」
（西濱）「しゃあないな…」

というようなやり取りをして、今では笑い話であるが、その時は結構真剣に取引をしたわけであった。

この時の合宿では軽くて腹が膨れる食料として、フレーク状になった乾燥マッシュポテトなるものを持ってきていた。これを水で溶いて混ぜて食べるのであるが、通常一度の配給は一人大さじ一杯と大変情けない量しかなかった。合宿の後半、もう食料の心配がなくなり余った食料を食べてしまおうとしたとき、それまで節約してわずかのマヨネーズしか混ぜることのできなかったマッシュポテトに残りのマヨネーズをすべて混ぜ合わせ、コッヘル一杯分食べることが出来たのは至福のひと時であった。しかし下山してからこの時の乾燥マッシュポテトを思い出し自宅で作って食べてみたが、とても食べられたものではなかった。

こんな調子でこの夏山合宿の時はとにかくいつもひもじい思いをしており、それはいまでも強烈な思い出として記憶している。

≪3. 見える悪臭≫

この時の合宿は、前半の定着が10日位、後半の立山から槍ヶ岳の縦走が10日位と合計20日間程だったと思うが、私にとってはこれまでにない長期の山生活であり、体力的にもついていくのがやっとであった。しかし大学一年生と一緒に日々の行動をこなすことで、様々な山における技術を身につけることが出来たように思う。特に毎日の飯炊きはかなり上達した。最初の頃は芯の残った飯を炊いては怒られたものだったが、次第に水加減も覚え、炊事の手際も良くなっていった。

テント内でコメを炊くときは、鍋がひっくり返らないよう両手で持っていなければならない。湯気の立ちこめるテント内で、そんな風にコンロにかけた鍋を両手に持ちながらじっとしているそんな時、一年生と自分自身をボーと見つめると汗汚れにまみれて薄汚くなったシャツから、なんだか薄黄色く湯気立つ悪臭が湧き上がってくるように見えた。毎日滝のように汗をダラダラかきながら2・3週間も体を洗っていないので不潔極まりなく、実際には見えるはずはないにも関わらず、

そんな悪臭が目に見えるような気がしてお互いニヤリとしたものである。

≪4. 悔しさ≫

前半の定着合宿中、八ッ峰やチンネでの岩登りが計画されていたが、私は高校生であることを理由に参加させてもらえなかった。岩登りに関しては他の大学一年生より少し前に始めたこともあり、他の一年生に負けない位の自信があったので、かなり悔しいことであった。今でこそインドアクライミングジムが街中にあり、中高校生でもかなりレベルの高い大会が開催されているが、当時高校生は危険性の高い岩登りは自粛するという雰囲気であった。今思うとOBの方からすれば大学山岳部の合宿に高校生を参加させるだけでもかなり思い切りのある決断であったと思うが、当時血気盛んであった高校生の私にとっては納得のいかない話であった。甲南山岳部初期の頃の大先輩方が、高校生ながら穂高の岩場に新ルートを拓いていくことが出来た時代を羨ましく思い、また同世代に私と同じくらい情熱を持った仲間がいないことを嘆いたものであった。

とはいえ、その夏の合宿はその後の槍ヶ岳までの縦走もなんとかこなし、私にとっては充実感あふれる高校2年生の夏となった。特に前半の真砂沢ベースの定着合宿は私にとっては思い出深い体験であり、雪上訓練の合間の休憩時間にレーションをかじりながら見た熊の岩からの黒い岩、白い雪、青い空、そして緑の這松のコントラストは本当にすばらしい眺めであり、今でも私の胸に深く焼き付いている。

【5】 おわりに

その後、10月の穂高での岩登り合宿にも参加させてもらい、前穂北尾根と滝谷のドーム中央稜を登ることが出来た。しかし高校生を冬山合宿に連れて行くことは危険すぎるとの理由で、それ以降の冬山合宿は参加させてもらうことが出来なかった。その年の大学山岳部合宿で行った冬の富士山、双子尾根からの白馬岳、 早月尾根からの剣岳などは、先輩の話を聞くたび羨ましいことしきりであった。先生や先輩には反対されながらも自分の情熱を抑えきれず、その年の冬は単独で精いっぱい背伸びした計画を立ててみたりもした。12月には冬の富士山を目指すも、8合目の避難小屋の横に張ったテントが夜半の吹雪で潰されてしまい、意気消沈して失敗。3月には遠見尾根から五竜岳。4月の頭には私が参加できず悔しかった大学山岳部12月合宿の杓子岳双子尾根から白馬岳のルートを目指した。明瞭な踏み跡はあったが、他の登山者は誰もおらず、夜一人張ったテントではあまりの静寂さに恐怖を覚えた。なんとか杓子岳のピークは踏んだものの、稜線上を一人でそれ以上進む勇気はなく、元来た道を引き返したのだった。帰ってきてから田中先輩にその話をしたとき、カメラを持っていかず写真がないことを話すと、「それは余裕のない証拠や」と一言いわれ、正にその通りだと恥ずかしく思ったことだった。この頃高校山岳部顧問であった南里先生にはかなりきつく注意を受けたが、言うことを聞かない問題児を抱えて、かなりご心配をおかけしたことだったと思う。

とにかく体力・技術もなかったが、やる気だけは人一倍あり、今思えば無謀とも思える計画を立てて突き進んでいたが、同世代のパートナーがいないということはいかんともし難いものがあ

った。その頃の私は本当に一日中365日休むことなく登っていたかったのだが、それに付き合ってくれそうなパートナーを見つけることはできなかったし、またとことん単独行で行くほどの度胸も技術も体力もなかった。高校生時代の私は、山登りがやりたいのにやれないというジレンマが常にあり、それが大きなストレスであった。大学山岳部に人が集まらない現実もあり、このまま登山を続けて行ってもずっと不完全燃焼で終わるのではないかという不安が大きくなっていった。

その後大学入学後は、山岳部の先輩から大きな期待をされていることを十分承知していながら、欲求不満の中で4年間過ごすことは出来ないと思い、山岳部の先輩からは逃げるように体育会ゴルフ部に入ってしまった。その後も時々クライミングはしていたりしたものの、今ではもうすっかり山からは遠ざかってしまっている。近年はサーフィンに熱を上げ、大波を求めて高知は足摺岬近くへ移住して8年目となった。

海と山とで遊ぶフィールドは正反対であるが、ビッグウエーブに挑戦するサーファーの心境は、アルパインクライマーのそれとかなり近いものがあるのではないかと思っている。

たくさんの山岳部の先輩方にお世話になり期待されながら、自分勝手な思いで大学山岳部に入部しなかったことは本当に申し訳なく思っており、ずっと私の中で罪悪感にさいなまれることとなっている。本来であれば本誌に私が文章を投稿することさえ許されることではないと思うが、わずかな期間ではあるけれども大学山岳部の先輩方と一緒に過ごせた時間は私の青春時代の中では光輝く時間であり、その思い出を文章に残しておきたいと思ったことをお許し願いたいと思う。最後に、いまさらになりますが、お世話になった山岳部の諸先輩方に感謝の意を述べるとともに、許されざる不義理を働いたことをこの誌面をお借りして深くお詫び申し上げたいと思います。

四国最高峰・石鎚山にて、息子鯉太郎と
平成24年5月

大波を求めて移住した、高知・足摺岬にて

消防署員の一日　（仕事編）

谷　勇輝　（平21理工）

私は平成22年10月から某市消防吏員へ転職しました。採用されると、半年間、消防職員としての、気力・忍耐・技術・体力・知識を学ぶため、各市町村で採用された仲間と一緒に消防学校へ入校しました。その消防学校は日本で一番厳しいと噂されている学校でした。校則では髪型やもみあげの長さなど、日常生活に至るまで、すべてのことが厳格に決められた監獄のような生活がスタートしました。

世間ではマスコミによる体罰問題が取り沙汰されているようですが、この消防学校では、まさに治外法権のようでした。あんなことやこんなことなど…。

しかしながら、すべては過酷な災害現場で活動し自らの命を守り、要救助者を救うために必要なこと。それを教官が全力で私たち学生に教えてくれるような学校でした。教官と学生との信頼関係があるからこそ成り立っているように感じました。

卒業式では、今まで厳しく接してきた教官とその教官に従っていた学生は、皆涙しながら抱擁し、人生で一番濃い半年間を胸に刻み、消防学校生活を終えました。その後、私たちは採用された各市町村（所属）へ戻り、平成23年4月から消防署で勤務に就きました。

消防職員の勤務には大きく分けて2通りあります。まずは、事務職（日勤）と現場（確実勤務、略して確勤と呼ぶ）、そして、確勤については各市町村により2交代制と3交代制のどちらかを採用しています。私の所属では3交代制を採用しています。

この3交代制は山登りをする者にとって一長一短があるのです。例えば3交代制のシステムは1月1日午前9:00から2日午前9:00の24時間勤務に服します。2日9:00から翌々日の4日9:00までの48時間を休みとする勤務サイクルです。簡単に言うと1日（24時間）仕事し、2日（48時間）休みといった感じです。これを1年間繰り返すのです。すると、必然的に比較的アプローチの楽な（早い）北アルプス・錫杖岳や八ヶ岳・鳳来（愛知県）・備中（岡山県）に足が向きます。穂高山域、剱山域など、2泊以上必要な山行となると休暇を貰わなければなりません。もちろん、災害に曜日指定はありませんので、勤務は土日祝・正月・GW等関係なく、サイクル通り勤務に服します。

また、パートナーの問題もあります。これはもっとも重要な問題ですが、幸いにも、近隣で同業の仲間と出会い、今現在は平日祝日関係なく、休みの日が合えば、日帰りもしくは1泊でボルダリングやフリークライミング、沢登り、アイスクライミングに行きます。

さて、前置きが長くなりましたが、消防職員の1日についてご紹介致します。まず初めに、昔の消防と現在の消防では、装備品の違いはもとより、災害対応以外の仕事が大きく変化（増加）したといえるでしょう。

まず、新人ないしはその場で一番新しく配置された若い者が末端と呼ばれ、雑務をしなければなりません。内容はコーヒーをいれたり、昼食・夕食時の調味料を出したり、風呂や仮眠室のベッドの準備など…。

その内容は多岐にわたります。このことは、実際に勤務してみなければ分からないことでした。山岳部の諸先輩から合宿のテント生活の話を伺うと、それに似ているのかなと思いました。後輩は先輩より早く起きて食事の準備をするなど…。

7:30に出勤し、9:00まで雑務。9:00から勤務交代し、体操した後、すべての車両の点検及び積載資機材の点検を9:40まで実施します。これは常にベストな状態で災害対応するために毎朝行います。例えば、発電機やチェーンソー、削岩機などの始動確認。また積載ホースの本数と位置、キャビン内の空気呼吸器の使用可能な残圧確認など、隅々まで点検を実施します。点検が終了すれば、全員で庁舎清掃を行った後、前日勤務していたグループからの引き継ぎを行います。引継ぎではどのような内容の災害へ出場したのか、また24時間同じメンバーで勤務（生活）を共にするため、細かい生活面での変更点など、その内容は様々です。

ここまでは毎回行う内容で、ここからは毎回仕事内容は異なった内容になります。主な実施項目としては、

①災害対応（訓練中、食事中、仮眠中などいかなる状況においても災害指令が入れば出場します）。②災害対応のための訓練。③消火栓の内部点検。④消防法による市内すべての共同住宅に設置されている消防用設備の立入り検査及び入力事務。⑤一人住まいの高齢者など、お宅へ訪問する災害弱者の安否確認調査。⑥住宅用火災警報器の設置状況調査。⑦市民からの依頼により、自主防災組織訓練や消防訓練の実施。⑧実践的なポンプ車操法訓練大会に向けての練習。⑨特殊災害関係（NBC災害、地震災害、中高層建物災害、危険物災害、航空機災害など、これら特殊災害に対応するための資機材取扱いの習熟訓練や、そのマニュアル更新事務等）。⑩市民から届け出された書類の受付事務などなど、その内容は多岐に及びます。

消防署に見学に来る小学生からよくこのように質問をされます。「消防署にいる人達は火事がなかったら、その間何してるんですか？？」。

そう、いろいろこのようにやってるんです！！（笑）

災害活動については、もっといろいろな災害（現場）を経験し、次回来年に投稿させていただこうと思います。

ー エッセイ ー

山の資料箱から

雨 宮 宏 光　(昭33経)

ピオレドール賞「金のピッケル賞」

ピオレドール賞ってご存知ですか。

1991年、フランスの山岳雑誌『モンターニュー』に創設されたピオレドール賞は、世界の峰々で達成された困難な登頂に対し授与される賞です。今までの受賞者の登攀対象をみると知らない山ばかりで、このような山をよく探し出したものと感心します。受賞者は、まず未踏であること。難しいルートであることを文献やインターネットで精査して、これらの山々をリストアップしたのでしょう。

けれどもこのような賞は、ごく狭い範囲の人が理解できるような記録が残るだけで、大多数の登山愛好者は、この賞があることすら知らない。

登山界のアカデミー賞といわれている ―山岳雑誌が喧伝したのか― この賞に作りごとの権威づけを感じるのです。受賞者の登山にケチをつけているのではない。そもそも登山に賞など設ける事がおかしい。

これは冗談だがピオレドール賞を有名にするには、ギアナ高地エンジェルフォール側壁登攀などは、大きく報道されると思うのですが ―― スケールは小さいが受賞者の〇〇さんパーティは、那智の滝の側壁を登攀して、熊野那智大社・瀧篭修行の霊場を冒涜したと非難された。

なおこの賞に表彰金はなく黄金色のピッケルが贈呈されるとか。

別の受賞者の〇〇さんは、このピッケル捨てられず、売ることも出来ず、部屋でゴミ扱いになっていると、何かの雑誌に書いていた。

植村直己冒険賞

自然を相手に創造的な勇気ある行動をした人または団体に贈呈される。

歴代18人の受賞者のうち山で受賞されたのは7人で、あとは単独ヨットでの海洋横断、自転車での世界一周、徒歩の極地横断などです。第一回受賞者の尾崎隆は、2011年エベレストで死亡。第五回受賞者の神田道夫（熱気球横断）は、2008年太平洋で行方不明となっている。

この賞は1996年に創設されたため、1962年太平洋単独横断に成功した堀江謙一は歴代受賞者に名を連ねていません。だが堀江の偉業こそ冒険賞に値するものであり2008年、長年の行動に対して特別賞を授与されている。彼以後ヨットでの受賞者がいますが、山で言えば初登頂でなく既登の山を登頂したのと同じで、創造的な行動ではありません。極地の横断、エベレスト登頂なども先人のコピーであり、創造的とはいえない。受賞者の中には、これが冒険かと首をかしげる人もいる。

いま、冒険の定義も曖昧なまま、賞があるから受賞者を選ばねばならないとしたら、選考委員は

困惑しているでしょう。副賞として百万円が贈呈されます。

秩父宮記念山岳賞

登山活動の分野と山岳に対する研究や活動で顕著な業績を挙げた団体や個人に対して授与される賞で、日本山岳会で審議され副賞として二十万円が贈呈される。

行為に限定して表彰される、ピオレドール賞、植村直己冒険賞に対して、この賞は知的営為の成果にも与えられる賞です。次世代に登山文化を継承するという意味で、研究成果の発表費用を支援する出版社、メディアが現れる事を切望します。

梅棹忠夫 ・ 山と探検文学賞

創設されたこの賞の第三回受賞作品に高野秀行著『謎の独立国家ソマリランド』が選ばれた。植村直己冒険賞の選考委員である椎名誠は、冒険が冒険であった時代が過ぎたいま、エンターティンメント探検作家、高野秀行さんあたりの人たちが、そのうち選考委員になって、植村直己冒険賞が自然を対象とした行為に限定せず、例えばソマリランド現地取材記のような作家活動も受賞対象になっていくことを期待する、と言っています。

メスナーの本

山に関する本の刊行は激減している。

いま刊行を切望するのは、登山が盛んな国々の登山文化史を時系列で網羅した内容の本だが、売れそうもないこんな本の刊行は多分ないから、それぞれの国の山岳会々報から、切れ端のような資料を収集するだけで、これでは登山文化史になりません。こんな時メスナー著『わが道　限界挑戦者の総括』上梓を知った。

この書はメスナー著『裸の山』の訳者・平井吉夫が同書のあとがきで、メスナーの山岳家、探検家、哲学者、政治家、農場主、山岳博物館の企画・経営者、家庭人…等々の人生において、そのつど書いたり語ったりしたものを一書にまとめた興味深い本と解説し、雑誌 『山と渓谷』では、この書を行動記録でなく原題『わが道　限界挑戦者の総括』が示すように、生と死の境を歩きつづけた人間の思索のアンソロジー、書籍のジャンルで分ければ哲学書であると評している。同書と（注）既刊・メスナー自伝を併読した時、人間が元来持っていた全能力を昇華した行為と、メスナーの登山哲学を書き綴った書は、二十世紀の登山文化史を飾る白眉の作品といえよう。

参考までに既刊『ラインホルト・メスナー自伝』（1992）の内容を走り書きすると、第一部（1949～1971）、第二部（1974～1978）、第三部（1978～1990）で構成され、過ぎし彼の登山軌跡の流れを俯瞰し、十四座と七大陸を達成し全てをなし終えたメスナーが、1986年以後その行為を垂直から水平に。一介の徒歩旅行者となってチベット、ブータン、南極縦断と世界を股にかけた流浪の旅で、

心の静寂感と人生に対するある種の悟りを得たという終章で結ばれている。

振り返れば、1970年ナンガ・パルバート遠征で生じた誹謗中傷を乗り越え、山との格闘を続け1985年十四座を達成。愛弟ギュンターを失ったナンガ・パルバートの悲劇でメスナーの反論を封じ、絶版とさせられた『赤い信号弾・1971』の復刊ともいえる『裸の山・2002』の刊行で、積年の争いに一応の結着をつけたメスナーが『わが道　限界挑戦者の総括』を2006年に上梓したという。

この書の序章でツアー旅行と堕した高峰登山を批判し、ソ連撤退後に崩壊したモンゴル都市の朽ちていく有様、石油産業や鉱山業で汚染され見捨てられたカナダのある地域、中国の核実験で放射能にまみれたタクラマカン砂漠などに言及し、未来の限界への挑戦は、自然を対象とするだけでなく、まさにこういう場で行われるだろうと、人が為した所業に立ち向かわねばならぬ冒険を示唆している。

1944年生まれ、メスナー63歳の作品です。いま老境に達したメスナーは曼荼羅絵図を前にして、孤高の哲人の風貌で次なる旅の構想を練っているのか。いかに頑張ろうと忍び寄る人生の黄昏。超人メスナーはどこに向かうのだろう。

（注）この書は『極限への挑戦者 』と題されて2013年11月　東京新聞社より刊行。

インターネットでの報告

山岳会の年鑑誌にもはや登頂記はなく、登頂記録はインターネットでの報告がほとんどです。今日登った山がリアルタイムで伝えられるとき、それに遅れて刊行される紙の登頂記を読む人は少ない。

海外の山についてインターネットの中には、書いた当人しか読まないような記録と文章が溢れかえっている。商業公募登山でなく、自分の登山を計画している人は、登山中に感じた心情や風景描写に修辞を凝らした文章など読まない。検索者（登山者）が知りたいのは、登山費用やコースタイム、ルート状況、現地交渉先などに限定した、詳細かつ具体的ガイドブックのような報告です。

「有料」登山事情

ヒマラヤ、カラコルムでの登山では、ネパール、パキスタンが定めた標高、季節別の登山料が制定公示されている。

中国（チベット・新疆ウイグル）では、登山料の制定公示はありません。

したがって中国では「中国チベット登山協会」と交渉して登山料を決めることになる。中国に遠征した隊の報告書に総費用の記載はあるが、ここに登山料という項目は見当たりません。

ロシアの登山家がキルギスの登山料は高いという記事を見たが ― つまり登山料がある ― タジキスタン、キルギス他の山でも登山料が要るようです。登山するのにいちいち値段交渉などやってられない。中国も他の国も、せめて指標となる登山料は公示してほしい。参考となる事例を紹介

します。

四川省外国登山隊登山登録料・規定　中国登山協会・四川省登山戸外運動協会

1グループ10人以下の料金。10人以上は割引。

3,500米　～　5,500米「1人　500元」　　未踏峰15,000元　～　30,000元（1グループ）

5,500米　～　6,000米「1人1,000元」　　未踏峰20,000元　～　35,000元（1グループ）

6,000米　～　7,000米「1人1,800元」　　未踏峰25,000元　～　45,000元（1グループ）

7,000米級　　「1人2,800元」　　未踏峰無し

攀岩「1人500元」攀氷「1人500元」環境保護「1人200元」他、連絡官　通訳　コック　工作員　高所協力員の日当。中国側の食費「1日120元・別途燃料費要」などの詳細が規定されている。

横断山脈研究会　2010年10月　ニュースレター記事に依拠

サガルマータ（エベレスト）の工作代などの改正について

ネパール側からのサガルマータ登山ではSPCC（Sagarmatha Pollution Control Committee：サガルマータ地域環境保護委員会）が、クンブ氷河の登山ルート工作を行っており、各国隊は独自の工作は行わないシステムになっている。これは登山隊が殺到し勝手にルート工作を行う昔方式では無駄が多く、氷河上を汚す原因になるからとされている。この春から料金改定を行った。従来はグループ単位であったが今回は個人ベースになった。新料金：一人、US＄550（内訳；全体のメンテナンスUS＄400、ロープ使用US＄150）

SPCCは今回C2から頂上までロープを張るが使用の有無にかかわらず費用を支払う事としている。因みに、2011年プレ・モンスーン期に26隊251人が入山している。殆んどの登山者はシェルパを雇用しているので1000人以上の人がクンブ氷河上にいたことになります。

日本ヒマラヤ協会発行2011年6月「ヒマラヤNO457」記事・抄録

日本の山に回帰する

懐古趣味での話ではない。

ヒマラヤ、極地への挑戦はこれからも続くだろうが、それとは別に日本の登山の底流にあった山人と山との関わりや、失われた山文化を見つめなおす登山が展開されるだろう。山菜やキノコ・イワナを焚火で調理して自然と共生する山の生活を体験し、人間が元来持っていた山と共存する生活能力を呼び起こす。

このような登山は未完となった今西錦司の『日本山岳研究 』を継承し、生物的、民族学的な登山を作りあげていくかもしれない。電子機器に埋もれて五感を鈍化させてはならない。電池やガス

がなくても大丈夫。携帯電話やGPSは持たず山との結びつきから生まれた智恵、知識、勘で山を読み解く。

大正時代に大天井岳から槍ヶ岳へぬける喜作新道を開削した小林喜作(1875～1923)。大正10年5月、白山連峰を縦走(注)した稲坂謙三と立山のガイド佐伯平蔵。彼らの行為は日本の山登りを実践した記録として尊重したい。

(注)コース:白山主峰 ― 妙法山 ― 野谷荘司山 ― 瓢箪山 ― 仙の窟岳 ― 笈ケ岳 ― 大笠山― 奈良岳 ― 赤魔古木山 ― 大門山 ― ブナオ峠 (富山県上平村)

赤蜘蛛同人　　岩壁にへばりついた五人の赤蜘蛛

昭和四十年代半ばごろ長野県駒ケ根市、諏訪市を拠点とした登山グループ。

同グループのリーダー井上進がNHKの仕事で日本アルプスを空撮中、甲斐駒ケ岳に突き上げる赤石沢に三つの壁が連続して甲斐駒ケ岳に続いているのを見た。

この三つの壁にルートをのばせば実に千メートルを越す大登攀となる。

「この壁を登ろう」 1968年、井上進ほか四名で赤蜘蛛同人が結成され無雪期も積雪期も登った。結成以来四年間で目的を果たし赤蜘蛛同人は解散した。

井上進は著書 『長い壁・遠い頂』(神無社) でこう述べている。

「振り返れば、私(井上)と甲斐駒・赤石沢との付き合いは、1964年初めてこの壁に触れて以来八年の歳月を数えた。目的は達成された。赤石沢にもう未練はない」

彼ら五人の赤蜘蛛はそれぞれ生業を有し社会人として家庭を支え、地域社会に根を下ろしながらの登山活動であった。時間と資金の余裕からスター的登山家にはなれなかったが、彼らにもし余裕があれば世界でもトップクラスの登攀を為し得たかもしれない。欧州アルプス未登の氷壁・モン・ブランのブトレイ大岩壁(注)で、新ルートを開拓した「井上・松見ルート」がそれを証明する。

(注)1957年、ボナッティ、ゴビーの二人は岩稜部、つまり尾根の部分を主体に三日で完登。

1975年、赤蜘蛛同人の二人は、クーロアール部(凹状地形)を主として一昼夜に満たない速攻で完登。

安東浩正　自転車で世界を走る

冬季チベット高原6500キロを2回に分けて単独で走破。

冬季シベリア単独自転車横断。14927 km、248日間で達成。

2001年5月、'03年5月とチベットに行き、ほぼ同じコースを四駆動車で走った。帰国して走った道をたどりながら安東の著『チベットの白き道 』(山と渓谷社・1999)を再読したとき、自転車を友として荒野を駆け抜けた安東が、行為と思考を通して感じたチベットに比べ、車で移動しただけの

旅にあったのは、悪路の砂埃から解放された安堵感だけ。安東が感じた旅には遠く及ばない。

安東はグリーンランド、パタゴニア、ヒマラヤ、インドと地球を駆け巡る。

詳しくは安東浩正で検索してください。

時期は忘れたが横断山脈研究会で彼と話をした。バンタム級のボクサーのような体形で、片岡鶴太郎の頭髪をふさふさにし、もっとやさしい目元にした童顔の男。シベリアからくれたメールは最初「ナニ」語か？　辞書がいるのか。よく見ればすべてローマ字の表音表記で、らくに判読できた。全文引用すると紙数がつきるので、私書の無断公開になるので、序文に該当する箇所のみ引用します。

ANDOU　DESU

SIBERIA TOUTYAKU REPOOTO NO KANTANNA HOMEPAGE WO TUKUTTEMIMASITA. NIHONGO HA KOTIRA NO KONPYUTA DEHA TUKAENAINODE KAMI NI KAITE SUKKYAN SITE APPUROODO SIMASITA.　YOKATTARA　NOZOITEMITEKUDASAI.

トモ・チェセンの顔写真

ナンガ・パルバートでビバーク。下山したヘルマン・ブールの顔写真には、凍傷と疲労の極のしなびた老人の顔が映っている。

山野井は、1990年ソロでローツエ南壁を登頂したというトモ・チェセンの下山後の顔写真を見て、直感でこの登攀は怪しいと感じたという。チェセンは、7500m、8200m、7300mと三回のビバーク。ビバーク・ザックとシュラフを携行していたとは言え高所で62時間の行動をして、「精気を使い果たした表情ではない」

2000年、K2から下山したときの山野井を出迎えたベースマネージャの寺沢玲子は、彼の様子をこう語っている。ズボンの前チャックを下ろす力がなくそのまま放尿した。生きているというより死んだ人間の表情だった。

エベレストでのパフォーマンス

19世紀、余裕のできた人々は登山という遊びに眼をつけ、20世紀になって遊びに満足できない人達は、ママリーが提唱したアルピニズムを中央アジア・ヒマラヤの山に求める。シプトン、ティルマンの純粋遊戯のような探検登山の時代（1930～1940）は過ぎ、20世紀半ば地図の空白部がなくなったとき、条件つき登山（新ルート・冬季・ソロ・無酸素・登攀具の制限）で冒険の舞台を設定したが、一方でアルピニズムなどとややこしく言わず、遊戯の極としてエベレストでさまざまなパフォーマンス登山が演じられた。

1970年　三浦雄一郎　サウス・コルからスキー滑降

1992年　ピエール・タルティベルガー（仏）　南峰8760m地点からスキー滑降

1994年 ロブサン・ザンプー シェルパ伝統衣装で登頂
1998年 ジャンマルク・ボアヴァン（仏） 頂上からパラグライダーで滑空下降
2001年 石川直樹 （早大生）（23歳と328日） 世界最年少7大陸最高峰登頂
2001年 視覚障害者のエリク・ヴィマイヤー （米） 登頂
2001年 プロ・パラグライダー ロシェ夫妻（仏） 山頂からパラグライダー滑空に成功
2001年 テンパ・チリ ・シェルパ（ネパール）（15歳・男性） 登頂
2002年 ネパール政府は最年少登頂記録の競争過熱を避けるため16歳未満の登頂を禁止
2002年 山田 淳 （東大生）（23歳と9日） 世界最年少7大陸最高峰登頂記録更新
2002年 タシ・ワンチェク （テンジンの孫） 5月16日登頂
2002年 ピータ・ヒラリー （ヒラリー卿の息子）（54歳） 5月25日登頂
2003年 ミンキパ・シェルパ （ネパール）（15歳・女性） 登頂
ネパールは16歳未満のエベレスト登頂を禁止していたので彼女はチベット側から登った
2010年現在ネパールは、18歳未満の登頂を禁止
2003年 ペンパ・ドルジユ シェルパ BC （5400m） から最短8時間10分で登頂
2006年 両足義足のマーク・イングリス （ニュージーランド） 登頂
2008年 三浦雄一郎 75歳 登頂
2008年 ミンバハン ドウール シェルチャン （ネパール） 76歳 最高齢登頂
2010年 ジョーダン・ロメロ （米） 13歳 登頂最年少記録更新
2011年 ジョージ・アトキンソン （英国） 16歳登頂
2013年 三浦雄一郎80歳 登頂 最高齢登頂記録更新

皮切りは1970年、三浦雄一郎サウス・コルからのスキー滑降。加えて2013年、80歳での登頂と流石は冒険演技の第一人者です。

探検を書いた本

平成の探険家、角幡唯介 ・ 石川直樹 ・ 高橋大輔、三人の作品を紹介します。彼等のプロフィールはネットで検索してください。

角幡唯介 （1976～）

『空白の五マイル』

「今の時代に探検や冒険をしようと思えば、先人たちの過去に対する自分の立ち位置をしっかりと見定めて、自分の行為の意味を見極めなければ価値を見出す事は難しい」（角幡唯介 ）

この文章、一読して意味が分かりますか。すみません、うまく説明できません。皆さんで考えて

いただくとして『空白の五マイル 』の話を続けます。

角幡が探検したこの場所は中国当局が入域禁止としている地域で、空白は人為的なものです。彼はソレを承知でこの地域に入り監視員の尋問をすり抜けて空白を埋めました。キングドン・ウオードの残したこの「空白の五マイル」は、探検が探検であった時代の 舞台が現代まで残されている、おそらく世界で最後の場所だった。(キングドン・ウオード:ツアンポー峡谷の謎 ・岩波文庫)

探検史を精査してこの空白部を見つけた角幡は興奮したに違いない。

だが角幡のツアンポー峡谷探検は立ち入り禁止地域だったから、中国で公表できない。この本が外国で翻訳刊行されたともきかない。日本でごく僅かの人が評価したこの探検が文明社会の共有物になったとは思えず『空白の五マイル 』は、空白を埋めたという角幡の自己満足に終わった作品です。

本多勝一の文章を補足します。

「たとえば無人島を探検してもそれだけの自己満足だったり、探検記や調査報告書を書いてもそれが島の中から外に出ないのでは意味がない」

『アグルーカの行方』

アグルーカとはイヌイットの言葉で「大股で歩く男」の意味。

1845年、ジョン・フランクリン率いる北西航路探検隊は、129人の隊員と3年分の食料を二隻の軍艦に乗せ、イギリスから出発する。北西海路の調査は19世紀当時、北極沿岸の未踏部分500キロメートル足らずを残すのみになっていた。

この遠征が成功すれば、北極圏からアジアに抜ける人類未踏の航路が完成する。現代の感覚では月や火星への宇宙探検に匹敵する一大事業だった。しかし、フランクリン隊は同年にメルヴィル湾沿岸で捕鯨船に目撃されたのを最後に、消息を絶つ。いったい彼らに何が起こったのか？ 興味をひかれる物語だ。フランクリンの北西航路探検の話を聞くと、つい関連本が読みたくなる。しかし読み調べるだけでは気が済まず、実際に同じルートを歩いてみようと考えた男たち。角幡と相棒・荻田泰永が、アグルーカの航路と足跡を追って橇を曳き、過酷な状況に耐えた109日間、1600km の行動を書いたドキュメント。

食料確保の為にジャコウ牛を射殺する。残された仔牛が親牛の死に抗議するシーンの描写は胸打つが、単調な氷原の風景と、乱氷原で橇を曳く場面の描写が繰り返され、主題のアグルーカの行方については、本文中にその記述がほとんどない。一世紀半以上も昔、消息を絶った隊員たちの謎を探るという題材で書かれた本なら、狩猟した文献や資料の「隙間」に歴史的事実が宿っているかも知れず、歴史の現場にいたからこそ湧き起る角幡の推量や想像を本文に加えていたら、もっと面白い読み物になっただろう。読者は本に面白さを求めているので、ノンフィクショ

ンの立場を少し離れても良かったと思う。

例えば実際にあった事件や実在した人物を題材にし、その資料を丹念に取材し積み重ねた吉村昭の作品は、ジャンルとしては小説ですが、ノンフィクション的な読み物(記録文学)として、息長く作家活動を継続されています。

『探検家 36歳の憂鬱』

「探検を表現することを前提にすればその行為の純粋性を保つ事は難しい」

角幡の謎解きパズルのようなこの文章には困惑する。

探検記を書くためにする探検では、全てをありのままに書くことは難しい、という意味らしいが、物書きなら見返り(刊行と売れ行き)を期待した探検記を書くのは当然で、本来探険家とは職業でなく「ひとつの生き方なのだ」そこに打算などないと言う純粋な探検(表現)は、観念の世界にしか存在しない。

角幡のとき実際に歩いて体験したことだけを書く、という「しばり」があって、次なる探検対象が見当たらない。思えば自分で探検や冒険旅行をして、それでノンフィクションを書こうと思って新聞記者を辞めたのだが、現場の体験をありのままに書くと読み物にならない。これでは物書き失業だ。実は探検や冒険はノンフィクションに適さない分野であると執筆中に知ったのでしょう。

加えてオジサンでもお兄さんでもない年齢と、食事の不便から生涯の伴侶を考えるが、家庭を持ったとき、危険な探検が出来るだろうかと悩む。

だから今は憂鬱という事らしい。

ひとたび「もの書き」になってしまった以上、旅そのものをありのままに語る事はできない。物書きが紀行文においてさりげなさを装うことは欺瞞にすぎない。(沢木耕太郎)

探検ノンフィクション作家を標榜する角幡が、沢木の言葉を噛みしめる時、書くことにためらいを覚えるに違いない。

『雪男は向こうからやって来た』

開高健ノンフィクション大賞を受賞した『空白の五マイル』の前年、同賞に応募し落選していた本である。当初の応募作品と大枠は同じだが、プロローグは全面的に書き換え、エピローグも大きく手を加え、構成を練り直しては何度も書き直し、推敲を何十回も加えたとある。もとより雪男の存在に何の客観的根拠などないが「雪男がいるかも知れぬ」と思いつめ、ヒマラヤの山中に棲むという謎の動物、その捜索に情熱を燃やした人たちの物語。

二本足歩行動物の写真(不鮮明で正体不明)。シプトンが撮影した足跡、ほか多くの文献を精査し、いつもの事ながら豊富な資料に目を通しそこから自分で行動し、その体験を書くというノンフィクション作家活動。そこに行き詰まりを感じていた角幡が、探検ノンフィクション作家の看板をはず

し、多くの関係者に取材しジャーナリスト角幡唯介となって書いた作品で、探検記ではない。この作品で角幡は作家として新しい道を拓いた。

石川直樹（1977～）

「探検の結果が文明社会の共有物になっていく。つまり自己満足だけに終わっている行為は、探検ではない」（梅棹忠夫）

石川は梅棹忠夫の言葉に対し自分の立ち位置をつぎのように語っている。社会情勢の変化や科学技術の発達によって大きな価値を持つ冒険や探検の対象が地球からなくなった。冒険や探検は社会から離れ完全に個人の行為になった。個人的事情ではじめられる行為になった。

『この地球を受け継ぐものへ』

この作品で当時23歳の石川は、作家、登山家、写真家としてデビューする。

2000年、カナダの冒険家マーティン・ウィリアムスが企画したプロジェクト「Pole to Pole 2000」で日本の代表に選出され参加。世界7カ国の若者と共に、4月5日から12月31日まで9ヶ月間かけて、北極点から南極点をスキー、自転車、カヤック、徒歩などの人力で踏破した。この書はテントのなか、草原、海の上、砂漠、氷点下の極地など、さまざまな場所での体験、出来事、感じたことを書いた日記風のエッセイです。

快適と利便から離れた旅で石川が得たものは、利便を優先した環境破壊からくる地球汚染に対する反省と警告です。

『この地球を受け継ぐものへ』という書の表題には、地球を受け継ぐ人たちに、この地球を守ろうという提言が込められている。

写真家としてデジタル技術を駆使する石川ですが、その思考はきわめて情緒的で、ブラジル・カピバラ山地古代遺跡に現存する洞窟壁画を見たとき、社会人類学者レヴイ-ストロース著『悲しき熱帯』の終章にある一節「世界は人間なしに始まったし、人間なしで終わるだろう」を引用し、栄えていた文明もいつかは滅びる。永遠に変わらないものはないと、文明の興亡に無常を感じている。

神田道夫との熱気球冒険を記した『最後の冒険家』は、ノンフィクション大賞を受賞しました。熱気球の故障から海上に不時着し、死ぬ寸前まで行った、この書の内容はまさに冒険でした。

高橋大輔（1966～）

『ロビンソンの足あと』 日経ナショナルジオグラフィック社 2010

絶海の孤島に漂着して28年。島の近くを航海していた船に救助され、イギリスに帰国したロビンソン・クルーソーの島での生活を書いた『ロビンソン・クルーソー漂流記』は、世界中で翻訳出版

された。ここまでは誰でも知っている話だが、実はロビンソン・クルーソーという人物は存在せず、したがってこれは実話でなくフィクションだった。

だがロビンソン・クルーソーにはモデルがいた。それはスコットランドの船乗りアレクサンダー・セルカーク（1676？～1721）という人物で、彼は1704年チリ沖の島に置き去りにされ、1709年海賊船によって救出され故国に帰国した。イギリスに戻ったセルカークの体験談は1713年に出版され、ダニエル・デフォー（1660？～1731）が書いたロビンソン・クルーソー物語の出版は、その数年後のことである…… とまぁ、300年近くも昔の話を掘り起こし、その事実を確かめるため、ナショナルジオグラフィック社の支援を受けた高橋大輔が、1994年から2005年までの計5回、チリ沖のロビンソン・クルーソー島（旧ファン・フェルナンディス島）で探索を重ね、セルカークの住居跡をはじめ、彼が実際に暮らしていたことを証明する確かな手がかりを得て、伝承の謎を解いた物語。

ダニエル・デフォー（思想家・英国）が書いた『ロビンソン・クルーソー漂流記』は、セルカークの実話をヒントにして、英国の植民地獲得帝国主義をオブラートに包み、勤勉と自立を国民に啓蒙した書である事は、山田篤美の『黄金郷伝説』（中公新書）～スペインとイギリスの探検帝国主義～に詳しい。

大塚久雄は『社会科学の方法』（岩波新書）で、ロビンソン・クルーソーを「中産的生産者層に属する経営者」のモデルとみなし、「さまざまな資材と労働をむだなく、しかも合理的に組み合わせ、そこに人間労働の合理的な組織をつくりあげた」と賞賛している。

高橋もデフォーは漂流記の体裁を取りながらも、小説の主題は植民地を拡大し、南海交易を促進させるという政治思想を反映した書と書いているが、高橋の本の主題は、ロビンソン・クルーソーすなわちセルカークの謎解きだから、218ページの本文でわずかに4行、デフォーの思想に触れているだけである。

高橋は浦島太郎、ロビンソン・クルーソー、サンタクロース、間宮林蔵たちの伝承や実録と、高橋の思考との間を自在に行き来し、謎解きは「旅の中にある」と地球の各地に探検の足あとを残している。

彼については「探険家・高橋大輔」で検索してください。

大放浪の二人、 鈴木紀夫 ・ 立田 實 を語る

鈴木紀夫 （1949～1986）

すべてが無茶苦茶だ。旅や探検にはメモ1枚でも行く先や目的を書くのが普通だが、鈴木にそんなものはない。徹底的に無計画、無目的、行き当たりばったりな行為の連続。最後はダウラギリ峰のベースキャンプ（3700m）で雪男を監視する傍ら周辺を歩いて捜索中、消息を絶つ。

千葉県市原市出身。昭和43年法政大学経済学部（夜間部）に入学。アルバイトで資金を貯め、と

にかく海外へと日本を離れる。『大放浪』 鈴木紀夫 朝日文庫。

昭和44年、その旅は横浜港から船でバンコックに出発したところから始まる。貯金の27万円は、船賃と装備購入に費やしたため残金は76ドル。

所持金は二週間で尽き、ほとんどヒッチハイクでバンコックからカルカッタ、ニューデリー、イスタンブール、ヨーロッパに入りギリシャ、ユーゴスラビア、オーストリア、ドイツを離れてイスラエルのヒッピー村で長期滞在。売血までして金を作りインドを経て再びヨーロッパに。シリア、ヨルダン、クウェート、イランを巡って日本に帰国。電子メールや携帯電話のない時代の3年9ヶ月に及ぶ、旅でした。(旅の途中で二回、実家に金の無心をしている)

帰国して一年後フィリピン・ルバング島で元日本兵が現れたという報道を見て、ルバング島に入り、住民に「オノダが良く姿を見せるところ」と聞いた山中にテントを張る。昭和49年1月20日、戦後29年を経て忽然と現れた「戦時中の日本兵」 小野田少尉と邂逅(かいこう)し、政府に連絡して彼の帰還に貢献した。日本政府は小野田の捜索に1億円以上使ったといわれているが、鈴木は自前格安で小野田寛郎を救出したのです。

帰国した鈴木にメディアが殺到。取材謝礼でかなりの大金を得た彼は、雪男の捜索に6回出かけ、昭和63年11月13日付けの妻への手紙を最後に消息を絶つ。

一年後ダウラギリ峰のベースキャンプ付近で、雪崩に埋没し白骨化した遺体が発見される。放浪の旅で夢を追い続けた男。白骨化した鈴木は、まだ雪男の夢を追っているでしょう。

補遺;角幡唯介の『雪男は向こうからやって来た』＜冒険家鈴木紀夫だけが知っている雪男＞の章に、鈴木の雪男捜索に関する詳述がある。

立田 實 (1937～1982)

東京生まれ。中学生の時尾瀬ケ原、雲取山、白馬岳に登って山に魅せられ1954年、東京緑山岳会に入会(16歳)。1955年、年間山行72日。何時勉強したのか信州大学に入学したが日本大学獣医学部に転校、だが卒業はしていない。1957年の山行は206日。これでは学校に行く時間はありません。同年厳冬季の知床岳ソロ。谷川岳南稜登攀ソロ。

1965年海外渡航自由化を機に世界の山と国に放浪の旅を重ね、45年の生涯でおそらく5000日ほどを山と旅に費やした。

何しろ記録の全てを立田自身が亡くなる前に焼却しているので、未亡人立田加寿子 筆・ペン書きのメモ、東京緑山岳会収録の記録から彼の登山歴と旅の一部を紹介します。

・アコンカグア南壁完登 ・グランドジョラス敗退 ・マッターホルン北壁完登 ・モンテアニール北壁完登 ・アイガー北壁敗退 ・ナンガパルバット南壁偵察(ソロ) ・ダウラギリ偵察 ・スピッツベルゲンの山六峰(ソロ) ・サウスジョージア3000メートルの山六峰 ・アラスカ・ローガン ・アフリカ・ケニア山など八峰 ・アルゼンチン南端(チリ含む) ・チベット入国一ケ月、ネパー

ルよりブータンを経てビルマに至る

この他エベレストには、アルゼンチンの登山隊にシェルパに変装して紛れ込みサウス・コルまで。行ったことのない国はオーストラリア、ニュージーランド、北朝鮮、台湾。信じ難い遍歴で「この話、本当なのか?」と首を傾げるが、 立田 實は酒造問屋(五分利屋)の六男として生まれ、実家が事業を多角化して裕福だったので定職につかず、山と旅に明け暮れた人生を享受できたのです。

謎の登山家の物語は、遠藤甲太がまとめたルポルタージュに詳しい。その内容は立田 實が渡航先から宛てた手紙や、わずかに残された写真・メモ。所属する東京緑山岳会の会報からの収録。生前に会の仲間や夫人に断片的に語った話などを丁寧に拾い集めたものです。

『失われた記録ー立田 實の生涯』遠藤甲太・いなほ豆本・1986・いなほ書房

『駆ける山々5000日ー立田 實 追悼誌ー』東京緑山岳会 1984／非売品

中国(チベット)高峰登山の進展

1960年西蔵登山隊創立。海外の遠征隊に高所協力隊員として多くの中国・チベット登山隊員が参加している。1999年チベット登山学校創立。無料の寄宿生活で3年間かけて登山技術を研鑽し、卒業後は登山を仕事にするそうです。

中国(チベット)ガイド登山の現状

1999年から中国の経済力向上と国民生活水準アップにより大衆レジャーは活況を呈し全国各地にアウトドアー産業が開花し高山探検やガイド登山が盛んになっている。1999年中国登山協会、中国登山隊に所属する王優峰と馬欣祥が青海省の王珠峰(6178m)で初のガイド登山ツアーを試みた。同年中国の登山探検に従事する人員を養成する目的でチベット登山学校が設立されている。

2001年チベット聖山探検会社が正式に成立し、中国で初の高山探検ビジネスモデルを確立。同探検会社は毎年7000m～8000m以上の高峰ガイド登山をメインに主催し、高峰登山ビジネスをほぼ独占している。

横断山脈研究会会報・2013年3月「雀児山の登山記録」松山峰子 記事抄録引用

チベットに高所登山救援チーム発足

2010年12月30日 新華社・ラサ発の情報ではチベットに高所登山専門の救援隊が発足。この「チベット高山救援隊」を率いるのはチベット登山学校校長を務める尼玛次仁(ニマ・ツェリン)氏。隊員はチベット登山隊々員、チベット登山学校卒業生、チベット聖山探検公司のガイドらによって構成されています。

救援隊の活動範囲

青海、四川、雲南、新疆ウイグル、8000m 峰での救援活動も含まれます。

救援隊設立の背景は、外国人登山者の増加よりも、中国国内のアマチュア登山者による高所登山の増加、これに伴うアクシデントの増加があります。近年、高所登山の事故増加により、組織化された救援隊が必要になってきたと記事で紹介されている。

ソビエトのアルピニズム

雑誌『岳人』に連載された「ソ連アルピニスト列伝」田村俊介・筆に紹介された11名の登山家のうち、セメノフスキー、エフゲーニー・アラバーコフ、セルゲイ・ベルショフたち3名の登山軌跡を辿るとき、ソビエトのアルピニズムの流れが見渡せる。

田村俊介の記事に拠れば「1800年代の後半イギリスの大勢の登山家がカフカスを訪れ多くの峰々に初登頂を行ったが、その頃のロシアには登山とかアルピニズムの概念は無かった。ロシアで農奴解放令が公布されたのが1861年の事であるから登山などに現(うつつ)を抜かしている余裕などなかったのである」

セメノフスキー (1884～1938)

ロシア革命動乱時スイスに亡命して山案内人として働き、現地でガイド試験に合格して多くの登山客を案内した。

ロシア革命終結後スイスから帰ってきたセメノフスキーは、ドイツの登山家たちとともにカフカスのシハラやウシバ南峰に登り、ソ連で最初の難峰登攀の実績を示すとともに西欧の登山技術をソ連に伝えた。ここにソ連におけるアルピニズムに対する認識が次第に明らかになり、1936年ソ連スポーツ委員会の中にソ連アルピニズム部会が設置され、セメノフスキーはその委員長に選ばれた。

「セメノフスキーが西欧の近代アルピニズムをソ連登山界に伝えた功績は、ソ連登山のその後の大きな飛躍になくてはならないものであった」(田村俊介)

エフゲーニー・アラバーコフ (1902～1949)

1933年ソ連最高峰コムニズム峰初登頂。1934年レーニン峰第二登。1936年ハン・テングリ登頂。1937年ウシバ北峰から南峰初縦走。1939年マルクス峰初登頂。1947年～1948年ソ連邦建国三十周年記念峰(6440m)初登頂と、ソビエト・アルピニズムの黎明期に活躍した最強の登山家です。ソ連邦の高峰で鍛えあげた高所登山技術を活かし、K2やエベレスト遠征を視野に入れた計画を進めていたともいわれている。

だが国家が介入したアルピニズムの負の部分、詳しくは体制が生み出した毒の文化に圧殺され

て、セメノフスキーはスパイとして銃殺処刑。アラバーコフは自宅で不審死と、二人のアルピニストの最期は悲惨だ。

セルゲイ・ベルショフ （1948～）

ウクライナ生。 1971年23歳で岩壁登攀部門のスポーツ・マスターとなった岩登りの達人。

1982年エベレスト南西壁遠征隊員に選ばれ夜間登攀を敢行して22時30分に登頂。さらに仲間救出の為8000m以上の高所で36時間行動したという。更なる快挙は1989年カンチェンジュンガ縦走で登攀隊長だったベルショフは、4月15日まず南峰に登頂。さらに5月1日ベルショフ隊はヤルン・カン、主峰、中央峰、南峰の頂上にたち合計で8000m峰5峰を一挙に陥れたのである。

1990年ベルショフら二人は、前の年にメスナーが敗退、ククチカが墜死した難攻不落のローツエ南壁に挑み、別ルートから完登した。

ソ連邦で鍛えられたアルピニズムが、この三つの遠征によってヒマラヤで、その力量を証明した。

1984年来日した彼は道場の百丈岩で岩登りを行い、富士山にも登っている。

セメノフスキー、アラバーコフたちに遅れて、粛清の嵐が去った時代に生まれ、三つの遠征に参加できたセルゲイ・ベルショフは、ペレストロイカ時代がもたらした自由な登山という幸運を掴んだアルピニストです。

国防と結びついたアルピニズム

その一人スターリンの故郷グルジアの登山学校の指導者として、3000人の登山コーチを育成したベレッキー（1909～1980）の名を挙げる。

1942年ドイツがコーカサスの最高峰エルブルース（5633m）を制圧し頂上に高倍率の望遠鏡を設置し、その監視に合わせてドイツ軍は空軍と砲兵を繰りだし効果的な攻撃をくわえた。ソ連最高指導部は何度か部隊を山に派遣したがいずれの部隊も山岳地帯での作戦訓練を受けたことがなく、また登山装備を欠き登山技術も知らなかったため部隊全員が重い凍傷にかかり、敵に出会う前にすでに戦闘力を失っていた。指導部はエルブルースに登ったことのある登山家、コーチに招集令をかけた。

こうして登山家らによるアルパインキャンプが設けられ 1943年エルブルースに登頂して侵略者を殲滅した。ベレッキーはこの戦争の参加者で「赤旗」勲章を授与された。これ以後、国の治安維持のため国境を監視、警備する部隊の訓練教官だった登山家たちには、長期休暇や装備の特別支給などさまざまな特典が与えられた。

アルピニズムと国防が結びついたソビエトの登山家、コーチたちは、国家の庇護という恩恵を受け、これがソビエトのスポーツアルピニズムの発展に寄与した。旧レーニン峰、旧スターリン峰など、

時の権力者の名を冠した山があったのは、ソビエトのアルピニズムに国家が関与していたからである。

ソ連の海外遠征登山

「1958年ベレッキー他二人は中国の登山家と合同でチベット側からエベレスト北面を偵察した。このケースもそうであるがソ連の海外登山では、交換又は招待というパターンしか取られていない。単独で海外登山が行われないのは、登山がオリンピックの種目にも入っていないし、登山の相手が自然であり、どこの国に勝ったとか、世界記録を出したとかいう具体的成果が現れない事が主たる理由である。つまり、これが原因して国から遠征資金が出ないのである。それだからといって寄付を集めるなどということは体制上できないし、たとえ出来たとしても外貨をだしてくれる人はいない」（田村俊介）

1955年6月、中華全国総工会は、ソ連労働組合中央理事会の招きで、許 競、周 正ほか二名の青年を学習のため、モスクワ経由でスターリンの故郷グルジアの登山コーチ学校に派遣した。ソ連は中国の青年四人の教育・訓練担当者としてベテラン登山家でスポーツ功労者のベレッキー、ウカロフ両氏を派遣した。

1958年ベレッキーたちは、中華全国総工会の招きでチベットに入ったのです。

極限を登るソ連のアルピニスト

ソ連のアルピニストにとって、パミールや天山の六、七千メートル峰初登頂で最も実りの多かった時代は1950年～1970年代だった。1956年にポペーダ峰（天山脈最高峰）が初登頂され1970年代には既登の山々にヴアリエーションルートからの岩壁登攀が展開されている。

1967年、ポペーダ峰―西峰（6918）主峰（7439）東峰（7049）の縦走。ポペーダ峰は北緯42度に位置する地球上最北の7000m峰で高度、気象条件、地理的条件から、そのピークに立つこと自体ソ連邦で最も困難な山とされていた。

1970年、コムニズム峰（7495）南西壁登攀。同峰東稜北西壁登攀。ハン・テングリ（6995）北壁の東側壁登攀。これらはアルピニズム連盟が6級と認定していたルートである。1970年アルクス峰（6726m）北壁（平均斜度70度）登攀。

『ヒマラヤ研究』 原 真 渡辺興亜編〈極限を登るソ連のアルピニスト〉
田村俊介記事に依拠

1990年、ソ連領カザフスタンの登山隊がポペーダ峰からハン・テングリまで平均高度6400m、距離73.6キロを15日間で縦走。『BERG 2013』掲載記事。

山とアルピニストの等級づけ

登山を文化として位置づけると、雰囲気が楽しければよいということになって競争が生まれない。スポーツとして位置づければそこに競争が生まれ、レベルの差がはっきりする。さらに遭難防止の観点から山と人間に等級づけを採用し、そのためのルールとして西欧・日本にない独特のグレード・システムを設けた。

山の等級づけは西欧各国で確立しているが、ソ連が西欧と本質的に違う点は、人間の側も技術をクラス分けして、山の等級と関連させていることである。

「山は等級（カテゴリー）のつけられた山と、等級のないやさしい山に分けられる。人間もアルピニストとツーリストとは別の種類とみなされる。等級のない山はツーリストの対象だが、等級のある山は、訓練をうけてアルピニストの資格をとらなければ登れないことになっている」（本多勝一）

山の等級は、やさしい順に第一級から第五級までに格付け。アルピニストは初級、三級、二級、一級、スポーツマスターに格付け。（等級と格付けはさらに細分化されているが、ここでは大枠を記す。現在山の等級は七級までとなっている）

三級のアルピニストが四級の山に登ることは許されない。一級のアルピニストが五級の山で敗退した時は二級に格下げ。

格下げされたアルピニストが一級資格に復帰するためには、五級の山に二回登頂しなければならない、など厳しい基準を設けた。

ソビエト当時、全土に国や労働組合が管理・運営する43箇所の山岳キャンプがあり、25000人ほどの若い男女がキャンプ生活を楽しみ、アルピニストの訓練を受けていた。政府がアルピニズムを人間教育の手段とみなし、登山行為における連帯、身体強化、敢闘精神などは、ソビエトの社会主義的特性を教えるものとされていたからです。

ソビエトの登山競技会

1936年カフカスの山麓におおくの登山学校がつくられ、1946年には岩壁登攀、縦走、高所登攀の三部門に競技制度が取り入れられた。つまり岩登りを競技として、いち早く取り入れたのはソビエト連邦であった。

その競技会の頂点をなすチャンピオンシップ大会とは、ソビエト連邦全土から最強の8チーム（一チーム6人程）が集められて競うもので、1991年のチャンピオンシップ大会は、キルギスの AKーSU（アクス）地域で開かれた。近辺の五つの5000m峰の40あるルートを、与えられた15日間で登り、登ったルートの数と、グレード、スピードを競う。当然、悪天候を理由にしていては、競技に勝つ事は出来ず、全天候型のアルピニストが養成される。

この競技会での成果に応じて、スポーツマスター取得のポイントが与えられ、国家からの支援の

扱が決まる。ソビエト時代には、スポーツマスターになると声望だけでなく多くの特権が与えられたのです。

ソ連邦アルピニズムの最終章

高峰登山の経験を積んだアルピニストが多くいたソビエトに、8000m峰初登頂者がいないのは意外だが、1950年代の政治経済体制がヒマラヤ遠征を封じたのだろう。8000m峰に未踏峰がなく行き場を失ったソビエトのアルピニズムは、1982年5月エベレスト南西壁夜間登攀。1989年カンチェンジュンガ山群8000m峰、四つのピーク縦走と、バリエーションルート登攀や、8000m峰縦走で国が支援したアルピニズムの掉尾を飾る成果を示した。この二つの遠征は国費で行われている。1990年、セルゲイ・ベルショフ率いるソ連労働組合隊は、ローツエ南壁を別ルートから完登したが、この遠征が組合支援の最後の登山となった。

「全盛を誇った産業別労働組合傘下にあった登山団体の多くが解散し、各都市の登山家たちが自由にパーティを組んで山に登るなどペレストロイカの波は、登山界にも押し寄せ登山の自由化が進んだ」（田村俊介）

ソ連邦崩壊後　ロシアのアルピニズム

1993年、ソビエト連邦崩壊のあともスポーツマスターという制度は残されたが、ソビエト時代のように山岳への経済的援助がなくなり、若者たちへの支援もなくなりました。国家が何でもしてくれた時代は去り、山に登りたければ自前が当たり前になったのです。盛んに行われていた競技会も無くなり、キャンプで若い人を育てる機会も失われた。

ロシアとなって国の庇護を失った登山家たちは、ロシアで運転手やスキーのコーチ、山小屋の管理人となって生計を立てたが、登山以外にお金を稼ぐ術を持たず高峰登山の技術が高かった登山家たちは、西側諸国の公募隊ガイドという職業登山家の道をえらんだのです。

1980年代まで、「未知、未踏、より高く、より困難」という「アルピニズム」の本道をリードしてきた西欧のクライマーが山から去り、有名クライマー達が、エベレストのガイド、14座のコレクターへと方向転換をする中で、スポーツマスターでもある、アレクサンドル・ニコライヴィチ・オジンツォフ（1957～）（注）は、1995年「ロシア・ビッグウォール・プロジェクト」を立ち上げている。

その主旨はヒマラヤに立ち遅れたロシアの登山家達に、世界の困難な壁を10箇所選び、個人の記録は置いてロシア・ルートの名を刻むことを目的とするもので、1998年パギラディⅢ峰（インド）、1999年グレート・トランゴ（パキスタン）、2001年ラトックⅢ峰（パキスタン）、2003年ジャヌー北壁など最難関とされる岩壁登攀を達成している。

（注）1983年国際スポーツマスター。鉱山会社経営。鉱山技師。山岳ガイド。
ジャヌー北壁遠征隊の隊長として自ら提唱したプロジェクトに参加する。

これ以外にもバフィン島グレート・セルピーク、パタゴニアのフィッツロイ、ギアナ高地のロマイラなどがあるが、ロシア・ルートを拓くという意味から、あまり足跡のない場所を選んでいて、これではロシア登山のレベルがわかりにくいので、著名なヒマラヤ、カラコルム山群に絞って資料にある記録を列記します。

・1994年アマ・ダブラム南西壁初登頂　・1997年マカルー西壁初登頂、チョーオユ北壁登頂　・2001年ローツェ中央峰（8413m）初登頂　・'02年シシャパンマ東稜登頂　・'03ジャヌー北壁ダイレクトルート登頂　・'04年エベレスト中央北壁から新ルートでの登頂　・アンナプルナ北壁登頂　・ジャヌー北壁中央ルート登頂　・'07年K2西壁ダイレクトルートからの登頂　・'08年ブロードピーク北西壁登頂　・ガッシャブルムⅠ峰南西壁から登頂　・2011年2月、ヴィクトル・コズロフ（Viktor Kozlov）氏率いる16名の精鋭チームが、前人未到の冬季K2初登頂に挑んだが、隊員1名死亡により途中撤退　・2012年バルトロのムスターグ・タワー北東壁初登攀と、相変わらず困難なヴァリエーションの領域を追求している。

記録を見るとき国防によって育成されたロシアのアルピニズムに、個人志向優先のソロ、14座は合わず、ロシアの登山家たちは相変わらず中規模以上の遠征隊を組織し、成功率の高い極地法による登山を行っている。

なお遠征資金については、2000年ごろからロシア経済の拡大に伴い、限られた範囲でスポンサーがあると聞くが、その詳細は分からない。

2014年2月

謝辞

ソビエトのアルピニズムの章では、田村俊介氏から多くの資料を提供いただき、さらに数カ所で氏の文章を引用させていただきました。誌面を借りて厚くお礼申し上げます。

― 訃報 ―

訃報 ・ 関 集三 様

関 集三様（旧10理）が平成25年12月に逝去されました。

前穂北尾根3峰涸沢側フェイス・滝谷第2尾根（昭和6年夏）の初登攀をはじめ昭和初期の記録にお名前を残しておられます。昭和9年の「白亜城事件」メンバーのお一人でもあります。

関様からの会員短信をいくつかご紹介いたします。

平成22年（2010）

本年5月には満95歳になる老人そのものです。昨年の“山嶽寮”には、たまたま大先輩の伊藤 愿さんの御長女 松方恭子様の御配慮で、老生の想いで話を載せて戴きました。「伊藤 愿先輩の遺稿集に接して」と題して、昔の甲南時代の山登りを回想しました。これも“山嶽寮”の御蔭です。　（総会）

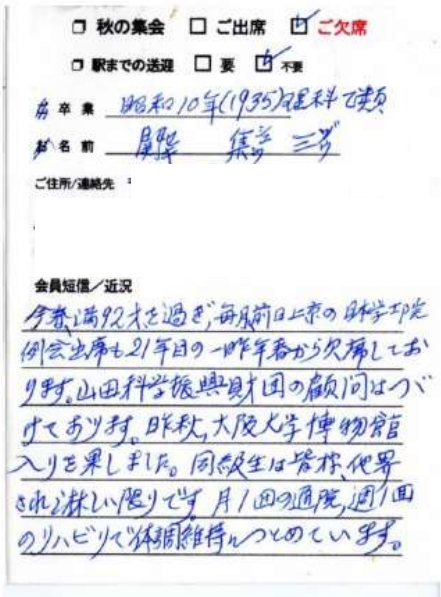
今年5月、満95才を通過いたしました。8月初旬にはつくば市で応用化学連合の化学熱学国際会議が、私共が創設した日本熱測定学会が中心になり開催、49カ国 約600件の研究発表、天皇皇后御臨席、文部科学大臣出席、国際化学連合会長等の祝辞で行われ、老生も名誉組織委員長の一人になりました。老人の私にとってうれしい事でした。　（秋の集会 ）

平成21年（2009）

本年5月満94歳になる老人です。昨年9月武田雄三様を通じ伊藤 愿先輩の滞欧目録“妻に送った九十九枚の絵葉書：松方恭子”をいただきその昔、愿さんと北穂ジャンダルムに登ったのを想い感慨一しほでした。私事で恐縮ですがですが、昨年長男一彦の死去で人生がすっかり変りました。まだ生存しているという思いです。　（総会）

平成19年（2007）

今春、満92歳を過ぎ、毎月前日上京の日本学士院例会出席も21年目の一昨年春から欠席しております。山田科学振興財団の顧問は続けております。昨秋、大阪大学博物館入りを果たしました。同級生は皆様他界され淋しい限りです。月1回の通院、週1回のリハビリで体調維持につとめています。　（秋の集会 ）


☐ 秋の集会　☐ ご出席　☑ ご欠席

☐ 駅までの送迎　☐ 要　☑ 不要

卒業　昭和10年(1935)理科で卒

名前　関　集三

ご住所/連絡先

会員短信／近況

今春、満92才を過ぎ、毎月前日上京の日本学士院例会出席も21年目の一昨年春から欠席しております。山田科学振興財団の顧問はつづけてあります。昨秋、大阪大学博物館入りを果しました。同級生は皆様他界され淋しい限りです。月1回の通院、週1回のリハビリで体調維持につとめています。

訃報 ・ 芦田匡平 様

芦田匡平様（昭35理） が平成25年12月に逝去されました。

山岳会総会・慰霊祭によくご参加になり、メンバーを集めてはお住まいの京都方面の山行を続けておられました。

芦田様からの会員短信をいくつかご紹介いたします。

平成 25 年(2013)

今年で喜寿。腹は大きく喜んでいますが足腰が笑い始めています。共に頑張りましょう。

(総会)

平成 24 年(2012)

小腸が詰まって入院、昨日退院。これからはチョーツマラン生活を心掛けてゆきたいと思っています。 (総会)

秋の集会は親父の命日と重なり、つい、行きそびれています。特に、今年、命日に墓参りに行くと、僕は親父より 5 日長生きしたことになります。親父の誕生日が 4 月 28 日、僕が 23 日だからです。お袋を越えるにはあと19年を要します。さてさてと、とにかく、健康第一で！

(秋の集会)

平成 23 年(2011)

達者な後期高齢者に成りたいものです。けど、あちこちでボロボロ・ポロポロと音が聞こえてきます。今更ひき返せないなとの感がつのります。 (総会)

平成 21 年(2009)

かつてオニさん・リュウさんと見た五山の送り火 （大文字焼きではない） を今年はカンロクの尽力でオトミさんはじめ大勢と見、楽しい時が持てました。では又。皆様に宜しく。

(秋の集会)

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「五山の送り火 （大文字焼きではない）」

京都五山送り火に参加して　　鈴木頼正

京都五山送り火に参加させて頂き、芦田さん始め皆さんに厚く御礼申し上げます。大の字の一番上から京都市内は勿論次々と点火される送り火は素晴らしく、感激しました。銀閣寺の長～い階段に山本君等に助けてもらって無事下山する事が出来感謝しております。大阪の人は大文字焼き、とまるでたこ焼きのように言われるが正式は五山送り火と言ってください、と京都の芦田先生から注意されました。

(2009年 8月17日)

「大の字の一番上」で

ー 会員短信 ー

平成２５年　秋

平井 一正　　（名誉会員）

10月で82歳になります。体力、気力の衰えは毎年顕著になり、今は1000m前後の山に行くのが精一杯です。皆様に宜しく。

武田 六郎　　（旧13理）

24時間ヘルパーさんのお世話になっています。外部とは接触できなくなりました。

赤松 二郎　　（旧14理）

今年は94歳となる。「とし」をとりすぎたのではないか。ここまで生きながらえるとは全く思っておらなかったので、どうしたものかと処置なしである。

小川 守正　　（旧17理）

少々フラフラしますが年の割には元気と自己満足していますが、10分も歩くと腰痛。甲南山岳部の活躍と山岳会の皆様の健康な姿が、今の私の心の支えです。（皆さんにもやがて、そういう時がきますヨ）部の発展と部員・会員の方々の、ご健康お祈りします。

福井 實　　（旧17理）

大分「ボケ」がひどくなって来ました。先ずは元気にしております（内臓は）。丈夫だった足腰も、ごく最近になって、右足腓骨神経麻痺とやらで日課の散歩も苦労しています。皆さん集会をお楽しみに

丸山 照夫　　（旧25文）

83歳になりました。近所を散歩するのがやっとです。君達は高山のそよ風に吹かれて思いっきり「ヤッホー」と叫びたまえ。

伊藤 五介　　（旧26文修）

元気にしてます。

北方 龍一　　（新高30）

6月にはカナダ、アメリカに行きましたが、山にはグレーシャー氷河までで、それ以上は無理です。相変わらず、太陽関連のボランティアで兵庫県下を回っています。

竹原 佑爾　　（新高33）

元気にしております。皆様に宜しくお伝え下さい。

永島 孝男　　（新高37）

年金生活に入り、月に1～2回、近くの丹沢のハイキングコースを探索しております。“秋の集会”のご盛会をお祈り申し上げます。

川村 静治　　（新高40）

この1年間、山歩きと言えば保久良山の桜を見に行ったのと、5月に蓼科のあたり、八子ヶ峰と横谷渓谷をハイキングした程度です。

大村 謙治　　（新高41）

仕事上の都合で何時も欠席、申し訳ありません。

福田 裕久　　（新高41）

孫2人に恵まれ、年相応の老後を過ごしています。

小原 耕治　　（大31経）

会員諸兄に会えるのを、楽しみにしています。

砂川 彰雄　　（大32経）

今夏はほとんど高遠で過ごしましたので酷暑知らずに過ごせましたが、来年80を迎える身には片道260kmがいささか苦痛になってきました。

宮本 侑　　（大32経）

元気にはしていますが年には勝てません。

雨宮 宏光　　（大33経）

駒王での集まりは何回になるのでしょうか？盛会を祈ります。

鈴木 頼正　　（大33経）

大町山岳博物館を訪ねてみようと思っています。

田辺 潤　　（大34経）

9月初旬よりKACの仲間達とシベリアへ約2週間の旅に出ます。シベリアの自然を見るのが楽しみです。

伊丹 弘忠　　（大35経）

元気にしておりますが、都合が悪く、欠席します。皆様に宜しく。

鳥居 威男　　（大35経）

今のところ、元気に早朝散歩とスケッチ、仲間とアルコールで楽しくやっています。今回は都合により、欠席いたします。皆様に宜しくお伝え下さい。盛会をお祈り致します。

越田 和男　　（大36理）

相変わらずの低山歩きと小旅行が楽しみ。体力の衰え顕著。夏の暑さにも閉口しています。

伊藤 久三郎　　（大36経）

毎日、岸和田市の久米田病院へ通って います。　　皆様に宜しくとお伝えください。

牧野 宏　　（大36経）

私は元気、多忙に過ごしています。

田中 孜　　（大36経）

今年は残念ですが、他の行事と重なったため、欠席いたします。皆様に宜しくお伝え下さい。

廣瀬 健三　　（大36経）

昨年、11月に頸動脈に1.7mmのプラークが見つかり、ガックリでしたが、去る6月の検査で大幅に改善されたことが判明（ハードなスポーツもOKと）御蔭様で75歳のHappy Birthdayを迎えることができました。H25年9月3日記。

藤安 賢一　　（大36経）

身体は段々衰えるばかりで、手足のしびれ、杖を頼りにヨチヨチと散歩をしています。保久良神社までは何とか往復できますが、その程度で精一杯の状態です。夢にまで見る山の風景ですが、遠方から懐かしく思うばかりです。盛会をお祈りします。

飯田 進　　（大38経）

あまりの暑さに外に出る気にもなれず、運動不足で困っています。早く涼しくなって下さい。お願いします。

二谷 和成　　（大38経）

年々、体力の低下を実感しています。月に1～2回、近郊の山を歩くようにしています。

福田 信三　　（大39理）

いつも欠席で失礼いたします。ここ数年は、年に3、4回ゴールドコーストに居ます。ウォーキング、自転車、水泳とクッキングが日課です。今年からスケートボードを始め七転八倒です。ご盛会をお祈りいたします。

武田 雄三　　（大39経）

楽しみにしております。

森本 全彦　　（大39法）

70歳になってから、自転車に乗るのをやめましたが、身体の衰えを食い止めるべく、再開。山登りを続けられるよう、頑張っています。

村上 与利一　　（大39営）

当日、叔母の49日を取り仕切る事になっており、残念ながら欠席です。

鵜木 洋　　（大40文）

飲む薬の量が増えてしまいました。

竹中 統一　　（大40経）

本年7月21日（日）柏、浪川両氏、関学OBの小西さん、山本君（山の友人）、娘婿の前田君と6名で上高地経由、涸沢ヒュッテに宿泊、ザイテングラードを登りつめ、奥穂高頂上に立つことができました。又、今年は大菩薩嶺、浅間山に登頂、9月には御岳山にまいります。

井上 徹　　（大40営）

高原はすっかり秋めいてまいりました。夜はタオルケット1枚では寒い！と感じる日もあります。相変わらず、伊豆の山中で細々と、しかし、元気に愛犬ヒロシと過ごしています。京阪神方面にはとんと御無沙汰しておりますが皆様によろしくお伝えください。ゴルフでエイジシュート達成を目指して頑張っています。

柏 敏明　　（大41経）

当日は残念ながら、都合悪く、参加できません。ご盛会をお祈りします。8月下旬から、9月下旬まで、娘夫婦が滞在しているシンガポールを訪問し、マーライオン等の観光地の他に、シンガポールの最高峰（163m）を登ったり、アジア大陸の最南端の地、マングローブの熱帯雨林のウビー島等に行って、南国を満喫しました。

森岡 宏光　　（大43理）

妻と二人で夏山山行に行ってきました。8月22日岩木山1624.7m、8月23日白神山地、暗門の滝、8月24日五所川原、立佞武多の館。今回は天候にも恵まれました。

赤田 正和　　（大44理）

当日、予定有。右翼？の会合で残念ですが出席できません。8月3日、霧島、高千穂の峰登りました。23年1月の新燃岳の大噴火で火山礫（れき）が積り、通常2時間が3時間かけて天の逆鉾のある、天孫降臨神話の山頂目指しました。下山は富士山のように滑り降り楽？でしたが、転がり危なかったです。写真撮れました。皆様に宜しく！素晴らしい山です。

岸田 昌雄　　（大44文）

現在67歳。ノルディックポールを購入しました。体力増強中。

伊藤 辰之　　（大45営）

定年退職後、再任用も終え、晴耕雨読の生活を送っています。最近、国循に入院し、今も通院中です。医師から登山と激しい運動を禁止されています。ご案内の「山獄寮」へ寄稿しようと思い、当時の山行、写真を整理しています。

矢吹 操　　（大45理）

元気でおります。参加される皆様に、宜しくお伝え下さい。

南里 章二　　（大45理）

当日、カルチャーの講座日のため、残念ながら欠席します。ご参加の皆様に宜しくお伝え下さい。

井上 知三　　（大48文）

素晴らしい先輩 森本さん・浪川さん、良き後輩 大森さん・山本恵昭さんに恵まれ40年ぶりに5月には残雪の新潟県海谷高地の阿弥陀山へ。秋には沢登りに三重県の台高木屋谷川の遡行に連れて行ってもらいました。リーダー山本さんの焚火・鍋・岩魚にはいつも感激しています。また遊んで下さい。

平井 幹男　　（大50文）

8月24日に甲南大学学生部からの依頼で山岳部の部室撤去に伴う、部室のかたづけを行いました。作業の後、皆で部室を後にする時、一つの時代が変わって行く、淋しさが胸を過ぎました。

中澤 章浩　　（大50文）

7月に室堂まで行きましたが天候悪く、みくりが池温泉に入って、帰ってきました。先日は、橿原のホテルに泊まり、畝傍山（199.2m）に登りました。今年の登山はこれだけになりそうです。

村田 信一　　（大50法）

母の介護で北海道に行きました。姉にあずかってもらい、その間、夫婦で十勝岳を眺めました。現役の頃、スキー縦走した十勝岳～美瑛岳～トムラウシ山～旭岳を一望して懐かしい思いでした。自然界では40年などほんの一瞬なのでしょうね。ご盛況お祈り申し上げます。

西川 けい子　　（大50文）

今年の夏は暑すぎて仕事だけで精一杯です。先輩諸氏のご活躍には脱帽です！

西村 清　　（大51経）

山岳会運営の皆様には心から御礼と感謝申し上げます。

大柳（吉松） 香代子（大51営）

2013年5月ゴールデンウィークは「ネパール・アンナプルナ一周、トロンパス越え」、8月は「北アルプス、五竜岳～針ノ木岳～烏帽子岳7泊8日のゆるゆる縦走」、快晴に恵まれ、稜線歩きを堪能。船窪小屋～烏帽子小屋間は、悪路の連続、登下降の繰り返しに11時間。最後に烏帽子岳直下にて連れあいが熊に眼前遭遇。飛びかかってきた熊を横飛びジャンプでかわし、命拾い。“豪華絢爛”な山行でした。

松下 哲夫　　（大52理）

星を見ようと嫁さんと山に行っています。

要 裕晶　　（大55法）

心より盛会を祈念しております。

住友 健時　　（大55法）

息子健時はバリ島にてヴィラ経営をしておりまして2年程、日本に戻っておりません。何時も欠席で、申し訳ございません。皆様に宜しくお伝え下さい。住友和子

川野 幸彦　　（大56理）

元気です。近く初孫が生まれます。先日、部室が取り壊されるので片付けにまいりました。淋しいですね。古い「岩と雪」や書物を頂きました。秋の集会には参加できません。皆様に宜しくお伝え下さい。

今井 啓介　　（大56経）

この4月から東京都民になりました。下町情緒を楽しんでいます。

八木 健　　（大58経）

膝以外、はすこぶる健康です。今回も申し訳ありませんが欠席させて頂きます。平井会長、皆様に宜しくお伝え下さい。

森本 寛之　　（大H19理工）

平成23年4月より転勤により、現在、タイ赴任中です。ご盛会をお祈りします。

父親より

平成２６年　春

平井 一正　　（名誉会員）

今のところ血圧が高い（150～160）のが気がかりですが、つとめて山に登っております。あと何年続くか分かりませんが、できるだけ続けたいと思っています。

鈴木 敬吾　　（特別会員）

今年は予定があり出席できません。皆様によろしくお伝えください。

武田 六郎　　（旧13理）

本人次第に老衰激しくなっています。どうか今後のご連絡ご不用にお願いいたしたいと思います。　六郎内

赤松 二郎　　（旧14理）

私も95才をすぎ体力・気力が衰え物事をシャ・シャと片付けられなくなりました。情けない限りです。悪しからずご放念下さい。

福井 實　　（旧17理）

当日身内の先約に当たり、残念乍ら「欠席」とさせて頂きます。体調は先ず先ずと云う処ですが（足腰はお蔭さんでシッカリとしています）ボケが進んで皆に迷惑をかけている次第です。当日の盛会を祈ります。（週一回の体操会と散歩に心掛けています）

小川 守正　　（旧17理）

近頃体調悪く残念ながら欠席。次回は何とか体を持ち直し何とか出席します。

伊藤 五介　　（旧24文）

元気にやっています。

中井 久夫　　（新高27）

ついに80才になりました。なんと昔の仕事をもとに文化功労者というものになってしまいました。字が書けなくなって、こういう文面になりました。

平井 吉夫　　（新高32）

消化器を半分近く切除したガン手術から5年経って、医者に言わせれば全快だそうです。まあ食も酒も元と変わらず楽しんでいますので、まだまだ皆さんとお付き合いはできると思います。賀茶と私で設置したレリーフも見たいのですが、残念ながら今回は行けません。

竹原 佑爾　　（新高33）

先日、ニュージランドツアーに行ってきました。天候に恵まれ素晴らしい光景でした。皆様に宜しくお伝え下さい。

永島 孝男　　（新高39）

総会のご盛会を祈念申し上げます。小生元気に仕事しております。

川村 静治　　（新高40）

予定がありますので、残念ながら欠席いたします。おかげ様で元気に過ごしております。

福田 裕久　　（新高45）

孫が二人になり山行きの方はさっぱりです。近所を犬と散歩して過ごしております。

白川 浩平　　（新高H2）

小学4年の息子とスノーボードを始めました。マンガの影響から富士山に登りたいと言い出したので、今年の夏は富士山とどこか北アルプスに二人で登りにいく計画をしています。久しぶりの山登りで少々不安ですが、うれしい限りです。

猪坂 貞太　　（新高H22）

同志社大学生命医科学部3回生の猪坂です。現在、高校時の書道部の部員と共に稽古しています。大学行事が忙しくなかなか顔を見せられませんが、よろしくお願い致します。

小原 耕治　　（大31経）

幹事役ご苦労様です。当方元気とは云えない程度の元気さで毎日を暮らしております。当日会員諸兄に逢うことを楽しみにしています。

砂川 彰雄　　（大32経）

御案内有難う存じます。大分老いぼれてきました。ぼつぼつ身辺の整理等始めないとと考えていますが、古い山の本等、処分しがたくちっともはかどりません。山の写真も昔をしのぶばかりです。

鈴木 頼正　　（大33経）

毎年山岳会総会・慰霊祭のお世話頂きありがとうございます。日々体を動かす様に努めています。ゴルフも年間25日プレーできるように頑張っています。最近視力が衰え、車の免許更新出来るか心配です。この頃、夜間・雨の天候時の運転は差し控えています。TVで世界の名峰登山を見て体に勇気がわいてきます。

田辺 潤　　（大34経）

お返事が遅くなりました。栂池のスキーで同年輩の方々とご一緒しております。高遠の別宅にはたまに行っておりますが、隣の砂川さんが居なくなって淋しい限りです。6月から7月にかけて最後のオーストリー旅行に出かけます。ガチャ

鳥居 威男　　（大35経）

元気に過ごしておりますが体力は徐々に衰えております。体力保持のため雨が降らない限り約1時間だけですが六甲山の麓まで毎日散歩しております。来年は是非出席したい。

藤安 賢一　　（大36経）

パーキンソン病進行のため夜間の外出不安に付欠席です。この病に対して日々保久良へ登り鍛えていますが、年令を重ねるに従って不自由になって行きます。ｉPS細胞の薬品化を待っています。

越田 和男　　（大36 理）

ハワイ4島（カウアイ・ハワイ・マウイ・オアフ）トレッキング・ツアーと云うのに参加して来ました。各々の島に個性あり、4200mのマウナ・ケア峰の頂上付近は雪の世界でした。帰国日の2月8日（土）は関東地方の大雪で成田から横浜の帰路ではエライ目に遭いました。

廣瀬 健三　　（大36経）

90周年記念関して山嶽寮特別号的なものを出す事と記念集会を持つ事を提案します。御蔭様で元気に歌や下手な楽器を楽しんでいます。

牧野 宏　　（大36経）

カメラ片手にナイスショットを求め近隣を徘徊老人をしています。

大関 和夫　　（大37経）

花の季節となり、神戸から安井さん・柏さんが来て日本酒を飲みました。孫たち4人もスキーを続けています。スキーの教え方も進んでいるよ

うです。

（大関氏は平成26年8月20日逝去されました。 編集）

飯田 進　　（大38経）

まあ元気にしております。今シーズンは雪にたたられ満足なスキーが出来ませんでした。これからなごりのスキーに出かけます。ご出席の皆様おたっしゃで。

二谷 和成　　（大38経）

元気にしています。年々歩くのも遅くなりましたが、月1回は年寄り仲間と近郊の低山に行くようにしています。

森本 全彦　　（大39法）

元気にやっております。

武田 雄三　　（大39経）

お世話役の皆様ご苦労様です。

福田 信三　　（大39理）

旅行中につき欠席いたします。特に変化なく過ごしております。教会のお墓、約400基と共同墓地のお世話をして5・6年になります。人生の終末の場のためか、悲喜こもごも興味深いものです。

鵜木 洋　　（大40文）

病状は少しずつ悪化しているのでしょうが笑顔も出る毎日だと思います。（娘より）

井本 洋　　（大40理）

最近青梅市に転居しました。3/9（日）青梅市等々が主催する「新宿→青梅」までウォーキングする“かち歩き大会”に参加します。約43kmとの事。元山岳部の名誉にかけて頑張ってきます。皆様によろしく。

井上 徹　　（大41営）

ご苦労さまです。2月初旬から約3週間ニュージランド＆オーストラリア周辺のクルーズに出かけました。帰国したら連日の大雪で、身体の調子が少し狂ってしまいました。伊豆高原に降った雪もようやく溶けてきました。皆様によろしく！！

柏 敏明　　（大41経）

幹事様。何時もお世話頂きありがとうございます。慰霊祭は都合で出席できませんが、久し振りに総会に出席させて頂きます。皆々様とお会い出来るのを楽しみにしています。先日、安井さん・井本さん・水渡さんの4人で大関さんのお家にお伺いして来ました。大関節が聞けて嬉しかったです。

森岡 宏光　　（大43理）

最近手術入院致しました。カゼや術後で体調不十分です。仕事の方はマンション管理員で72才まで働く予定で頑張っています。幹事さんいつもご苦労様です。今後ともよろしくお願い致します。

國分 廣昭　　（大44経）

昨年は体調を崩しておりましたが、今年はボチボチ山に行こうと思っております。

石原 浩二　　（大44理）

役員の方々ご苦労さまです。時々山に登っています。

岸田 昌雄　　（大44文）

昨日は内科、今日は歯科、明日は眼科毎日予約で忙しくしております。酒もやめ、タバコもやめ、毎日何で生きているのか分からない様な生活です。井上君毎年ご苦労さまです。皆様にお伝え下さい。

赤田 正和　　（大44理）

残念ですが当日東京出張中で欠席です。先月

(2月)九州、中国(上海・南京)東京、先週は九州と忙しくしています。九州は社有林の管理で残雪が多くて車で登れなかったです。丸太の値も少し上がりましたが採算のとれる状況でなく日本の森林の今後は心配です。皆様によろしく。

南里 章二　　(大45理)

毎年のお世話ご苦労様です。この5月末から6月上旬の12日間、北スペインのサンチャゴ巡礼路の最後の113kmを歩く旅に出かけます。私が担当するカルチャー講座の受講生の方々をお連れするのですが、歩くのが得意な山岳会の皆様にも御参加いただければ大歓迎です。

矢吹 操　　(大45理)

案内状いつも有難うございます。義母の介護見舞や会社勤務で結構忙しいです。ジョギングも2月3月は休止状態です。4月から体を動かしたいと思っています。

平井 幹男　　(大50文)

早いもので山岳会会長を拝命してもうすぐ一年が経とうとしています。その間、色々な方々の協力と手助けで何とか頑張っています。又、来年には山岳会の90周年という節目にも当たり、山岳会の益々の発展に微力ながら力を注いでいきたいと思っています。

村田 信一　　(大50経)

いつもありがとうございます。介護を始めて14年になります。母は不自由な身体でも米寿を迎えました。介護のあい間に、昨年10月イタリア・ドロミテの針峰群を眺めることが出来ました。残念ですが参加できません。ご盛況をお祈りしております。

高橋 けいこ　　(大50文)

いつもありがとうございます。ちっちゃな町工場のきりもりに少々疲れてきた今日この頃です・・・

中澤 章浩　　(大51文)

昨年7月剣を目指すも横なぐりの雨に断念。その後踵に小骨がくい込み日課の散歩も続かなくなりました。身辺の状況も変化し時間がとれず今年は勝手いたします。

大森 雅宏　　(大53文)

だんだんサラリーマン双六のあがりが近づいてきています。髪の毛が減った分シワは増えてバランスのとれた老いに。昨年から山嶽寮のお手伝いをしています。原稿よろしくお願いいたします。

山本 恵昭　　(大56理)

4/19仕事が入っています。総会開始時に遅れるかもしれませんが、参加させていただきます。

川野 幸彦　　(大56理)

お元気ですか。いつもご連絡くださりありがとうございます。当日は所用のため出席できません。申し訳ありません。皆様によろしくお伝えください。5月の連休は、昨年敗退した遠見～五竜を一人で登る予定です。盛会をお祈りいたします。

今井 啓介　　(大56経)

毎回お誘い有難うございます。残念ながら今回も先約があり参加できません。都内在住も早や一年、上野の国立博物館通いが趣味になりました。畿内の史跡にも足をのばしてみたいと思っています。

八木 健　　(大58経)

ご無沙汰して申し訳ありません。一年一年が非

常に早く感じるようになってきました。予定が判りませんが、慰霊祭には参加したいと思っています。

西名 俊英　　（大60理）

いつも連絡いただきありがとうございます。正月に家族で金時山に登りました。雪道もあり、コースタイムの倍かかりましたが、小4・小2の娘たちには楽しい経験になりました。

松成 健　　（大H8文）

1年間の単身赴任を終え、家族を仙台に呼び寄せました。その際の引っ越しのドサクサで返信が遅れ申し訳ございません。昨年は福島県の山を少し登った程度でほとんど活動できませんでした。クライミングジムも入会金を払ったきりで通っておりません。今年は会津地方の山々を登ってみたいと考えております。

森本 寛之　　（大H19理工）

本人はタイ駐在中の為出席できません。
（父親より）

本田 依子 様

いつもご案内有難うございます。残念ながら20日はイースターなので教会で働かなくてはなりませんから行けません。

乾 恵美子 様

都合により欠席させて頂きますが、またの機会に出席させて頂きますことを願っております。甲南山岳会のますますのご発展、皆さまのご活躍、ご健康を心よりお祈り申し上げます。

横山 嘉壽子 様

ご案内ありがとうございます。今年は都合で欠席させていただきます。昨年秋、10年ぶりに立山ケルンに娘夫婦と行くことができました。主人が逝って10年あっという間の気がします。

芦田 匡平 様 ご遺族様

ご案内ありがとうございます。ご盛会をおいのり申します。

会費についてのお願い

甲南山岳会は会員の皆様からの会費と応援で運営されてい

卒業以来ご無沙汰のメンバーも、状況が整えばいつでも各種行事にご参加いただけるよう、できるだけ「門は広く・敷居は低く」を事務局一同心がけております。会費につきましても、現在は遡りなしに現年度の納付をお願いしており、金額も昭和 55 年から据え置いております。会員諸兄におかれましては諸事情をご賢察のうえ、会費納入に一層のご理解をくださいますようお願いいたします。

会費年額　4,000円

― 報 告 ―

秋 の 集 会

日 時　平成25年10月13日（日）～ 14日（月）

場 所　木曽文化公園内宿泊施設「駒王」(長野県木曽郡日義村)

次 第　10月13日　受付 / 夕食･懇親会
　　10月14日　朝食 / 記念撮影 / 部歌斉唱【山の歌】

出 席　鈴木敬吾(特別会員)　小原耕治(大31経)　砂川彰雄(大32経)　雨宮宏光(大33経)
　　鈴木頼正(大33経)　田辺 潤 (大34経)　越田和男(大36理)　飯田 進 (大38経)
　　武田雄三(大39経)　安井 正 (大40経)　塩崎将美(大41経)　石原浩二(大44理)
　　井上知三(大48文)　平井幹男(大50文)　渋谷一正(大51営)　松下哲夫(大52理)
　　米山悦朗(新高29)　川村静治(新高40)

平成26年度 山岳会総会

日 時　平成 26 年 4 月 19 日（土曜日）

場 所　平生記念館

出 席

平井一正	小原耕治	雨宮宏光
鈴木頼正	越田和男	田中　孜
牧野　宏	二谷和成	武田雄三
村上与利一	安井　正	柏　敏明
塩崎将美	浪川純吉	國分廣昭
南里章二	井上知三	平井幹男
高橋けい子	渋谷一正	松下哲夫
大森雅宏	山本恵昭	

今回は、故香月名誉会長のお孫さん、樋口さん親子が懇親会に出席されました。

次 第

会長挨拶　平井幹男

中高・大学共に部員がいないという厳しい現実また来年秋の90周年の記念事業開催にあたり皆さまの協力を是非お願いしたい。

1）事業報告等

慰霊祭

ここ数年開催されていないので今年は当日の天気判断として是非開催したい。銘板については必要とあれば近い学年で検討。

秋の集会

素晴らしい天候に恵まれ素敵な集会となった。参加者が増えることを望む。

山嶽寮

原稿をお寄せ頂いた方々へのお礼と新規の原稿依頼、特に今までに投稿されていない方々へお願いしたい。

山岳部現状

中高・大学部員は0名、大学の部室は昨年の6月に明け渡し要請、掲示板等で報告。合併を打診されていた体育会も部員激減ワンゲル0人？スキー部2人？との現状。

会計報告

郵便局による振り込みで会費が少しずつ増えつつある。

2）議事及び報告

90周年事業準備

① 大学内の会場にて開催が望ましいのではないか？費用が安くできる他。
② 大学で開催予定となったため準備委員として牧野さん安井さんにお願いした。
③ 大学で開催すると宣伝効果が非常に大きい山岳部の90周年が記事になりやすい。山岳部の復活にもなるかも…？
④ 記念事業の内容については2部制にしては。外部の講師を招いてｼﾝﾎﾟｼﾞｭｰﾑその後懇親会（家族参加も歓迎）。
⑤ 記念物については文集・書物よりも視覚に訴える写真集・CD 他。
⑥ 遭難対策費用について現状の部員がいない状態では活用できないので少し90周年記念事業で使用してはの意見。詳細については会長に一任となる。

山岳部・山岳会の今後

部室がなく部員もいない現状では希望者が来てもすぐに対応できない。
ネットを利用する若い人が多いのでホームページの充実、特に山岳部のページの充実・更新等 谷 勇輝さんを責任者にしてはとの意見。

会費未納者について

納付に理解を得るよう努める。会報など刊行物については来年の秋90周年まで現状のまま、その後の未納者については催し物・会費の案内等にとどめる。

記録 高橋けい子
報告 井 上 知 三

平成25年度 会計報告平成26年3月31日

上記のとおり報告します。　　会計担当 山本恵昭
監査の結果、適正に処理されたと認めます。　会計監査 平井幹男

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

慰 霊 祭

4月20日（日） 阪急芦屋川駅10時頃各自出発。レリーフ11時30分頃全員集合。今回物故者「関集三様（旧10）、芦田匡平様（大35）」の銘板をレリーフに嵌め込み、黙祷。昼食後、「山の歌」を合唱し現地にて解散。ご参加いただきました皆様有難う御座いました。来年の慰霊祭にも多くの方がご参加くださることを願っております。

参加 牧野宏、越田和男、村上与利一、塩崎将美、浪川純吉、上本武夫、國分廣昭、南里章二、井上知三、平井幹男、松下哲夫、大森雅宏、山本恵昭、特別参加：故上月慶太名誉会長のお孫さん親子（樋口様）

報告 松下哲夫

― ホームページから ―

掲示板ダイジェスト　平成25年4月～平成26年3月

山 行 と 集 い

蓮華温泉ツアー

kannroku　平成25年4月1日

蓮華温泉近辺で山スキーを楽しんできました。

メンバー　小西・山本薫・浪川(L)・森本

3/26(火)曇り 19:30京都駅前集合　山本さんの車で一路栂池“前田館”へ。

3/27(水)曇り 8:15ロープウェイで最上部自然園に。遅々と進まぬシール登行。天狗原祠で早飯を食べて今日の宿蓮華温泉を目指して滑降開始。振子沢ツアーコースは快適ではなかった。途中から中尾根のトラバースの連続になり、年寄りにはこたえる滑りとなる。15時過ぎ蓮華温泉着。 しんどい一日であった。

3/28(木)雨後晴　雪倉岳目指すべく6時起床。トタン屋根に雨音が。70歳組は大きな声で今日は温泉巡りと。病み上がりの一番の若手も賛同の一票。一人出発準備をしてるリーダー浪川も3対1で泣き泣き温泉巡りに。4人で仙気の湯貸切。4時間のんびりと温泉堪能。

3/29(金)曇り　クラシックツアーコースの木地屋を目指してガスの中を4人揃っての滑降。すごいガスで10m先が見えないほど。木にククリツケてる目印がたより。5時間半で木地屋部落の公民館着。前田館のジョウジさんのお迎えを受け、しんどくもありの面白くもありのスキーツアー終了。

リーダー浪川さんの的確なルート読みには教えられました。車を出して頂きました山本薫さんありがとうございました。GPS の軌跡を作成していただいた小西さんありがとうございました。

富士登山

廣瀬健三　4月17日

先週、三田に行き、武庫川堤沿いを歩き、有馬富士に行ってきました。少し岩場もありましたが全くの軽登山。その昔、ゴルフをシッチャカメッチャカやっていたころ、良く行った有馬富士カンツリークラブから、なかなかの麗峰だなあと、眺めていたあの頃を思い出しています。

大山で飲み会

塩崎将美　4月25日

新緑の大山で集まりませんか？

5月18日土曜日にバーベキューで一杯の予定です。

私は16日から滞在してます。

飲んだ後の山登りはしんどいですから17日中に到着し18日朝から大山登山、夕方から宴会。19日解散。

勿論宴会だけで登らない方も大歓迎です。

食材//酒は現地で調達します(割り勘)。

寝具が少ないですから持ってる方はシュラフ持参してください。

参加希望者は掲示板かメールで連絡してください。

井上 知三

塩崎さん何かとお世話ありがとうございます。

現在、松下哲夫さんと僕と二人で参加いたします。まだ車に余裕がありますので参加の方お知らせください。

頚城　海谷高地

山本恵昭　　5月7日

森本さん、井上さん、大森さん、私の4人で、頚城の海谷高地にベースキャンプを張って阿弥陀山に登ってきました。

3日、山峡パークキャンプ場は駐車場以外すべて雪の下。7:30発、夏道はほとんど雪に隠れ、結構急なトラバースやブッシュ漕ぎを経て、海谷高地11:00着。河原の近くの雪原にテントを張り、スノーテーブルを作って昼食。午後は、周囲の雪山や岩壁を眺めながら皆さんが持ち上げてくださった各種の酒を飲み、のんびり過ごす。だだっ広い雪原に、雪崩で先を吹き飛ばされた木々が転がっている。イワナ1尾、河原で盛大な焚火。

4日、6:00発。阿弥陀沢左股をひたすら登りコルへ到着。途中、クマの足跡があったり、カモシカが尾根を横切ったり、彼らの庭を訪問している感じ。崩れた雪庇跡や綺麗な雪稜をたどり、阿弥陀山山頂9:00着。見渡す限りの絶景、駒ヶ岳、鬼ヶ面、雨飾山、金山、昼闇山、焼山、火打山が連なり、遠くには栂池から不親知へ続く山々。すぐ北には日本海が近い。阿弥陀沢左股をシリセード、グリセード、スケーティング、各自の好みで駆け下り、テントへ11:00着。午後はまたのんびり。イワナ3尾、焚火三昧。

5日、ゆっくり撤収し9:00発。この3日間でかなり雪が溶けて現れた夏道をつなぎ、山峡パーク11:00着。ヒスイの湯で汗を流し、スーパーで買出しをして糸魚川の公園で無事下山の宴会、仮眠。渋滞にあわずに6日早朝、帰宅。

平らな雪原が続く海谷高地と急峻な頚城の峰、豊かな自然と良い仲間、イワナ釣りと焚火三昧、とても贅沢な時間を過ごしてきました。

五竜岳敗退

川野幸彦　　5月8日

ご無沙汰しています。皆様、お元気ですか？

連休に五竜岳を目指しましたが、吹雪で敗退しました。この日は白馬大雪渓で雪崩が起きました。結構、新雪が積もっていました。5月でも吹雪くと怖いですね。海谷にも行きたかったです。またお誘いください。

スズコ

塩崎将美　　6月9日

氷ノ山に登ってきました。

駐車場から1時間40分、天気に恵まれ気持ちよく歩きました。下りには竹やぶと悪戦苦闘、根曲がりだけを採りました。

夜は天滝の東屋で山菜の天麩羅やおひたしで宴会。

山本君、何時もの事ながらお世話になり有難うございました。

大森雅宏

スズコの集い、有難うございました。

いい天気で気持ちよく過ごしたのですが、帰ってきても足腰が痛い。欲張って奥へ奥へと藪コギしたせいでしょう。来年はセーブしないと。

山本恵昭

スズコキャンプにご参加の皆様、お疲れ様でした。

朝夕は快適な涼しさでしたが、日中は好天に恵まれて暑いくらいでした。スズコは沢山採れましたが、暑さのせいか虫入りが多くて残念でした。

でも、皆さんでワイワイと楽しく過ごさせていただきました。私は睡魔に勝てず、昨年に続き途中でダウン。またまた最後まで起きて居られませんでした。皆さん、お元気ですね。

この暑さ、そろそろ沢登りシーズンですね。

平井　幹男

皆さんお疲れ様でした。

二年続きの雨のスズコ取りから一転、今年は快晴の氷ノ山となり気持の良い収穫登山となりました。

いつもながら、山本君には山菜取りから準備に至るまで、又大森君には様々な連絡など有難うございました。松下君の初めての参加もあり、武田さんの岩魚や、カンさん塩崎さんのお酒と共に山本料理長の山菜、スズコのフルコースに大いに盛り上がる宴会となりました。井上さんや塩崎さんのお友達の山口さんを含め、来年の再会を誓って9日の早朝解散となりました。本当に楽しい時間を皆さん有難うございました。

ポンポン山の山口

去年に続いて「スズコ」キャンプに参加させていただきました。去年は雨上がりで泥と密集した藪の中に入るのに腰が引けて…今年は気合入れて頑張りました!？　山本さんの山菜のフルコース本当に美味しくいただきました。有難う御座いました。

武田雄三

今年も心待ちにしていた山本君指導のスズコキャンプに参加しました。

（と言っても小生にとってはハード過ぎるのでスズコ取りは遠慮）

何時もの様に天滝の旧休憩所でワイワイ・ガヤガヤ、山本シェフの手になるスズコ料理や山菜料理の数々を肴に楽し～い一晩でした。

参加9名の平均年令60代後半、来年からはもっと多くの仲間に参加して貰い、集会場所に困る程になればイイノニナァー。

山本君アリガトウ、ご馳走様でした。

月山

越田和男　　6月30日

梅雨時は東北に限ると、山形に出かけました。雨男の私ですが、うまく晴れ渡り、例年より多い残雪と高山植物の花々を楽しんできました。とはいえ、長い雪渓の登りにはよたよたでした。

福田信三

越田さん、背景がすきっとして素晴らしいですねえ。

去年登った大雪の黒岳を思い出します。

”月山・・”の文字は足元の方が良いのでは？？（失礼しました）

緑と残雪のコントラスト風景は初夏の山の美景だなあ。乾杯、熟年登山の御二方へ

しかし、後方のお独りの方気になります（小屋まで行けるかなあ？？？）

越田和男

″後方のお独りの方”はよそのオジサンでした。少なくとも私よりお元気でした。

白馬・雪倉・朝日

山本恵昭　　8月11日

8月4日から6日で、妻と蓮華温泉から白馬岳、雪倉岳、朝日岳と周回してきました。

4日　蓮華温泉から白馬大池を経て白馬岳のテント場へ。小屋にもテント場にも、老若男女、沢山の登山者がいて驚きである。

5日　再び白馬岳に登り返し、三国境から雪倉方面へ向かう。ここからは喧騒は無くなり静かな山に。

前から来た2名に挨拶をすると「山本さんではないですか」と声をかけられる。帽子を脱いだお顔を

良く見ると国立登山研修所の東秀訓さんである。学生時代は奥鐘で、社会人になってからは登山研修所で、今回は雪倉岳で、不思議と彼とは忘れた頃にばったりと出会う。彼は、三浦雄一郎氏のエベレスト登頂をサポートしたりするプロの登山家であるが、その穏やかな人柄に親近感を覚える。今回も「休みが取れたので、今まで来た事が無かった朝日岳へ来て見ようかと思って」と、私と全く同じ思考パターンでお互い笑ってしまう。

小桜ヶ原付近は小さな湿原が続き、お花畑だらけである。朝日の水平道は結構アップダウンがあり体にこたえるが、何とか朝日小屋テント場に。あまりの暑さに小屋でビール2本を買ってがぶ飲みする。

6日　朝日岳で、単独行の青年から「友人の結婚式のお祝い写真に皆さん一緒に入ってほしい」と。山頂にいた15人近くが集まって、お祝いメッセージの巻き紙を持って記念写真を撮影。見知らぬ者同士がなんか和やかな雰囲気になる。

朝日岳からは、お花畑の中をひたすら下る。次々と現れる水場の水が美味い。花園三角点付近はまさしく花園である。そこからは樹林帯となり、暑い中、最後上り返して蓮華温泉へたどり着く。もう露天風呂まで登る気力は無く、屋内風呂で汗を流す。

今年は残雪が多かったためか、高山植物の花はちょうど今が見ごろのようでいっせいに咲き誇っていました。お花畑の中の散歩のつもりでしたが、晴れていたと思ったら急に雨が降り出す天候不順の中、ロングコースでしんどい登山でした。

明神岳主稜　敗退

川野幸彦　　8月14日

ご無沙汰です。皆さん！お元気ですか？

8／10～11で穂高連峰の明神岳に行きましたが敗退しました。以下、報告です。

8／10（土）　晴れ

新大阪を6:00発の新幹線で出発。名古屋でしなのに乗り換え、上高地には11:30ごろに到着した。水を駐在所で4L補給し、重たいザックを背負い出発。この重荷に不安になった。観光客の多さにうんざりしながら歩き出す。暑さも加わり辛い。岳沢方面に向かい、7番標識から尾根に取りつく。急な尾根の明瞭な踏み跡をたどる。2時間ほど登ったところで足がつり歩けなくなった。丁度、コル状の平坦地（2300m付近）がありテントを張った。この状態では、明日は無理だと思い、早々に退却を決めた。夜は暇で何もすることがなく、大森さん・山本・今井に電話した。電波の状態が良好でアンテナは3本立っていた。大森さんと山本は連休の後半に南アルプスに沢登りに行くという。今井は朝から一杯飲んでいるらしい。こんな所から皆さんの声が聞けて不思議な感じがした。夜中にはテントの周りをケモノがうろついているらしく、藪をかき分ける音がして気味が悪かった。

8／11（日）快晴

鳥の鳴き声で目が覚めた。寒い朝である。昨夜はシュラフカバーと軽羽毛服では寒かった。ゆっくりと用意をして、下山にかかる。途中、3人組と単独の人が登ってきた。皆さん元気である。2時間ほどで上高地に戻り帰宅した。

（付）歳のせいだろうか？今回ほど体力不足を感じたのは初めてだった。トレーニングは行ったが活かされなかった。バテた。また、テントに登攀具・水と重荷だった。もうテントを背負ってのバリエーションルートは独りでは無理かもしれない。来年は、大森さんと山本と3人で5月に登るぞと勝手に思い帰路についた。

南アルプスの沢登り

大森雅宏　　8月18日

8/13夜中に神戸を出て、14・15・16と南アルプスの信濃俣河内西俣に、山本リーダーのもと浪川さん大森で行ってきました。 昨年の赤石沢より少し南側の谷です。

山本リーダーと浪川さんは好調でしたが、私またバテました。バテたので写真はほとんど幕場のものだけ。かろうじて行動中の1枚と1日目2日目のテント場風景を貼り付けます。詳細は山本リーダーの書き込みをお待ちください。

しんどかったですが、私のしんどいのはカラダだけ。リーダーはカラダもエライしルートどりやら天候判断やらいろいろココロのエラさもあります。

毎回お世話になって、大変感謝しております。

信濃俣河内　沢登り　　山本恵昭

（本誌 「紀行・山行」ページに記載があります　編集）

モンゴル

塩崎将美　　**8月26日**

今日400km を8時間走ってウランバートルに帰ってきました。3日ぶりのシャワーでスッキリしました。

山には登りませんでしたが4時間程のハイキングをしました。

写真の唐松林を稜線まで登り下りてきただけ。後ろのハゲた頂上まではとてもとても。林は意外と明るく多分牛の踏み後を辿ると歩きやすかったです。

（本誌 「紀行・山行」ページに記載があります　編集）

シベリア

塩崎将美　　**9 月 9 日**

ハバロフスクに居ます。

シベリア鉄道で紅葉を見ながらバイカル湖を眺めながら二泊三日の旅を楽しみました。湖畔のコテージでノンビリ二泊。名物のオームリを堪能しました。最後の2日間は雨、仲間に約一名雨男が居られるせいか？

塩崎将美

今日は午前中は夜行便の疲れをとるため休養、午後はハバロフスク市内観光。晩飯を終えてホテルに帰るとちょうど太陽がアムール川の向こうの地平線に沈む所、夕日が綺麗でした。

塩崎将美

シベリア鉄道の車窓から。

イルクーツクやバイカル湖の紅葉はまだまだ、しかし滞在中の気温は朝晩6度ぐらいに冷え込みかなり寒かったですから一気に黄色くなるのでしょう。

（本誌 「紀行・山行」ページに、ご同行水渡さんの寄稿があります　編集）

シンガポールの最高峰

柏　敏明　　9月 9日

シンガポールに長期滞在している娘夫婦の所へ先月23日から来ています。先日、シンガポールの最高峰に登ってきました。Bukit Timah Nature Reserve にあり、ビジターセンターから熱帯雨林の

中、幅2m位の結構急なアスファルト道を登ること、20分、カニクイ猿一家の出迎えを受けたりしながら、遂に単独でシンガポールの最高峰 Bukit Timah Hill の頂上に立つことが出来ました。標高163.63m。視界は木々に阻まれてよくありませんでした。登山道は、赤、黄、青、緑とコースによって、標識が色分けされており迷うことなく登ることが出来ます。登りは、初めてでしたので最短コースを取りましたが、降りは最長コースを取った所、出だしと一般道に戻る所が数百段と云う階段。道も狭い地道、前日の雨でゆるんだ道を滑らないように慎重に歩き、汗だくだくでやっと一般道に戻ることが出来ました。最短コースは家族連れも多く、のんびり歩けましたが、降りは行き交う人も疎ら、登りは20分だったのに、降りは30分も掛かって無事にビジターセンターに戻ってきました。距離は短かったですが、熱帯気分を味わえた一日でした。21日に帰国する予定です。

タイ・クラビ　クライミングツアーその1

谷勇輝　　9月16日

先日、夏休みを利用し、タイへクライミングツアーに行ってきました。場所は学生時代から馴染みのあるタイ南部のクラビ地方です。ビレーヤーは今回も現地で調達しました。

雨季でローシーズンとのことで、宿は安く泊まれましたが、思いのほか波が高く連日雨…

最終日の一時雨が上がったので、ルーフ状の岩場で雨をしのげるポイントを探してクライミング成功！

今月は25日26日で錫杖に行く予定です。今年は天候に恵まれず、計画は今回で4回目。一本ぐらいは登っておきたいところです。

木屋谷川遡行（台高山脈国見山）

大森雅宏　　9月23日

谷君のタイランドの次に出すのが憚られる近場の山なんですけど。大台が原の北の方にある木屋谷川の沢登りに行ってきました。山本リーダー以下ご参加はカンさん浪川さん井上さんと大森の5人。平均年齢60歳超え。記録はいつものように山本リーダーが出してくれると思います。

久しぶりの遡行　kannroku

台高北部の国見山に突き上げている木屋谷川の遡行に行って来ましたが、とっても静かな山行でテント場の明神平で3組ほどの人達に会っただけでした。

久しくやってなかった川遊びは新鮮な気持ちになりました。

井上君はドボンと落ちたり、私も腰ぐらいまでつかってしまい、携帯をおじゃんにしてしまたりと。テントを張った明神平は素晴らしい高原で、心を癒してくれました。

何時もながら恵昭さん・大森さん・ドン吉さん等に助けられ楽しい山行でした。

皆さんありがとうございました。

Re 木屋谷川遡行　山本恵昭

以前妻と行った時、美しい森が好印象だった明神平。今回は沢登りで行ってみました。

メンバーは、カンさん、浪川さん、井上さん、大森さん、私の5名。

9月21日（土）5:00に家を出発、名谷、芦屋、豊中と各御宅を回り、最後は近鉄大和八木駅でカンさんと合流。南阪奈道が伸びていて、思ったより早く着いた。高見トンネルを越えて、青田発電所から木屋谷林道を進むが、菅谷川出合で車は通行止めとなる。

荷物をまとめて10:20発。30分ほど林道を歩き、マナコ谷出合の桧塚登山口を過ぎて少しの橋で沢装束になり入渓11:30。特に困難なところも無く、

美しい谷を楽しみながら次々と現れる小滝を越えて、12:30ワサビ谷出合。休憩の間ちょっと竿を出すと15cm 位のアマゴが釣れた。12mの滝は左の泥壁にロープが下がっていて、それをたどる。続く廊下で、井上さんがドボン。水はそれほど冷たくない。それをきっかけに皆さん濡れることを恐れず、ジャバジャバと胸まで浸かりながら進む。チョックストーン滝3mは、浪川さんがトップで登り、上からお助けシュリンゲを出してもらって越える。ここ以外は特にロープを出す悪場も無く、奥山谷出合13:30。明るくなった谷をさらにつめて、3段20mがかかる鉄砲谷の出合を過ぎ、1110m二俣14:30。

もう沢歩きは堪能したとのことで、ここから二俣の間の尾根を登る。ブナ、ミズナラ、ヒノキの美しい自然林の中、M茸を探すが見つからず。やがて稜線の登山道に出て、国見山16:00。水無山を越えて、明神平16:40。先客テントが5張りほど。

奥山谷側の森の中にテントを張り、3分の水場に水汲み、焚火、鍋、酒と、お決まりのコースに。私は焚火の横でいつの間にか寝てしまい、夜中にテントへ。

22日（日）5:00前に目が覚めてしまい、ひとり森から明神平へ出てお月見、水無山方面の中腹まで登り御来光を眺める。焚火をおこして、ゆっくりと朝食。

8:00発、登山道を行かず、テント場から森の中を直接明神岳へ。桧塚奥峰までは、美しい森の散歩道。皆さんに先に行ってもらい、途中で何度も荷物を置いて木屋谷側に下り、ミズナラの大木をめぐってM茸探し。結局M茸は見つけられなかったが、キャンプ適地を何箇所も見つける。次回に期待。絶好の展望台、桧塚奥峰に10:00着、ゆっくり休憩。桧塚はすぐだが、マナコ谷への下降点を見落として戻り、時間ロス。桧塚奥峰から少し進んだところの左の尾根に赤テープ。踏み跡をたどると、植林地の中のはっきりした道をひたすら下り、マナコ谷出合登山口へ12:30。林道を下り、駐車地点へ13:00。

たかすみ温泉桧風呂で汗を流し、昼食をカンさんにご馳走になる。大和八木でカンさんとお別れし、各御宅を回って、神戸へ。

沢遊び、アマゴ釣り、ヤブ漕ぎ無しの美しい森、焚火キャンプ、温泉と、おもろいこと盛り沢山の山行でした。これに、天然M茸が加われば、完結だったのですが、残念。

秋の集会参加者

渋谷一正　　9月28日

1. 鈴木敬吾、2. 小原耕治、3. 砂川彰雄、4. 雨宮宏光、5. 鈴木頼正、6. 田辺潤、7. 越田和男、8. 飯田進、9.武田雄三、10. 安井正、11. 塩崎将美、12. 井上知三、13. 平井幹男、14. 渋谷一正、15. 松下哲夫、16. 米山悦朗、17. 川村静治。

MI 茸

山本恵昭　　10月 8日

またまた行ってきました、天然MI茸探し。雨の後なので、品質は今一ですが、数は採れました。家で干していると、家中にMI茸の香りが充満しています。ここ数日、天ぷら、バター炒め、キノコご飯など、MI茸尽くしを贅沢に楽しんでいます。

一部冷凍しましたので、カニキノコの会に持って行きます。お楽しみに。

秋の集会

平井　幹男　　10月15日

秋の集会出席の皆さまお疲れ様でした。好天に恵まれ、関西、関東方面から一同に集合しての宴会、本当に楽しかったです。先輩方の色々な話をアテにお酒も進み、特に小原先輩の武勇伝に時の立つのも忘れ宴会は大いに盛り上がりました。翌朝、記念撮影の後、部歌を斉唱し来年の再会を約束して解散となりました。

白山北部　中宮道～岩間道

山本恵昭　　10月15日

この時期、いつも妻と紅葉巡り山行に行くのですが、今年は妻の都合が合わず独りで白山北部を訪ねてみました。

12日準備に手間取り、家を2:30発。仮眠をしながら小松IC経由で中宮温泉へ8:00着。晴れの予報がザ

ザぶりの大雨である。車の中で様子を見ていると、小止みになったので9:00発。急登を終えると、立派なブナ林の中を行く。雨模様なのに途中の水場の水は涸れている。11:30シナノキ平避難小屋に着くと同時に、再びどしゃ降りになる。小屋でしばらく待機。しばらく待てども止む気配がないので、覚悟を決めて12：15出発。良く踏まれた道をたどると、ゴマ平避難小屋14:30着。

コースタイムよりかなり早く着くことができた。念仏尾根からの先客が1階に3名、誰もいない2階に陣取る。小屋のすぐ近くに豊富な水場があり便利。その後、続々と登山者がやってきて、結局12名で大賑わい。

13日6:00発。風が強いが、天気は上々。高度を上げるに従って視界が開けてくる。右に地獄尾根、左に奥三方岳を見て進むが、まだまだ白山は遠い。昨夜、上部は雪だったようで斜面が白い。北弥陀ヶ原は、草原に岩が散在し日本庭園のようだ。枝に付いた霧氷が風に飛ばされて降り注ぎ、寒い。お花松原付近はナナカマドの紅葉が美しい。大汝峰11:00着。とにかく風が強く、大汝神社の石囲いで休憩する。

七倉山分岐を経て岩間道を下る。小桜平避難小屋への分岐に13:30着。計画では小桜平避難小屋で2泊目の予定だったが、時刻も中途半端なので、さらに下ることにする。ここからは急な尾根の真直ぐな下り道を苦労して降りる。

岩間休憩舎15:30着。トイレとベンチ、そして無料の岩間温泉元湯の露天風呂がある。とりあえず服を脱いで露天風呂に浸かる。一緒に入っていたおじさん達は、登山に来たけれど初日の雨で嫌になり、酒と肴を買い込んでここで温泉三昧とのこと。テントも3張ある。今夜の宴会に誘われるが、後ろ髪をひかれる思いで林道をさらに下る。新岩間温泉に16：50着。旅館の人に中宮温泉まで送ってもらえないかたずねるが、夕食準備で忙しいので無理とのこと。さらに車道を下り、三又発電所の送水管沿いの急階段を下ってスーパー林道へ出る。車が止まってくれるのを期待しながら、結局、中宮温泉まで歩くことになる18：00着。

長く奥深いコースでした。13日は2日分歩いて結局12時間行動。我ながら良く歩きました。

カニキノコ下見

山本恵昭　　11月11日

今日、妻を積んで扇の山へ下見に行ってきました。

林道は問題なしでしたが、畑が平は冬型でザザ降り。妻は車で読書。私は雨具を着てヤブ漕ぎ。

ナメコ・ムキタケ・クリタケを少々収穫したものの、みぞれがあられに変わり早々に退却。午後気温が下がってからは雪になっているのではないかと思います。

キャンプ場と公園を確認して、七釜温泉で暖まって帰ってきました。土曜日は少し冬型が緩むようですが、今週の寒波でキノコは雪の下でしょうかね。基本的に雪が積もっていたら、無理せずに早い目に温泉・宴会・酒パターンに突入と考えています。

採れなかったとき用に今日採ってきたナメコとムキタケ、以前採って冷凍してあるマイタケを持っていきます。

現在、参加連絡を頂いているのは、平井さん、塩崎さん、柏さん、浪川さん、谷くん（16日のみ）です。準備の都合がありますので、参加される方はご連絡をお願いします。

カニキノコ鍋 in 浜坂

tani yuki　　11月16日

現地から報告します??　扇ノ山は少し雪で覆われていましたが、雪の下にはナメコがどっさりありました。楽しく宴会やってます！

山本恵昭

16日、先週の寒波の影響を心配していましたが、何とか駐車場まで車で入ることができました。

足首から膝ほどの雪は積もっていましたが、根曲がり竹も雪に倒れ案外歩きやすかったです。雪のためライバルがいないようで、倒木の雪を掻き分けて探すとなかなか上物のナメコが大量に採れました。

皆さんと合流して山頂往復。好天に恵まれてのんびり登山。山頂の小屋で昼食。下山後は七釜温泉で温まり、宴会へ。皆さんがお持ちくださった日本酒、泡盛、ワインを頂きながら、マイタケ天婦羅から始まり、焼きカニ、カニキノコ鍋と。風も無く穏やかな夜に、楽しいウダウダ話。

17日、この日の競り市は漁が少なく、塩崎さんが苦労して手に入れてくださったセコガニのみとなりました。こんな時もあるのですね。ご参加の皆様、有難うございました。

管理人

恵昭君、何時もの事ながらお世話になり有難うございました。

昨夜は娘夫婦が家でカニを待っていて皆で楽しみました。 特に教えてもらった”ナメコの大根おろしあえ”が絶品で酒が進みました。

小西 （関西学院）

初めてカニキノコ会に参加させていただきありがとうございました。大変楽しかったです。

ナメコ、ムキタケの採取、感動ものでした。夜のキノコカニ鍋、焼き蟹も最高でした。

山本さん皆さんの完璧な手配と段取り ご苦労様でした。またよろしくお願いいたします。

忘年会

塩崎将美 12月 2日

30日に有志が集まり忘年会をやりました。

雪見会

飯田 進 12月15日

雪見会 1月25，6日中心に行います。奮ってご参加ください。 家族連れの方、その旨知らせてください。別部屋用意します。

横浜で忘年会

越田和男 12月25日

神戸での盛大な忘年会と比べて人数では寂しいが、昨夕、クリスマスとは関係ない70男6名が、横浜駅西口の展望のよい、一寸場違いな小奇麗なエスニック・レストランに席を取りしばし談笑した。

病気療養中の大関が参加できず残念だったが、米山、飯田、水渡、柏、大阪外大OBの田村に小生が参加。忘年というよりは、スキー合宿やら中央アジアへの来年の旅の抱負などの話題が多く、まあ歳の割には明るく元気に年を越せそうな気分になって解散した。

甲南山岳会の皆さん、どうぞ良いお年を！

八ヶ岳

山本恵昭 12月30日

大森さんと、八ヶ岳の硫黄岳から横岳をラウンドしてきました。

28日美濃戸口を9:00に出発し、赤岳鉱泉12:30着。テントを張ってちょっと昼寝のつもりが、目が覚めるとあたりは真っ暗。急いで水作り、夕食を済ませる。

29日6:45発、しっかり踏み固められたトレースを硫黄岳へ9:00。稜線に出ると風が強く、顔が痛い。山頂のロボット雨量計跡に入り込む。3人入れば一杯位のスペースだが、風が無いので天国。

横岳へ向かう。途中数ヶ所のハシゴや鎖場は、スリル満点。天気が良く、大同心、赤岳、阿弥陀岳などの迫力ある姿が目前に聳える。しかし、とにかく風が強い。地蔵仏に11:00。あまりの風の強さに赤岳はカットして地蔵尾根を下り、行者小屋へ12:10。赤岳鉱泉13:00着、もう1泊の予定であったがそのまま撤収して14:00発。途中の美濃戸山荘で大森さんにおでんとモツ煮込みをご馳走になりホット一息。美濃戸口17:00着。

ガソリンスタンドで教えてもらった金鶏温泉はアルカリの良いお湯でした。諏訪南ICにも近く、しかも安い￥400。

久しぶりの冬山登山で、水筒の水が凍る、テントの壁面霜だらけ、風で頬っぺた痛い、鼻毛が凍る、と当たり前のことを再確認して来ました。

大森雅宏

八ヶ岳。鼻毛のほかまつげも凍りました。強風にハナが垂れて飛んでゆきます。

余りの強風・寒冷に「赤岳カットして地蔵尾根から降りよう」とリーダーに懇願したのはワタシです。

昭和51年2月に渋谷さんポチさんほかで大同心に行ったとき、アブミが風に流されて登ることが出来ずギブアップして帰ったことがありました。今回のリーダー山本掲出の写真のザックのベルト。風に流されて水平にピラピラしています。少しオーバーに言うとあの時はアブミがあんな感じでした。40年近くたって、こっちは変わりましたが風は変わっていませんでした。

八ヶ岳・アイスクライミング

tani　　12月31日

（本誌「紀行・山行」ページに記載があります　編集）

雪見会

飯田　進　平成26年1月4日

謹賀新春

雪見会、1月25・26日中心に行います。
ご参加のみなさん。日程と最初の食事と最後の食事をお知らせください。

例えば、25日の朝食から、27日の朝食まで、とか25日の夕食から26日の朝食まで。というふうに。

1月15日までに、参加日お知らせください。よろしくお願いします。

登りはじめです

塩崎将美　1月 4日

今日、石垣を一周するため走っていると姿のいい山がありました。これは登らなければ、登ってきました。頂上は岩、左右どちらも海、気持ちよい頂上でした。野底マーペと言う山。急登20分の初登山でした

八ヶ岳・権現東稜

tani　　1月15日

（本誌「紀行・山行」ページに記載があります　編集）

伊豆・金冠山

越田和男　　1月23日

もっぱらののんびり山歩き。年明けてから2度目の山歩きでやっと快晴に。真城峠から金冠山816mへは登り標高差420mで約2時間。寒風吹きすさぶ山頂でした。

アイスクライミング

tani　　1月24日

（本誌「紀行・山行」ページに記載があります　編集）

雪見会

飯田　進　　1月28日

雪見会から帰ってきました。24日朝我が家を出て、有名な高尾山の真下に作られた、高尾山インターチェンジから中央高速道へ。この中央道並行して走る中央線共々、日本一の山岳景観美をほしいままにした道路ではないでしょうか。小仏トンネルを出ると、南西の空に三つ峠山、その背後には富士山が顔を出している。北側には扇山、500円札の富士山撮影場所で有名な雁が原すり山、タフな滝子山、その下の事故で有名になった笹子トンネルを出ると、南アルプスの盟主北岳から塩見、荒川岳と南アルプス一望。北には大菩薩嶺から金峰まで秩父の山々が連なり、奥には八ヶ岳連峰が、高速道路の番人のように立ちふさがっている甲斐駒が、手に取るように目に飛び込んでくる。この日は特別の快晴。諏訪湖に向かって下りていくと、乗鞍が穂高や槍が挨拶にその雄姿を現して、その北には、常念が鹿島がとくっきりとはっきりと聳えていました。トリは白馬三山。その麓栂池高原での宴は実に楽しいものでした。最終27日前日の吹雪も止んで快晴。人疎らなゲレンデは圧雪されたばかりのスノウパウダー。天辺の栂の森は気温マイナス10数度。ダイヤモンドダストがちらちらするかなたのハンノキコースに向かってダウンヒル。

♪　山は白銀　朝日を浴びて　滑るスキーの　風切る速さ　グーンと迫るは　麓か谷か　おーおーおこの身も駆けるよかける。

あーなんと、俺はスキーがうまいんだろう。そう思った一日でした。

ハワイ帰りで大雪に

越田和男　　2月 9日

昨深夜、成田空港から9時間かかって横浜の自宅に辿り着きました。成田と都内を結ぶ交通各社がマヒ状態で、乗った京成の通常特急が立ち往生、数時間後にJR総武線が部分復旧したとの知らせに、寒風吹きすさぶ雪の夜道を30分歩かされたりして、やっと都内へ、東横線終電ひとつ前でやっと日吉に。

ハワイ4島（カウアイ、マウイ、ハワイ、オアフ）の快適なトレッキングの旅を楽しんで来た後だけに、年甲斐もなく遊び呆けたバチが当たったと理解してます。

ハワイ島のマウナケア4200mの頂上付近はさすがに雪の世界で、さすがに結構寒かったですが、山頂からの夕日が格別でした。

大峰・グランドイリュージョン

tani　　2月14日

（本誌「紀行・山行」ページに記載があります　編集）

乗鞍　位ヶ原山荘

kannroku　　3月 1日

卒業来50年ぶりかで位ヶ原山荘に行ってきました。懐かしい「甲南室」の木札が下がっており、蚕棚があった部屋はなくなっていました。昔の建物より200m程下手に移動したとのこと。 秋の紅葉時期は綺麗とか。思い出がいっぱいある懐かしい位が原山荘でした。

25日　乗鞍高原　美鈴荘　泊
26日　高原スキー場から第一、第二、第三とリフトでこれよりシールで肩の小屋口まで。富士見沢を滑って位が原山荘へ　位が原山荘　泊
27日　吹雪　酒盛り　位が原山荘　泊
28日　位ヶ原～高原スキー場～帰阪
参加者　山本薫、小西、柏、森本

柏　敏明

スキーを担いで、乗鞍位ケ原山荘に登って降りてきました。身の程を理解して、事前にスノーシューを購入して参加しましたが、結果は大正解でした。

2月26日、雲一つない好天に恵まれ、リフトを三つ乗り継いで終点からシールを付ける。途中でスノーシューに履き替えたのが良かったのか悪かったのか、スキーを加えて15キロの荷物が肩に食い込み、ホウホウの体で分岐点に着く。皆さんはそのまま肩の小屋目指し直登、小生はトラバースして1時間半掛かって位ケ原山荘に付きました。

管理人の六辻さんが出迎えてくれ、二日間とも我々だけとのこと。暫く玄関先で話し込んでいると、位ケ原の屋根を滑ってくる3人が見えました。部屋は甲南室。只、昔の2階の蚕棚は無くなっており、隣の畳部屋に甲南室の表札が上がっていました。

移築、増設されたと言っても、もう、四十数年になるそうで、昔は無かった食堂で、六辻さんと色々昔話をしながら鹿肉の鍋の夕食。小西さんと高校卒業記念に訪れた1961年春の位ケ原山荘のアルバムのコピーを渡す。

六辻さんも一時、鈴蘭荘に居られたそうで、福島清毅氏や敏さんの事も良くご存知でした。

27日は一日中吹雪。薪ストーブを囲んだり、豆炭炬燵に入っておでんでお酒をのみながら、一日を過ごす。2回程、ドーンと言う雪崩の音を聞く。

28日は前日の吹雪が嘘の様に晴れ上がる。只、雪質が悪く、キツいモナカ雪状態で、他の3人はそれでもスキーで滑り降りられましたが、小生の足前ではとても無理、最初から諦めてスノーシューで降りる事にしました。折角、スキーを担いで登って、 叉、担いで降りるとは。トホホ…。K2のポンツーンという16㎝もの幅のある馬鹿でかいファットスキーを履かれている山本さんはそれこそスイスイと降りて行かれましたが、後の二人は最初は少々悪戦苦闘。流石に馴れてくると、小生のスノーシューは取り残されてしまいました。スノーシューを持ってきて良かったとつくづく思いながらリフトの終点に着き、
やっとスキーに履き替えてゲレンデを滑り降り、皆さんの待っている駐車場に到着。近くの国民休暇村の温泉で汗を流し、一路帰途につきました。

スノーシューのトレーニングに行ったような山行でしたが、諦めていた雪の位ケ原山荘を五十数年振りに訪れ、青春時代に戻れたのが一番の収穫でした。

森本さん、山本さん、小西さん、色々とご迷惑をお掛けした事をお詫びすると共にお世話を頂き有り難うございました。

スキー

塩崎将美　3月17日

雫石で滑ってます。

今日は岩手山が綺麗です。

秩父の山ふたつ

越田和男　3月21日

今週、月・火と秩父の分相応の山と温泉を楽しんで来ました。一行は会社仲間の老人5人。

大霧山767m 前秩父の山。定峰峠から旧定峰峠に至る林道が残雪で閉ざされており、表面のクラストした重たい雪道を歩かされたが、冬枯れの尾根道との組み合わせで、かえって変化に富んだ山歩きになった。頂上からはまじかに武甲山、西の遠くに両神山など秩父の名峰の景観が楽しめた。

泊り場小鹿野町の赤谷温泉「小鹿荘」＠12,000円。沸かし湯ながら掛け流しで露天風呂付き。秩父にはこのようなあまり知られていない鉱泉宿が結構多い。

秩父・観音山598m。秩父31番札所「鷲窟山・観音院」の裏に聳える岩山。見上げるとうんざりする階段の登りや、残雪のトラバースなどもあり、ただただ我慢して登り切る。程良い広さの岩の頂上は秩父真っただ中の360度の展望だった。

塩崎さんの大山山荘

大森雅宏　3月23日

週末、塩崎さんの大山山荘に。ご参加は、米山さん・安井さん・塩崎さん・浪川さん・石原さん・大森。

夕食の「すき焼き騒動」のあと、話しが掲示板のことになり「動画が貼り付けられるか」どうか。で、短いの長いのいくつか撮ってきました。試してみましたが不首尾。4メガまでのファイル、拡張子も amc,3gp,3g2と条件がついていました。またどなたかお試しになってください。

あ、「すき焼き騒動」ですか。食材を入れる順番・たまねぎを使うかどうか、複数の奉行の勢力争い。まあ他愛のないことです。

が、ちょっと深刻だったのが「肉の絶対量」

価格とグラム数の読み違えで、お一人様ふた切れの超上品コースになりました。

いちい（一位）

残しておきたい書き込みあれこれ

中井久夫さんの本　ほか

中井久夫さんの本

越田和男　　7月14日

今朝の日経の読書欄のコラム「半歩遅れの読書術」に精神科医の斎藤環氏による「中井久夫コレクション」の絶賛紹介あり。中井ファンでない方でも必読の記事です。ついでに紹介された近刊昭和天皇論「昭和を送る」も是非読んでみたくなりました。

大森雅宏

中井先生のお宅に山嶽寮原稿のことで伺ったことがあります。そのとき、「この本は今度発売される本ですが読んでみますか」と『樹をみつめて』をいただきました。私の理解の及ばない部分も実は多かったのですが、特殊な観察眼と洞察力をお持ちの方と思いました。樹を見たら森がわかる、森を見たら葉が読める、そんな感じでしょうか。

以来判らないは判らないなりに新刊が出るたび拝読しています。医書は別ですが、随筆は半分くらいは楽しく読めます。「臨床瑣談」とか「清陰星雨」とか「こんなとき私はどうしてきたか」などは半分よりだいぶたくさん楽しめました。

（山本恵昭岳兄も「ちくま学芸文庫」の中井久夫コレクションを読んで、「すいすい読み進めるところもあるんですけど、手ごわいところがいっぱいあります」と言っていました）

越田さんご紹介の日経ほか切抜きを添付します。二つ目のはみすず書房の広報紙から、最後の朝日の記事はネットに紹介されていたものからの借用です。グーグルで検索するとたくさん出てきます。　（添付一部省略　編集）

日本経済新聞　2013年

SUNDAY NIKKEI

半歩遅れの読書術

斎藤　環

中井久夫の言葉　旅先でこそ深まる味わい

今年のゴールデンウイークは竹富島で過ごした。沖縄は毎年行くが、いつもは読み切れないほど大量の本を持参する。今回の荷物はいつになくコンパクトなものだったので、妻にも驚かれてしまった。

小振りのキャリーバッグに詰め込んできたのは、精神科医・中井久夫の「中井久夫コレクション」（ちくま学芸文庫）全巻だ。実はある仕事の関係で、中井の著作を集中的に読み直しているのだ。

書斎より研究室より、旅先で読む中井久夫はことのほか心ゆるものがある。まだ私が若かった頃、学会出張の寝台車などで読みふけったその著作に、幾度励まされてきたことだろう。あの頃の中井は自身が旅の話を多く書いているせいあろうか。南国で読む「霧の中の英国経験論」（「躁の病い」同文庫）所収）などは、しみじみと味わい深い。

問題は、読みながらたびたび打ちのめされてしまうことだ。いままで自分の知見のように書いた付話したりしてきたことが、実は中井の口移しだったと気付かされるからだ。それも一つや二つではない。それだけ血肉化されてきたとも言えるわけだが、書き手としては恥じ入るほかはない。

実は今度の旅には、文庫の勧めであるこの一文は、ばかりではなく、若き中井が筆名「檢林達夫」で出版した「日本の医者」（日本評論社）も持参していた。本書で指摘、あるいは予測されている日本の医療の諸問題は、現在もその相当部分が未解決のままだ。透徹した現状認識が、しばしば志半ばで斃れた盟友の死を悼んで書かれた。あの温顔の背後にこれほどの激情が秘められていたことに、私はいまさらお反倒される。本書は中井自ら「若書き」と認めつつも、その後の行動規範であり続けたという。

予言と似てしまう好例がここにある。

とりわけ「抵抗的医師と「昭和を送る」がとうとう出版されたことである（『昭和を送る』（みすず書房）所収）。本論で導入された「君側の奸」コンプレックス」なる概念は、発表されて四半世紀が過ぎた今もなお「雅子妃バッシング」などの形で繰り返されている。

かくして今年の沖縄旅行は、中井の言葉で埋め尽くされた。数々の印象的な言葉で彩られた旅の思い出は、いつまでも色褪せることがない。さて、来年の旅の「道連れ」は誰にしようか。（精神科医）

とって今年の嬉しい驚きは、あの伝説の昭和天皇論

山本恵昭

以前、大森さんに中井先生のお話を聞いて、「精神科医がものを書くとき」（ちくま学芸文庫）を読んでみました。私の勉強不足で、精神科医サリバンがどうのこうのといった部分など、よく読みこなせませんでした。

でも、統合失調症問答のところで、全体としてコントロールさせている脳のそれぞれの機能が、暴走を始めようとするときの安全装置として精神障害をみてみると、目のうろこがはがれる

ように整理できたように思います。

以下、一部抜粋です。

「前頭葉なり何なりが暴走しようとするので、血液供給量を少なくして暴走を食い止めようとする安全装置が働いている。(憶測です)」

「鬱病でいちばん辛いのは、いちばん得意な能力がいちばん低下したと感じること。統合失調症の発病の直前には、ふだんできたらいいなあと思っている能力がぐっと出てくるように感じられること。」

「鬱病は(前頭葉の)暴走をかなり手前で制動を掛け、システムの火を落としている。統合失調症では、この制動が働かなくて、暴走の直前まで行ってしまう。原子炉の暴走の直前にも規定の出力の数百倍の出力が出るそうですが、それと似た状態が現れます。」

「(その瀬戸際の状態に留まってすばらしい詩を書いたり、科学の発見をしたりすることはありませんか。)あると思います。実際のそうではないかという詩人や数学者もいます。」

朝日新聞の読書欄の書評を紹介

越田和男　8月 4日

ついでに、とは一寸失礼かも思いつつ、今朝の朝日新聞の読書欄の書評を紹介しておきます。

中井久夫著「『昭和』を送る」みすず書房 3150円

評者は大谷大学(哲学)の鷲田清一教授。文頭と文末のみ下記しておきます。

「時代の流れにふと、えもいわれぬ違和を感じるとき、あの人ならどう受けとめるだろうかとその発言にふれたくなる、そんな書き手がだれにも数人あるのではないか。わたしとってはずっと、中井久夫がその一人であった。・・・(中略)・・・・昭和という時代にもろもろの精神にかかった凄まじい〈圧力〉がまるでまるで鎮魂歌のように綴られていて、その言葉の重量に圧倒される。

社会評論でも随想でもないこの独自のエッセイ集、「エッセイ」の原義どおり、不二の「臨床眼」による〈試み〉の記録である。」

廣瀬健三

中井久夫先生は甲南高校が新制に成り第二回目の卒業生ヤネ。この学年の先輩は将に文武両道の人多し。野球部の広井さんは慶応に進み、かの巨人のエースで監督も務めた藤田と慶応でエースの座を競ったが、肩を壊してしまった。私事になりますが、小生が三井物産勤務時に、偶々輸出商内の手ほどきをしてくれたU氏も中井先生とクラスメイトで共に京大へ。このU氏はすごくシャープでスマートな方でした。甲南の後輩という事で、どんくさい小生を懲りずに指導してくれました。感謝！(惜しくも9年前に御逝去)

中井久夫先輩の連載

越田和男　9月30日

今日の朝日の夕刊から、コラム「人生の贈りもの」で5回連載が始まりました。中井久夫フアンの方はお見逃しなく。

大森雅宏

越田様　ニュース有難うございます。

朝日は高校生の頃社会科の先生が熱心な読者でした。その頃はよく読みましたが社会人になるとちょっとセンが違うなあ。最近はあんまり縁がありません。でもそこは中井先生のこと。5日連載なら駅の売店で。明日の朝買えるかな、とも思いましたが、「朝日新聞デジタル」というのがあるわと手続きしました。無料会員のクチです。朝日さん済みません。早速拝見しました。

朝日新聞といえば八木君の父上が社会部の記者をしておられました。脱線すると長くなるので話はここまでに。

中井久夫先生の文化功労者

大森雅宏　10月25日

昼のニュースで中井先生の顕彰の事知りました。職場から書き込む訳にもいかないので、帰りの電車で打っています。

旧制の方はじめ、今までにも正何位とか勲何等などあったと思いますが、文化功労者は格別ですね。統合失調症に関する功績ではないのはなぜかなあという気はしますが、いずれにしても、高い評価を受けられて、素晴らしいなと。

身内が入院していて、今夜は付き添いなのですが、一冊持ち込んでじっくり読んでみます。

越田和男

甲南山岳会の会員が文化功労者に選ばれたニュースに接し、大変うれしく存じました。精神科医にして研究者、翻訳・著作活動に今なおご多忙な日々を送って居られる中井さんに、何年か前の山嶽寮に、終戦直後の穂高涸澤合宿のことを書いてもらっておいて良かったですね。あの時は同級生（昭和27年新高）の小原耕治先輩の勧めで、大森雅宏君がご自宅までお願いに行ってくれたのでした。

越田和男

今朝の朝日の天声人語は、中井久夫氏を絶賛。大森君指摘の統合失調症の治療への貢献にも言及されています。賀茶さんから聞いていた、テントの中でドイツ語やらフランス語が飛び交ってたお話とも符合する箇所あり。お見逃しなく。　　（次ページに）

甲南学園の新聞広告　越田和男

今日の日経の夕刊に、めずらしく甲南の広告記事が一面全面に掲載されています。3人の執筆者の内2人（中井久夫氏と松下ヒロ氏）が山岳会員で、中井先生は山岳部のことなどにも言及されています。また旧制時代の山岳部員達の写真も少し小さすぎて見にくいですが載っています。ご覧あれ。

大森雅宏

越田さんご紹介の甲南大学の広告のこと、画像を貼り付けます。

画像1　中井先生の1枚目

2013年（平成25年）11月20日（水曜日）　8

生徒と対等に接する、教師陣との関係性のなかで、様々な個性が育まれました

中井 久夫
（精神科医・文筆家　元甲南大学教授）

統合失調症の治療や研究で名高く、阪神大震災では心のケアに尽力した。詩の翻訳やエッセーの分野でも活躍。読売文学賞や毎日出版文化賞を受賞。その功績から、本年度の文化功労者に選ばれた。

当時の甲南生は、スマートであることが大切でした

終戦の翌年、旧制の甲南高校に入学しました。受験で訪れたとき目にした学校の正門は、柱が低くて扉もなく、外に開かれていました。校名も小さな表札に記されてあるだけ。当時、多くの学校で感じた戦争の名残りのような官僚的ないかめしさはなく、真の意味で開放的な学校だと、すぐ気に入ってしまいました。

7年制学校で、図書館の蔵書は充実していました。小学校を卒業したばかりの生徒でも、哲学書などを読むことができました。貴重な洋書の原書に触れ、ドイツ語とフランス語を熱心に勉強するきっかけになりました。敗米の学生はラテン語を学んでいると知り、敗戦の悔しさも手伝って、少し背伸びをするつもりでラテン語も学びました。

教師は若いながらも、熱心で幅広い知識を持つ人が多かったと思います。幼い生徒に、難解でも将来を見据えた授業をして

画像2　中井先生の2枚目　　（次ページに）

中学受験の際の正門の印象についてはいくつかの随筆でも取り上げておられます。

甲南の新聞広告の写真、「正門に集う健児」は「鳩杖」のカットにも使われていました。

「白熱した授業」も「鳩杖」にあったように思いますがちょっと記憶があいまいです。

山岳部の写真は奥山さんや福田さんの写真資料にもあったものです。福田さんのアルバム・蔵書は甲南の資料室に寄贈されたと聞いていますので、その中から選ばれたものでしょうか。

「正門のつい最近」は先日部室を片付けに行ったときのものです。木々の成長でずいぶん感じが変わりました。

画像3　正門のつい最近

くれました。とはいえ一方的な押し付けではなく、短歌が得意な生徒を「天才だな」と賛辞するなど、対等で親密な関係でした。生徒同士も同人誌を作ったり、好きな科目の勉強会を開いたりと自主性がありました。勉強以外の分野でも、他人に負けない「芸」を持っている個性的な生徒ばかりでしたが、まとまりがありました。

当時は文部省（現文部科学省）の進級基準が厳しく、クラスの一割の生徒はパスできないといわれていました。みんなで夜まで学校に残り、判定会議の結果をいち早く聞きだすのが通例でした。進級できなければ一大事ですが、悲観することもなく、一種のお祭りとして楽しんでいました。高い水準の勉強をしているという自負があったし、実際、進路に困ることはない時代でした。

内心は別にして、進級や進学ごとに目の色を変えることなく、悠々としているべきだという発想が、当時の甲南生にはあったと思います。例えば、試験前日に友人が遊びに来たら、黙って付き合うのが当然でした。遊ぶ間があれば試験勉強をしたいのが本音でも、それを口にはしない――。目先の点数や結果ばかりを気にする、いわゆる「ガリ勉」タイプは、あまり評価されず、スマートであることが大切でした。

スポーツも同じです。山岳部では荷物を分けて山に登るのですが、実は全員「俺の荷物が一番重いのでは」と考えながらも、誰も不満を口にしなかった。単なる強がりであっても、それが険しい新ルートの登頂を実現させたのではないでしょうか。

型に当てはめきれないのが、甲南らしさでは

精神科医として多くの患者と接し、母校で教授を務めました。40数年を経ても、甲南大学には昔と同じ気風が受け継がれていると感じます。全国から学生が集まるようになりましたが、すぐ甲南カラーになじむようです。のびのびした雰囲気は健在だと感じます。

ただし、「甲南生かくあるべき」というステレオタイプの押し付けがもっとも似合わない学校。それが甲南だともいえるでしょう。これからの学生に「自然に身についてくるものがあるとしたら、それは私が旧制高校時代から過ごした日々で感じた甲南らしさと、大きく変わってはいかないでしょう。

▲自由な校風を象徴する校門に集う健児たち

▲「正志く 強く 朗らかに」スポーツを通じ心身共に成長した生徒

▲教育熱心な教師と向学心に富む生徒による白熱した授業

企画・制作
日本経済新聞社クロスメディア営業局　広　告

天声人語

「知の巨人」と形容させていただくことにする。大げさだとは思わない。精神科医で神戸大名誉教授の中井久夫さん(79)である。統合失調症の治療や研究で名高い。阪神大震災では心のケアに力を尽くし、おとこい文化功労者に選ばれた▼臨床を大切にする医師でありつつ際立った文筆家でもある。ギリシャやフランスの詩を翻訳し、文学賞も受けた。その視野は誠に広大で、戦争と平和についての鋭利な「観察」や、「ひととしての」昭和天皇論といった重厚な論考も多い▼昭和9年生まれの中井さんは恐るべき子どもだったらしい。敗戦後、集めていた切手を売り払いラテン語の独習書を買った。西欧の同世代がライバルだと思っていたという。高校時代には、高名な哲学者の蔵書で英独仏の文学に親しんだ▼そんな中井さんが少年少女に向けた読書案内を書いている。異色の内容である。いわく、教室で輝きすぎるな、一番になんかなるな。児童生徒の間にもやっかみはある。〈あなたは今花咲く必要はない〉。そして一目置く同級生を宝とせよ、と▼推薦図書の名前を挙げているわけではない。総じて背伸びの勧めといっていい。なかで思春期の男女への最高の贈り物かと思えるのが次の言葉だ。〈読書は、秘密結社員みたいにこっそりするものだ〉。そうだ、10代の頃はそういう感じで本を読んでいたのだとヒザを打つ▼きょうから読書週間である。知の巨人をめざさなくても、中井さんのようなみずみずしい感覚は学びたい。

2013・10・27

●購読・配達のご用は 0120-33-0843(7時～21時)　●紙面へのご意見・お尋ね お客様オフィス 06-6201-8016(平日9時～21時、土曜は18時まで、日曜・祝日休み)

10月27日　天声人語

部室の明け渡し

淋しいお知らせ

平井　幹男　　8月 9日

大学の学生部より部室の整理と明け渡しの依頼がありました。8月24日土曜日に行って来ます。部室に思い出以外の忘れものがある方はお知らせ下さい。又一つ、青春がセピア色を増しました。

越田和男

いよいよ明日は部室の明け渡しですね。

もう50年も前のことで、今更思い浮かびませんが、他の運動部の部室と比べ、独特の（知的な？）雰囲気があったような気がしてます。壁に故福永隆一先輩の写真があったのを思い出します。山岳会で何らかのか方法で保管しては、と思いますが、如何でしょうか。外観、室内の写真とともに、HPにアーカイブを作るとか。

松成

久しぶりにサイトにアクセスしました。

現在、仙台在住で出張で月曜から金曜まで福島で仕事してます。

部室が明け渡しとはびっくりです。テスト勉強したり、飲んだくれたりで学生生活が部室を起点にして回っていたので思い出は沢山あり、非常に残念です。

阿部康彦

吉川先輩の連絡で部室が明け渡された事を知りました。私が入部した20年ほど前は歴代の先輩方々が置いていかれ多くの装備や書籍、落書きしたりしたものもそのまま残っており、部室が一つの文化遺産の域に達していたといっても過言ではなかったと思います。特に木製のテーブルについては、20年前に聴講生で甲南大学に通われていた　徳末大先輩（当事70歳位であられたと思います）が「この机まだ使こうてんのか！これ僕が学生のころからあったと思うわ」とポツリと仰られた事が衝撃的でした。ただのボロ机と思っていたらそんなに古い物だったとは、それ以来諸先輩方もこのテーブルを使って色々な計画を練られたり道具の手入れをされたのだと思うと、何ともありがたい机だなあと思い大切に使っておりました。あの机も一緒に壊されてしまったのでしょうか？残念です。

部室の写真　　大森雅宏

1　福永隆一氏　　在学中　小窓尾根

2　森　静也氏　在学中（列車事故）

3　薮内昭博氏　卒業後　鹿島槍　社会人パーティで

越田和男

部室明け渡しに立ち会われ、整理にご協力いただいた諸兄に厚く御礼申し上げます。山岳部の部室はほんとに居心地のよいところでした。冬は倉庫からちょろまかしてきたストーブに堂々と石炭をくべてひねもすだべったりして。

さらに思い出すのは、山岳部以外の人たちで結構山岳部の部室を愛用されていた方々の存在があります。主に私より上の学年の方々だったですが、ラグビー部、アメリカンフットボール部、鉄道同好会などの方々が入り浸っておられ、それはそれでなかなかいい雰囲気だったのです。これを利用する学生が居ないなんて信じがたいことです。

ご報告

平井　幹男

谷君のおかげで最後に残されたクライミングボードを運び出し、いよいよ部室の片付けが終了しました。悲しいですがこれも一つの時代の節目かもしれません。以上簡単ですがご報告まで。

片付け風景

思い出の机

建物の南面　ボルトとホールド

片付けのメンバー

90周年記念事業について

90周年記念事業について、次の通り計画しています。

詳細については改めてお知らせいたしますが、ご同伴のご家族も含めて大勢の皆様のご参加をお待ちしております。

記念式典	日時	平成27年10月10日（土曜） 午前11時～午後2時30分
	場所	甲南大学 （神戸市東灘区岡本8-9-1）
	内容	パネルディスカッション
		懇親会
	会費	5,000円 （予定）

山嶽寮 第70号について

次号の山嶽寮は従来の内容に皆様からのメッセージを盛り込んだものを計画しています。次の要領にてメッセージをお待ちいたします。また、旧制の頃の動画をはじめ思い出の写真や資料をDVDにまとめたものをお配りしようと計画しています。資料の提供についてご協力をお願いいたします。

◎ メッセージをお寄せください。

○ 「90周年に寄せて」

○ 「山の思い出」　1 山岳部入部の動機　2 心に残る山　3 心に残る歌　4 心に残る出来事　5 心に残る笑える失敗 など

（全部でもいくつかでも、長くても短くても、お寄せいただいた原稿はしっかり活用いたします。箇条書きのメモでも結構です）

○ 「この1枚」　思い出の写真とそれにまつわるエピソード

◎ 資料提供をお願いします

・お手元の写真をご提供いただけませんか。

・プリント・ネガをデータ化します。

・ご提供いただいた資料はデータ化ののちご返却いたします。

75周年記念号の際ご提供いただいた写真（記録済み）と今回ご提供いただく資料をまとめてデータファイルにまとめます。

「メッセージ」・「写真」は作業の都合上、平成27年1月末を目安にお送りください。

編集後記

今年も皆様の原稿で山嶽寮をお届けします。ご寄稿いただいた皆様ありがとうございました。

いまどきはワープロファイルで原稿をいただいて、印刷フォームに整えてメールに添付、内容の確認をお願いすることがほとんどになりました。手書き原稿の頃、たとえば鷲尾さんの「六甲山麓からのたより」はいつもきまってブルーのインク。太めのペン跡、ちょっとクセ字を、これは「を」かなそれとも「と」かなと思いながらキーボードに向かうのも楽しい時間でした。とはいえ楽しい時間も分量との兼ね合いですから、編集としてはワープロファイルのほうがありがたいのが率直なところです。実はいろいろ手間のかかる編集作業ですが、会員諸兄より早めに読めるのが「役得」。私が「役得」をたくさん楽しめるよう、次号もぜひたくさんご寄稿をお願いいたします。

そうお願いしますと、「長いのはムリ」とか「書くことがアラヘン」とかのお声も聞こえてきそうです。次号は前のページにありますように、「山岳部入部の動機」とか「心に残る山」とかアンケートみたいな項目で、短いのOKのコーナーも計画しています。たとえば3つめの「心に残る歌」。『あの合宿中にラジオから流れたのはこればっかりやった』とか『ラジオ関西の電リクでかかった曲とメッセージがね…』とか、話題はありそうです。「笑える失敗は」、ご自分のことでなくても結構です。でも笑える程度の内容で。いろいろなメッセージをお待ちしています。待っていても原稿が来ないときは、つてを頼ってお願いに回ります。

それからもう毎年のことですが、ホームページ担当の塩崎マスター、会員短信をまとめてくださった事務局井上さんにもお礼を申し上げます。

あ、もう一つそれから。この号は少し彩りを持たせようと写真のカラー化を試してみました。コストの加減でパートカラーですが、収支状況がよくなったらだんだん増やせるかもしれません。収支状況。そうです。年会費。諸事情をご賢察のうえ、会費納入に一層のご理解をお願いいたします。

編集後記　その2

編集後記も書きあげて原稿ファイルの最後の確認の頃、中井先生から封書が。字を書くことがご不自由とのことで「パートタイム秘書」さんからの聞き書きの原稿です。「日時を大幅に遅れて」とありますが、間に合わせます。わくわく拝見してちょっとあわただしくパソコンに向かい、翌日お住まいの施設をおたずねして原稿のチェック。「ここで一度区切った方がいいですね」、「ここはこのようにしてください」とてきぱきご指示。8月31日に印刷原稿が完成。

小学生の頃、夏休みの宿題は最終日まで温めていたことを思い出しながら、編集終了となりました。

原稿宛先　山嶽寮編集担当　　大森雅宏
電話／ファクシミリ　　Eメール

山 嶽 寮 第69号

甲 南 山 岳 会

神戸市東灘区岡本 8-9-1 甲南大学内

2014年（平成26年）10月

編集人 大森雅宏　印刷 カツヤマ印刷